

る單獨の事實に就ては、之を綜合し概括した抽象の命題、斷案、理路（固より吾人の情緒を動かす得るものに限る。）に深い關係を有してゐた。ポープの詩の特性を知るには、寧ろ此意味の要素、即ち個體を離れた知的分子、を獨立した一部分と見做す方が便利である。そこで彼の作物の梗概を矢張り前年の講義の通りの分類に従つて區別して見る積である。

（注意。尤も後から申した方の分類の區域を擴げて、單に具體的の事象のみならず、均しく之を抽象的の方面に應用する事は出來ないでもない。例へば私が茲に「愛は徳なり」と云ふ。すると之は個人、個體を離れた概念である。然し眞偽の評價は無論出來る文句である。たゞ眞偽の評價のみならず、善惡の方面の評價も出來るかも知れない。それから「正、邪を伏す」と云へば眞偽の評價は無論、壯劣の評價も出來ないとは限らない。眞偽と美醜と重なる場合はどうかと云ふと、善と壯を幾分か美に連結すればすぐ成立するのは當然であるが、美の區別を非常に嚴重に且つ狭くすると一寸六づかしくなるやうに思はれる。其代り此種の眞理をあらはすときには、大抵形相を具したものを道具に借りてくる事が多い。多くと云つて贅澤な意味で云ふのではなく、ある場合には殆んど必要になる。だから其場合に應じて美醜の感を動かす得るのは明らかである。但し此美醜の感は、ある意味に於て眞理を代表しつゝある形相ある事物に即してゐるので、單に之を使用する方法即ち技巧丈に對して起すものとは全然同物でない様に見える。猶よく考へた

いふ

出が不味かつたので、存外くどい説明が必要になつて御氣の毒である。まだ申したい事はあ

るが、大概私の意味が通じたらうと思ふから、此位にして置いて、これ丈の御約束が致したい。

——ポープの詩に就て私が知的要素と云つた時は、個體を離れて吾人の知力に訴へる、概括的の道理の表現である。（但し表現法には具體なる事象を借り用ひて居るかも知れない。）即ち、此道理を、自然に内部より事實として發展する、格段な人もしくは格段な物に即した知的分子ではない。零碎の諸例を萃めて、その中から道理丈を引き抜いた表現である。次に此知的表現は眞偽の評價以外に時として、善惡、美醜、壯劣の評價をも許し得べきものを含んでゐると御承知を願ひたい。（「孝は天の道なり」と云へば其眞偽の程度如何で吾人を動かすと共に、善惡の意味からも吾人に訴へてゐるのは明かである。前節に注意した通りである。）第三に此種の知的分子は文學的要素として、吾人の情緒を動かす事が尤も薄弱なものである。是は前年の講義に述べた通り、毫も補足の必要を認めない。たゞ表現の方法に一種の技巧を用ひて多少其色を濃くする事が出來るのみである。

是丈約束して置けば、あとは實際的な所になるから、前年の講義の類別法を用ひて、ポープの作物の梗概を文學の四要素に割り宛てゝ行さへすれば濟む。六づかしい議論が出る餘地はあつて

も、出す必要がなければ、まあ好いとして歩を進めて行く。で、前に擧げた作物のうちで、自然を詠じたものが二つある。『牧童歌』と『キンゾーの森』とが是である。超自然的要素の入り込むものが一つある。『髮盗人』が是である。人事的要素(即ち人情の表現)が主となつたものが二つある。『アベラードに送れるエロイザの消息』と『亡き薄命の女を吊ふ歌』が是である。槇柴には述べなかつたが、オギツ下の翻譯たる『サツフォー』も此部類のものである。最後に知的要素の勝つたものは『批評論』『人間論』『尺牘集』(即ち『道德篇』『ホレースに倣ひて』の四者である)。

尤も以上の分類は單に優勢なる要素に就いて區別したまでで、一句一節に就ての云草ではない。殊に『髮盗人』の如きは超自然的要素が主眼といふのでもなく、只趣向として入り込むに過ぎないのである。尙此外に『ほまれの殿堂』『イリヤツド』『オヂセイ』及び『ダンシアツド』が残つてゐるが、これ等はいろ／＼な雜駁な分子から成立してゐて、一言に何だとも言ひかねる。——これ概略分類が出来た。此分類から何んな結論が得られるか、それが次の問題である。

(一)ポープの詩には知的要素が多きを占めてゐるといふ事が第一に眼に付く。彼の著作中で最能く人の口にするものは『批評論』と『人間論』とである。さうして兩方共に議論である。全體が議論である如く、局部々々も理窟である。其外『道德論』と云ひ『ホレースに倣ひて』と云ふも、皆このポープ一流の議論に外ならぬのである。所が今先き御注意をした如く、前年の講義に大分長く御話をした如く、此知的要素と云ふのは文學的に云つて效果の尤も薄弱なものである。此薄弱なものを土台として、其上に詩人が一代の名を成さうとする様な大作を試みたのが、ポープの失敗ではあるまいか。

尤も古來から人口に膾炙した詩句、格言其他で、此知的要素から成立してゐるものは澤山ある。ハムレットの獨語もさうである。プロスペロの獨語もさうである。文學書中から此種の要素を悉く引き抜いたら、文學は著るしい損害を受けないとも限らない。又其中には吾人日常の生活に存外適切な關係を有つてゐるものや、内面生活に交渉の深いものも多くある。然し同じ關係と同じ交渉を格段な例であらはしたものと比べると甚だ効力が薄くなるのは争ふべからざる事實である。沉んや直接に當面の人事に縁の遠い哲學上の議論とか思索とかを土台として詩を作るのは固より考へものであらう。『人性論』と云ひ、『批評論』と云ひ問題はえらさうに違ひない。然し問題がえらく大きいと云つたからと云つて、之を詩にすれば、えらく大きな詩が出来ると思ふのは無理だらう。

たとへば女を愛する様なものである。その女の容色、器量、服裝、是は眼さへあれば誰にでも分る。其氣立て、情合、氣前、是は交際して見なければ分らない。次に其學問、見識、才藻、是

は教育がなければ何時迄交際しても知り様がない。最後に肉を離れた靈——是は認められるものだからだか分らない。此等の資格のうちで外貌に迷つたと云ふと一番下等に聞える。情合に惚れたと云ふと少し深くなる。見識に戀したと云ふと六づかしくなる。靈を云々するに至ると神秘になる。此四要素を一段毎に登つて戀をして行くと段々上等になつて行く様にも取られる。しばらく、さう致しても差支ない。が、赤裸々の事實から云ふと何うも左うでないらしい。私の考によると、古往今來戀愛を成立せしめた手柄の大部分は單純なる容色である。遠き未來は知らず、今から五百年や六百年経つた所で、この事實に變化はあるまいと思ふ。して見ると、よし淺薄だ皮想原だと云ふ意見を許しても感覺的要素は最も人の心を動かす力のあるもので、しかも此要素が人を動かすことは、妻君を撰ぶ許りではない詩を撰ぶ上に於ても同様である。ポープが明瞭なる事相を具したる現象を歌はないで、空漠な哲理じみた問題を捕へて來るのは、自分では高尚な積りかも知れないけれども、丁度女が自分の容色は構はないで、學問ばかりして、是で天下の男子を充分惱殺するに足ると考へてゐる様なものである。男子は其婦人の學問に對して敬意を拂ふかも知れない。然し奇麗でなけりや中々惚れやしない。

もう少し前の喩を引き延ばす。容色はしかく女人に於て大切である。けれども情合、見識（もしくは靈？）是も決して度外に置く事は出來ない。是に於て狡猾にして糊塗を好む人類は一策を

案じ出した。容色を捨てぬと同時に、他の要求をも満足せしめんと工夫した結果は遂に容色を以て、あらゆる他の資格の象徴として、容色は凡て是等を満足に代表するものと見做すに至つた。

馬鹿も利口も、親切も不人情も乃至一切の内的生活も悉く目元口元に萃まると號して、自分の好きな顔の裏に、勝手な資格を忍ばせる。詩も其通りである。單純なる感覺的な事相では物足りない、だから此要素を通して哲理を表はしたり、人情を訴へたり、又は宗教上の情熱を訴へる。中にも哲理とか思索とかいふものは單獨に云ふと尤も薄弱だから、此援助を受けるのが成効の一方である。ポープは自己の哲理思索を高しとして、自己の技巧表現を頼みとして此援助を蔑視した。

是丈の考を頭の中へ置いてポープの詩を讀んで行くと、大體の上に於て彼が果して成功してゐるか、將た失敗してゐるか、多言を要せずして自から明かである。ことに吾々日本人は父祖傳來の習慣として、詩と自然、自然と詩、此兩者を離しがたき程に結び付けてゐる。その吾々の眼に映じたるポープの成敗は説明する價値もない位である。

吾々の考では『批評論』や『人間論』の如きものを何故詩にする必要があるかと迷はざるを得ない。是等は議論として見ても頗る散漫で、秩序も立たなければ段落も不分明である。カント(Kant)が講義の中へ『人間論』を引用したと云ふ噂や、ラスキン(Ruskin)が大にこれを賞揚したと云ふ話は、詩として價値があるといふ證據にはならない。却て下、クインセイの如きは『人

間論』を貶して「混亂の勝利」(Triumph of Anarchy)と云へる迄に、脈絡が整つて居らぬ。ポーが如何に頭腦の不透明な男でも、若し散文で書いたとすれば、これ程までには成らなかつたらうに、明瞭に推論を示すべき性質のものを故らに詩形といふ拘束の下に入れて、分るものを態々分らなくしたのではあるまいかと疑はれる。『ホレースに倣ひて』の如き尺牘は、梗概を一括するにさへ骨が折れる位である。脈絡を追ふて推論の順序を明示すべき性質の問題を取つて、而もその筆端を束縛する以上は、其問題の人に及ぼす効力は束縛を受けるだけ其れ丈下落する譯である。ポーは甘んじて自家の取扱ふ問題の効力を下落させながら、一方に於ては何等の利益をも得て居ない。あの乾燥な抽象的問題が彼の Heroic couplets (アイアンビツク十音對聯句體)にかゝつて何れ程詩的に成つたかと云へば、全く無効であつたと云ふが適當であらう。彼の遣口は生で食ふべき蜜柑を茹て、味噌を付けて喰はせる様なもので、不味いと云へば外の者が遣れば猶不味からう、已だからまだ此位に料理が出来たんだと威張るのと一般である。

然しポーが此様な詩を書いて堂々と詩人風を吹かして居た所を以て見ると、彼は詩と云ふものに對して、後世の英人とは大に異つた意見を持って居たかも知れない。況んや日本人などとは到底兩立すべからざる考へから出立して居たのであらう。一體日本人は餘程詩的であるけれども、人世觀とか世界觀とかに成ると頗る淺薄なもので、古來からして是等が主に成つて出来た作

物は戯曲でも小説でも詩歌でも殆ど無いと云つて宜しい。元より儒教と佛敎から得た哲學的な分子は澤山入込むで居るけれども、是等は單に習慣上一種の裝飾として用ひられるので、決して作者の内心から湧き出したもので無い。其證據には何れを見ても千篇一律、同じ様な事ばかり書いてある。讀者も之れを見て人間を知るとか、眞理を究めるとか、人世の眞相を窺ふとかの便宜には爲なかつたので、單だ字句が綺麗だとか、文句が旨いとか云ふ様なモザイク式の一字一句を嘆稱して居たものである。明治の初年ですら矢張斯うであつた。だから日本の文學から此習慣的に行はれた哲學を除くと、全く自然の美、人情の粹の極めて單簡なる表現になつて仕舞ふ。(特に歌杯は其極端な一例である。)幾百年の間こんな文學に養はれて來た日本趣味の眼で以て、突然西歐の詩に接すると、餘りに懸け離れた相違のあるのに驚く事が多い。日本や支那の詩歌文章が好きだからして、西洋の者も文學に變りはあるまい位に考へて外國文學を遣り出すと、大變な失望に陥る。現に私なども遣り出した當時は慥に其一人であつた。此れも詰らん、彼れも詰らんと思つた。然もそれが有名な傑作なんだから心細くなる。甚だ不愉快である。斯様に日本人(在來の)と西洋人との間には、相違がある。普通一般の詩に對してさへ斯であるからして、西洋の詩の中でも特に理窟深いポーの詩に向つたら猶更辟易する譯である。先づ日本人の趣味から云へば、短かい抒情詩(Lyric)とか歌謡(Ballad)とか云ふ様な簡單な者が最も氣に入る譯であるの

に、其抒情的要素の殆ど缺如したる、又歌謡など、は正反對な『批評論』や『人間論』を讀めば、全然詩らしい感じは起らないに極つて居る。それをポープの方では立派な詩だと主張するのであるからして、詩と云ふ者の定義も随分廣い者だと始めて氣が附かねばならん。氣が附いた以上は是非とも考へたくなる。

其處でポープなる人は詩に對して、絶對的に誤つた考へを有して居つたのであらうか。絶對的に誤つて居つたならば別に研究する必要も無い、研究するだけ愚である。然し後世にはバイロンなど云ふ崇拜者が出来るし、ラスキンも *The most perfect representative we have since Chaucer of the true English mind.* (チョーサー以後この人に於て始めて眞正なる英國人の最完全なる代表者を見る)とまで讚める。又詩風格調共に全然別途に屬するスキンバアン(Swinburne)と *Matched on his own ground he never has been nor can be.* (彼自身の立脚地に於ては、これ迄何人も彼に拮抗する者が無かつた、又恐らく有り得まい)と云つた位であれば、風潮の推移した今日の英國詩壇に在つても、或一派の人々からは重んぜられて居る詩人に相違ない。それは外國人の批評で、吾々日本人はそんな批評に耳を傾ける必要は無いと云つて仕舞へばそれ迄である。又いくら外國の批評家が讚めても吾々が面白く思はんものは矢張面白くないのだからして、無理に面白くなる必要も勿論ないのであるが、兎に角堂々たる大家が斯程に賞

揚するのは夫れ相當の理由のあることに相違ない。換言すればポープの詩に對する考へも絶對的に間違つたもので無いと云ふことだけは慥かである。若し根本からして絶對的に間違つて居たとすれば、ポープの反響が二十世紀の今日迄續くと云ふ筈がまあ無いと云つても可からう。ラスキンやスキンバアンの言葉に一顧する價值があるとすれば、ポープの詩に對する考へも頭から馬鹿にする譯には行かない。馬鹿に出来なければ、ポープの詩觀も一應は考へて、それに對する何んな根據があるかと調べて見るのも多少の參考に成ることであらう。

『人間論』の序を見ると、*"If I could flatter myself that this Essay has any merit, it is in steering betwixt the extremes of doctrines seemingly opposite, in passing over terms utterly unintelligible, and in forming a temperate yet not inconsistent, and a short yet not imperfect system of Ethics."* (若し余が此著にして、何等かの價值を有するものと云ひ得べくんば、それは本書が外見上相反せるが如き兩極端の教旨の間に在つて舵を操れること、かの全然不可解なる言辭を脱却せること、及び中庸を得て而も矛盾に陥らず、簡單を旨とすれども而も不完全ならざる倫理上の體系を形成せる所に存すと云ふを得べし)と云ふ節があるが、前に述べた様な日本人の讀詩眼から見ると、まるで詩の序とは受取れない。全く論文の序である。

ところが其次の節には這んな事がある。*"This I might have done in prose; but I chose*

verse, and even rhyme, for two reasons. The one will appear obvious; that principles, maxims, or precepts so written, both strike the reader more strongly at first, and are more easily retained by him afterwards: the other may seem odd, but is true; I found I could express them more *shortly* this way than in prose itself; and nothing is more certain, than that much of the *force* as well as *grace* of arguments or instructions, depends on their *conciseness*.”(本論は寧ろこれを散文にて物すべかりしが如し。されど余は二個の理由のために却て諧調ある文字を採り、且つ韻脚を踏むことをも敢てしたり。其理由の一つは明白なるものにして、韻文を以て書かれたる原理、格言、訓語は、第一に讀者を感ぜしむること一層深かるべきと同時に、其後も一層容易に記憶せらるべしと云ふにあり。他の理由は稍奇に失する嫌あれど而も事實なり、即ち余は散文よりも韻文を以てする方簡短に是等のものを表現し得ることを經驗せり。而して論證又は教訓の力あり風韻ある所以のもの、一に懸つて行文の簡潔なりや否やに存することは亦言はずして明かなるべし。) 散文で書くべき論文様のものを詩に直したポープの主意は是れで明瞭である。只この辯解に依ると、ポープの主張する所は、これが詩になる材料だから詩にすると云ふのではなく、此材料を詩にする時は一層有効であると云ふに過ぎない。従つて材料の如何は關はないが、只其材料を如何して言ひ表はせば可からうかと云ふことに成る。

一步進めて云へば、詩は章句を作る上の技巧であつて、實質の關係する所では無い、如何なる材料でも旨く言ひ表はしさへしたら夫れが立派な詩に成ると云ふことに歸着する。成程ポープがこんな考へを以て詩を作つて居たとすれば、まるで詩に對する考への違つた日本人の立場から見ると、ポープの詩は詩に非すと云つた所で議論には成らない。黒い眼を有する日本人が蒼い眼玉の西洋人を見て、あれは眼では無いと云ふ様なものかも知れない。だから、始から彼の詩は詩で無いとすれば夫れ迄であるが、暫らく吾々もポープの立場に立つて、ポープの主張を吾々の主張として、而して後彼の作物を評し來らば如何であらうか。それで失敗ならば本當の失敗である。又それで成功ならばポープはポープ自身の考へから云つて成功したものである。若し此點から云つて成功したものならば、彼が十九世紀二十世紀の今日に至る迄崇拜者を有して居るのも無理は無いことと成る。彼を崇拜するに彼の成功した點を以てするならば、何人も之れを打ち崩すことは出来ない。そこで彼の詩は彼の主張せる意味に於て成功せるか否かを檢べて見る必要が生ずる。

或批評家の話に、ポープ程人口に膾炙する詩句の多量を後世に残した者は無いと云つてある。この批評家の語の正しいか正しくないかは引用句の辭書を調べて見れば大體分るであらう。試みにバレット(Bartlett)の『慣熟引用句集』(Familiar Quotations)を取つて檢べて見ると、其結果は大體次の様である。シェクスピアは一二一頁を占めて居る。ミルトンは三二頁、ポープは

三三頁である。テニソン (Tennyson) は一二頁、ブラウニング (Browning) は九頁、それからウ
オーヅウォース (Wordsworth) の二二頁、スコットの九頁、シエレイ (Shelley) キーツ (Keats)
に至つては僅に二、三頁に過ぎない。固より大體の見當に過ぎんけれども、之を標準として見る
と、數多き英國文學者の中で第二位を占めてゐて、ミルトンと伯仲の間にあることが分る。而も
其次に来る者は數に於て遙に下つて居る。これは實に奇妙の現象と云はなければならぬ。何故と
云ふと、人々好き嫌ひはあるにしても、英詩人の番附を拵えたら、ポープを以てシエクスピヤーの
次席に据ゑる人は先づ無からうと思ふ。コートホープ (Court hope) の様に極力ポープを辯護する
人でも、此統計に現はれた順序に戻らぬ様な位地にポープを置くか奈何かは疑はしい。左様して
見ると下の様な事が云はれて来る。ポープの詩人としての位置は左程に高くは無いけれども、其
詩句の後世に傳はるもの、數は遙に其位置以上に出で、居る。これを概言すれば、詩人としての
價値は劣つても其句は後世に残るものだと云ふ妙なパラドックス (Paradox) は、一寸矛盾の様な
徹底しない結論と成るのだが、もし此パラドックスを説明すれば、彼の特色の一端は明かにされ
ると云ふものである。

(1) ポープの句で今代に傳はれるもの、十中八九までは智的要素から成れるもの許りである。換
言すれば一種の眞理や判斷をつゞめて言顯はした抽象的のものである。この事實は前に述べた、パ

ラドックスを説明する一つの事項と成る。智的要素は文學上最も薄弱なるものであることは曩に
論じた通りであるけれども、又最も俗社會から歡迎されるものである。俗人、殊に少し許り學問
をして學問の習氣を有難がる者は、大抵理窟の勝つた句を好む。これは彼等が文學に對して先づ
感じやうとしないで考へやうとするからである。世間一般の人(これが即ち俗人であるが)は感受
性よりも智慮の發達したものである。細緻な感應性よりも實際的判斷に興味を有して居るもので
ある。従つて單に抒情詩的な感情に充ちた句や、或は色彩に満ちた感覺的の光景を歌つた句より
も、教訓的な格言染みた句の方が有難い氣持のするものである。日本人の様な感情的な國民です
ら矢張然うである。試みに普通俗人の口に膾炙する名句と云はれるものを取つて調べて見ると、
此種のへば、理窟を含んだ句が頗る多い。例へば芭蕉の「道端の木槿は馬に喰はれけり」と云ふ俳
句が大變珍重されて居るのも、單に其中に一種の倫理的判斷があつて諷刺に成つて居るからであ
る。其處に一種の概括的眞理が認められるからである。「塚も動けわが泣く聲は秋の風」の句の
如きは十七字として悲壯の極を盡して居る。其價値から云つて木槿どころの騒ぎでは無い。けれ
ども世間一般には餘り知れて居ないと云ふのは、畢竟謂ふ所の智的要素を缺くが爲めに外ならな
いのである。これは數多ある中の一例に過ぎないが、偕てポープの詩に就いても同様の事實が其
命脈を支配して居りはせぬかと思はれる。何故と云へば、彼の最も好む所は冷やかな抽象的の眞

理であつて、而も其數が非常に多いからして、世間一般の俗人は之を名句だと思つて自然に口へ上せた結果が今日迄引續いたものであらう。讀者にして若し世の諺なるものが如何にこれと同性質のものであつて、如何に永久の生命を有して居るかを解するならば、ポープの句が今に至るまで人々に誦誦されて居る理由も自ら點頭されるであらうと思ふ。斯くの如くにして後世に傳はるのは文學的だから残るのではない、寧ろ實際的效用があるから残るのである。内容から云ふと文學として最も薄弱なものが最命脈の長いものに成るのは實にこれが爲めである。斯う云ふ譯であるから、ポープの句が最も多く人口に膾炙すると云ふことは、必ずしも彼が大詩人たることを證明して居ない、否、何人といへども單に此種の事情からして大詩人であると云ふことは斷言出來ないのである。

(2)次に考ふべきは、ポープの詩に現はるゝ智的要素が皆通俗的で、普通の俗人にも解り易いもの許りであると云ふことである。彼の眞理は斬新でもない、奇抜でもない。一家獨特の見識を含んでもゐない。要するに誰にでも通用する當然の事柄で、悪く云へば平凡な知れ切つた内容許りである。彼は勿論哲學者でも思想家でも無いからして、深い考へや高い思想や幽玄な想像は持つて居ない、只人の説を聞いたり、世間で云ふことを焼き直したりして、之を詩に作り上げたまでである。従つて大體から云へば、其内容は極めて通俗なものであると同時に普遍的である。其例

を挙げれば殆ど數へ切れない位であるが、極めて有名なものを二三挙げることにしやう。

“A little learning is a dang'rous thing ;

Drink deep, or taste not the Pierian spring.” — *Essay on Criticism.*

(學んで淺きは危し、パイエリヤの詩の泉は大いに飲むべし、然らざれば一滴も口にすべからず。——『批評論』)

“True wit is nature to advantage dress'd,

What oft was thought, but ne'er so well express'd.” — *Ibid.*

(有の儘を旨く飾つたのが本當のキツトである。考へた事は何返もある、然しかう旨くは云へなかつたと思ふのがキツトである。——同上。)

“Good nature and good sense must ever join ;

To err is human, to forgive, divine.” — *Ibid.*

(たゞに賢きは足らず、善きを加へよ、誤まるは人、赦すは神。——同上)

“Man never Is, but always To be bless'd.” — *Essay on Man.*

(人は今日幸なりと思ふものなし、翌は翌はと思ふが常なり。——『人間論』)

“One truth is clear, Whatever is, is right.” — *Ibid.*

(現にしかある以上は、正しきが故にしかあるなり、炳として争ふ可らず。——同上)

“The proper study of mankind is man.” — *Ibid.*

(人間の研究が人間相應の所なり。——同上)

“An honest man's the noblest work of God.” — *Ibid.*

(正しき人は神の最も尊き作物なり。——同上)

“’Tis the first virtue, vices to abhor;

And the first wisdom, to be fool no more.”

— *The First Epistle of the First Book of Horace.*

(悪を憎むは第一の徳、馬鹿を已めるは賢の始まり。——『ホレース第一巻の第一信』)

此等の例を見ても知らるゝ如く、其内容は一般に抽象的、概括的である。同時に普通の人が考へてもさう驚ろく程の事もない、まあ陳腐なものである。

(3) 斯様に陳腐な思想ならば、それが別段後世に残りさうも無い。縦しや残るにしてもポープの句として残る必要もあるまい。この普通の思想が、外の形式で残つても可ささうなものであるのに、ポープの句と成つて残るのは奈何なる譯であらうか。これに對する返答は次の如くである。元來陳腐な眞理は残り易い傾向を有して居る。残るからと云つて、珍らしがつて保存されたの

ではない。實は有り觸れた事だから残つたのである。陳腐といふことは一方から云ふと普遍的である、又永久的であると云ふ意味にもなる。吾人の日常喰つて居る米ほど陳腐なものはない。誰も膳に向つて飯を見た時は、つと思ふほど心を動かす者はあるまい。それでも飯は昔から今日に至る迄、常食として缺くべからざる食物と成つて居る。日常缺くべからざる物だから自づと陳腐にも成る。逆に云へば、陳腐なればこそ缺くべからざる物でもある。従つて永持もしやうと云ふ事にもなる。これと等しく、ポープが詩に表はした實際的判斷や抽象的眞理も皆ポープ時代の人の心に前の世から傳はつたもので、それと同じ意味に於て、其時代から又今日に傳はるのであるからして、縦令ポープが之を詩にしないでも、何等かの形に於て傳はるべき性質のものである。云はゞ吾人の飯の様なものだ。犬も歩けば棒に當ると云ふ諺があると、この諺は陳腐に相違ないが、一面の眞理を示してゐると世間から認められる以上は永く傳はらなければならない。犬も歩けば云々といふ諺は消滅するかも知れないが、(現にポープの詩句のうちには羅旬語の翻譯めいたものが澤山ある。)之と同じ意味の眞理は何等かの形式に依て傳はらなければならない。若しこれが傳はらないとすると、日常他人と應對する上に頗る不便を感じる。此諺の中に含んで居る眞理を一々説明する代りに、これ丈の成語を述べて意味を通ずることが出来れば、實用上甚だ便利と云はなければならぬ。ポープの詩句が世に傳はるのも之と一般で、彼は普遍的眞理を捕へて居る

のみならず、其眞理を最も旨く言顯はして居るからである。後の人がポープ以上の手際を以て同一眞理を表現し得る時代が來たら兎に角、さも無ければ彼の句が永遠に残るのも至當と云はなければならぬ。(此所に眞理々々と云ふのは尤もな概念と云ふ位なものである。一方に眞事と云ふ字面を作つて、具體、抽象兩面の眞をあらはす様にしたら便利かとも思ふ。)

然らばポープは如何に巧妙に其陳腐なる思想を言顯はしたかと云ふ問題に移る。人の知る如く、ポープの詩は皆同一形式から出來て居る。一二の例外はあるが、全然殆んどヒロイツク、カプレツト體(Heroic couplets)の詩で埋まつてると云つても可い。此詩形は彼の專賣とも云ふべきもので、其特色は同韻脚を用ひて二行づゝ對をとる、さうして何處までも此對句で押して行くのである。それで此詩形を用ふるとなると、勢ひ二行で或意味の纏つたものに拵へて行かないと調子が悪い。従つてポープの詩に於ても同韻の對句毎に意味が切れるか、又は次の對句に意味が繋がるとしても、一寸其間が休まれる様に句切れが出來て居る。上の對句から下の對句へ意味がのべつに續く例は殆んど無い。して見ると此詩形に伴なつて、作家の頭には、長い文句で表はすべき思想をいろ／＼に工夫して對句の中へきつちりと疊み込んで、其對句の中に一つの纏つた意味を表はさうとする努力が起るのは當然である。恰も俳人が十七字の中にある纏まつた景情を言盡して仕舞はうと苦心するのと一般であるから、俳句が記憶に便なるが如く對句も亦記憶に便である。

同じ眞理は他人も心得て居るかも知れないが、這んな風に整然と平仄や韻脚まで蹈んで、最も口にするに宜しく、尤も記憶に便利ある様に言顯はすことは難かしい。従つて人と應對をする時分、又は用談のある際などに、同一の思想を表現しやうとするには、自分の下手な長たらしい文句を使つて、わが無細工をもどかしく思ふよりも、既に手際よく出來上つてゐる成句を借用する方が苦が少ない。のみならず、却て能く自分の意思を通ずるに足る譯だ。而して是等の眞理は前にも云へる如く日常の交際に當つて閑却すべからざる陳腐な眞理であるからして、ポープの様な巧者な技藝家が出て、己の云はむと欲する所のものを悉く口調の好い對句に纏めて呉れたならば、如何でも其方が重寶に成るに相違はあるまい。これがポープの詩句の存外世の中に永く残る理由であらうと思はれる。斯う解釋して見ると、内容から云へば餘り詩的でないポープの句が數倍詩的な句よりも多く人に誦はれると云ふパラドックスも自ら解ける様である。

そこで前段に戻つて議論の局を結ぶと、成程吾人の立場から云へばポープの詩は詩的で無いかも知れないが、ポープ自身の立脚地に立つて、『人間論』の序に敍べてある様な主意からして、彼の作を品評して見ると、彼は自分の主張した方面に於ては立派に成效したものと云はなければならぬ様である。但し其成效と云ふのは、單に平凡なる事柄を對句に約める手際に於て成效したと云ふに留まる。能く人の口にする話だが、ポープは「正確」(correctness)の詩人である相であ

る。これは或逸話から出た話で、ポープの幼少の時に當時の詩人たるウォルシュ(Walsh)と云ふ人が、ポープの才を愛して、今に「正確」の詩人になれと勧めた事がある。實は、この方面は未だ英國の詩人に依て開拓されて居ない。(佛國に對して云ふ) だから此方面に手を附けたならば名聲を博するに相違ないと見込を付けたのがウォルシュで、ポープは其助言通りに修業して遂にかくの如く「正確」を標榜する作家に成つたと云ふことである。尤も「正確」と云ふ意味にも色色あるだらうから、其意味の取り様に依て、随分彼の詩に對する攻撃も起らぬとは限らない。現に下、クインセイの如きは、ポープの文法や語法の曖昧な所を指摘して、決して正確な詩人とは云へないと斷言して居る。然しながら或思想を遺憾なく對句の中へ纏めて、重箱で仕切つた様に綺麗に作り上げる手際から云へば、彼は慥かに正確な詩人である。

尤も斯く迄對句に骨を折つて、何でもかんでも二行に約めて仕舞はうと苦心すると、其結果は妙な物に成つて、對句と對句とは形の上では連続しても、其間に意味の連鎖が無くなる虞れがある。第一の對句は或思想を纏めたもので、第二の對句は又或他の思想を煮詰めたものである。兩者共手際よく立派に出来ては居るけれども、其間の關係は何だか分らなくなる。尤も随分頭の働く鋭敏な人でも敘事や議論の發展には頗る不完全な腕前を有つて居る場合もあるからして、そんな人は如何なる詩形を用ひても斯様な弊に陥るかも知れないけれども、(斯かる詩形を用ひて對句だ

けに骨を折つてゐれば) どんなに快暢な脳髓の人でも幾分か其束縛を受けるだらうと思ふ。云はば俳句を澤山續けて新體詩を作る様なもので、ぼつ／＼切れ／＼に繋がつて、全體から云ふと統一を缺く様な心持がするに相違ない。ポープは詩を以て生命とした人である。苟も改竄添削の餘地ある限りは何度でも推敲を辭せざる熱心家であると共に、日常の談話中でも、是れは少々變化すれば詩に成ると思ふ様な事は皆書取つて置くし、又自分の胸に一寸面白い文句が浮べば必ず之を紙片に寫し取つて、他日の用に保存したと云ふ話である。彼に就いては慥か這んな話もあつた様に記憶する。或時彼がオックスフォード卿の家に逗留して居た頃、夜中に下女を二度も三度も呼び起したことがある。別段の用事でもない、たゞ枕上に句を得たからして、之を寫し取る爲に紙を持つて來いといふのださうだ。斯んな風に一句宛得た句を繋ぎ合せて長い詩を書いて行けば、是非とも斷れ／＼に成る筈であるが、而もそれが皆對句なんだから其弊も最甚しいのである。從て彼の詩に見出し得る特長は、對句の中にある思想が非凡な技巧を以て收められてあると共に、全篇を通じて其移り具合が不自然であると云ふ事に歸着する。『髮盜人』の如き特例を除いては、『人間論』でも『批評論』でも皆この詩形に中毒して居ると云つても宜からう。

以上はポープの第一の特色たる智的要素に就て論じたのである。然しポープが斯くの如く智的要素に就て最も秀で、居て、他の要素には餘り重きを置か無かつた様に見えるのは如何云ふ譯で

あらう。勿論時代の影響か個人の特性か又は兩者の合併した原因に基くには相違ない。これ丈の返辭は誰でも出来る。然しそれを今少し細かに論ずる段になると面倒が起る。先づ時代の影響と云ふ所からして少しく研究して見やうと思ふ。本論の冒頭に於て十八世紀の大勢を敍べて置いたから、其狀勢とポープの詩の特色とを比較して見れば、暗々裏に一種の斷定は下せるのである。が、それは讀者の判斷に任ずとして、此處では少し別の方面から窺つて見る。

英文學に於けるエリザベス時代とポープ時代とはいろ／＼な點に於て異なつて居るけれ共、其中で最も著しく吾人の眼に映するのは下の點である。エリザベス時代は青春時代で、元氣旺盛で、創造的で、浪漫的で、萬事に氣儘勝手な所がある。其一時期が濟むと今度はその反動として、どうもあんなに無規律では餘り締りが無さ過ぎる。どうか今少し整然と見苦しからぬ様にした。即ち前の時代の如く各自新意匠を出して勝手な熱を吹くよりも、意匠は在來のものでも澤山だからして、之を一層よく仕上げたらば可からうと云ふ氣に成る。其整理的傾向がドライデンを通してポープ迄來ると動きの取れない位窮屈な頂點に上り詰めて仕舞つた。それだからしてポープの時代には獨創とか新奇とか云ふことは既に彼等の頭腦を去つて居る。内容などを兎や角云ふよりも腕を磨かなくては詩人に成れない、立派な技倆を有たなければ詩家とは云はれない。詩人と成るには、瑕の無い旨い表現をする技倆が何よりも第一の資格だ。傾向はかうなつて來た。

恰も政治と同じ事である。政治の歴史にも創業と守成との區別がある。創業の際は萬事が活潑で到る處に生氣が充ちてゐる。こせつかない。其代り萬事が不整頓で、いろ／＼な所に破綻がある。ところが其次の時代に成ると、事業を起すといふ考へよりも、既に起つた事業を整理するつもりに成る。整理といふ點が重きを成して、當事者の頭腦が段々其方面ばかりへ發展して行くと、終には新事業の觀念は皆無になつて、役人は只整理さへすれば立派に務まる様になる。所謂俗吏(悪るい意味ではない)なる者は此時に出來上る。個人の場合も同様である。世の中に慣れない若いうちは、直情徑行皆思ひ／＼の眞似を遣る。遣つた後で回顧して見ると、如何も旨く行て居ないので、さう亂暴したつて駄目だ、少しは規律も守つて行動しなければならぬと云ふ氣に成る。それが永く續くと終には唯規律づくめの人間に成つて仕舞ふ。ポープの時代が恰度それで、文學の上から云つて俗吏的な詩の出來上る時期である、規則づくめな詩が持囃される時期である。従て詩の第一義たる情熱はどうでも構はない。冷靜でよろしい。冷靜な頭腦で充分詩人に成り得られると考へて來たらしい。ポープは全く此風潮の代表者と見て差支なからう。又一方から見れば、エリザベス時代からベーコン(Bacon) ニュートン(Newton) ロック(Locke)を通じて人間が一般に批評的に成つて來た。この批評的精神を現實の社會に應用して通俗に行けば、アデソンが生まれ、スチールが出來上る。之を韻文で遣るとポープが出來上る。散文に於て表現を發見すれば立

派な述作が成立しないとも限らない精神を、ポープは詩界に適用した爲に其結果は前に述べた通りになつたのである。この點から見れば彼の傾向は全く時勢の影響を蒙つたものと云はなければならぬ。

然らば彼の人格は如何であるか。彼の人格がこんな詩を作る上に影響を與へたと否とに係らず、彼の生涯が頗る逸話の材料に富める事は争ふべからざる事實である。彼は自ら蜘蛛に比較して居る程に脊蟲の様に瘡せた男であつた。斯様に身體の發育が不充分であるからして、その内臓も頗る不調和極つたもので、一生涯を病氣の中に暮したと云つて可い位である。この體格とこの健康とを有するポープの性質は甚だ鷹揚に行かなかつた。始終病人の様に氣難かしく我儘ばかり立て居た。他人の家へ泊りに行つても手數のかゝること夥しい。オックスフォード卿家の下僕はポープの用だけは辨じないと申出して、終に主人から解雇されたことさへある。其上彼は大に食ひ意地の汚ない男で、彼の朋友の説に依ると、彼の死因は全く鍋に有つたとさへ傳へられて居る。彼は頗る權謀に富んで心の許せぬ厄介な人物であつた。手管は彼が交際上最も好んで用ゐた所作である。彼に就いては *He hardly drank tea without a stratagem.* (一杯の茶を飲むにも、計略がある) とか、*He played the politician about cabbages and turnips.* (大根野菜の末に至る迄政略で遣付けた) とか云ふ言葉が屢々傳記者に因つて繰り返されて居る。彼は又非常に氣

のいら／＼する怒りつばい人物で、肝癪が起ると突然挨拶もしないで、オックスフォード卿の家を去ることが屢々あつた。又吝嗇な人間である。『イリヤツド』を翻譯する際に手紙の反古の裏へ草稿を書いたと云ふ有名な話がある。従つて彼は貧賤と云ふことを大に輕蔑した。敵を罵るにも彼奴は貧乏だ、三度の飯も喰へない癖といふのが常であつた。同時に自分が貴族社會に交際のあるのを大に自慢にして居た。而も彼の手紙に顯はれた所だけで見ると、彼は全く博施、感謝、節操、溫情で終始した人間の様である。何處迄も他人を欺く氣で居るから仕方がない。彼は談話の際に何ぞと云ふと詩などに重きを置いて居らん。詩は唯閑を遣る慰みだ位に云ふ。然もそれが嘘である。彼は詩人として自ら高く構へて居たのみならず、前にも云つた通り、行住坐臥詩ばかり考へて居る男であつた。オックスフォード卿の家で冬の夜に四度も下男を起したのは、全く此間の消息を傳ふるものに相違ない。此外まだ困ることがある。彼は人の批評や非難を一向氣に懸けん様な振をして、其實それが大變氣になる質たちであつた。どんな批評が出ても必ず激する、心の平穩を破られる。まだ悪い事がある。彼は屢々俗世界を輕蔑すると號して、山の上から谿底を見下した様な事を勿體らしく述べる。彼は又自己を非常にえらく考へて、何方を見ても嫉妬で取巻かれて居る様な氣がして居たものらしい。彼の性行を詳細に述べると、まだ／＼面白い事が幾許もあるが、先づ之れで大體の見當は附いたらうと思ふから前の問題に立歸つて述べることにする。

偕て彼の詩に智的要素の勝つて居るのは、單に時勢の影響に歸すべきものであらうか、それとも彼の人格が大にこれを助けて居るだらうか。今擧げた性質から考へて見て、ポープと云ふ人は必ず『人間論』や『批評論』のやうな物ばかり書く傾向を有する人であるとは結論されない。或は書き得るかも知れないが、成程斯ういふ性質の人間だから彼云ふ物を書いたのだなと合點する程には行かない。ミルトンの性行からして『失樂園』を書くだらう位の事は云へる。ロゼツチの生涯から推して、『在天の處女』(Blessed Damosel)でも書きさうだ位のところは見當が附く。然しポープの性格からは必ず『批評論』や『人間論』が出るとは認定されないのである。して見ると彼が斯くの如き作物に筆を染めて一家を成したのは、全く時代思潮の影響だと斷言しなければならぬことに成る。然うなると彼の性行を調べて見たのは全然無効に歸した様であるが、仲々左様でない。成程彼の詩の第一の特性たる智的要素を説明することは出来なかつた。然も幸にして之が爲めに他の手懸りを得て、彼が第二の特性及び其他の特性を論ずる際に大に参考に成らうと云ふものである。

(二)此編にあつてはポープの人事的要素を調べて見る積りである。人事的とは前にも斷つた通り、人間の喜怒哀樂等の表現を指すので、實際的に便利だから前年の講義の分類に従つたのは、知的要素の場合と同じである。ポープの詩中にあつて此要素の勝つたものを、求めると凡そ三篇

ばかりある。第一には『サツフオーよりファオンに寄す』(Sappho to Phaon)と云ふ詩がある。是れは頗る痛烈なものであるけれども、ポープが少年時代の作であり、且つオギツド(Ovid)の翻譯であるが爲めに、後世の評家が餘り重きを置いて居ない。次には前に一寸梗概を述べた『アペラードに送れるエロイザの消息』(Eloisa to Abelard)である。是れは三百六十行程から成つて居る尺牘で、例の如くヒロイック、カプレット體で書いてあるが、前の智的要素を論ずる場合に述べたとはまるで趣の違ふ感じの起るものである。元來エロイザと云ふ失戀の女が其情人のアペラードに與へた物であるからして、理窟や議論は要らない、唯戀しい慕はしいと云ふ感情を並べれば可いので、其表現の形式は兎に角題目及び内容は無論『人間論』などとは正反對なものである。

"I hear thee, view thee, gaze o'er all thy charms,
And round thy phantom glue my clasping arms.

I wake :—no more I hear, no more I view,

The phantom flies me, as unkind as you.

I call aloud; it hears not what I say :

I stretch my empty arms; it glides away.

To dream once more I close my willing eyes;

Ye soft illusions, dear deceits, arise!

Alas, no more! methinks we wand'ring go

Thro' dreary wastes, and weep each other's woe,

Where round some mould'ring tow'r pale ivy creeps,

And low-brow'd rocks hang nodding o'er the deeps.

Sudden you mount, you beckon from the skies;

Clouds interpose, waves roar, and winds arise.

I shriek, start up, the same sad prospect find,

And wake to all the griefs I left behind."—ll. 233-48.

(翻譯しようと思つたが、翻譯をすると、厭にセンチメンタルで、とても讀まれない妙なものが出來上る。強ひて譯して讀者及び講者の感情を害するよりも、此儘にして置く方がよいと了見を定めた。以後ポープの引用句は大抵原文の儘にして置く。譯すとポープにも私にも氣の毒である。)

此引用した句にどの位の價值があるか、それは私の御紹介したい所ではない。たゞ『批評論』や『人間論』を書いた人が、こんな情熱的な(或は情熱的に見える)ものを敢て書いたといふ事實

を報道して置きたいのである。御覽の如く冷淡に構へてゐるところは一行もない。四角張つて理窟めいた所は一句もない。しかも通篇此調子で貫いてゐる。更に、

"Death, only death, can break the lasting chain:

And here, ev'n then, shall my cold dust remain,

Here all its frailties, all its flames resign,

And wait till 'tis no sin to mix with thine."—ll. 173-6.

の數句に至ると、何だか十八世紀の人間の言葉ではない様である。世俗的に洒脱した風潮に染んだ果は、こんなことは云はない。全く浪漫的な情緒の發現としか受取れない。但し内容を云ふのである。詩形にもとづく表現法を云々するのではない。

これと同調なためポープの詩としては頗る注目に値するものは『亡き薄命の女を弔ふ歌』である。是れは極めて短かい詩であるけれども、評家が必ずこれを論及するのは、今云つた通り、彼の普通の作物と違つて大に感情的に出來上つた物であるからだらう。此詩の筋は前に述べて置いたから今は繰返さないが、その如何に智的要素の例として擧げた諸篇と異なるかを一寸紹介して見やうと思ふ。此詩の六行目に、

"Is it, in heav'n, a crime to love too well?"

と云ふ句がある。旨い句である。誰が見ても能く云ひ果せたと思はれる。なかに愚痴を含んでゐる。そこに詩らしい所がある。ポープは他の場合に於ても矢張他人の言ひ了せない所を一句の中に纏めて言ひ盡して居る。例へば前に挙げたものの中にも、

“Man never Is, but always To be bless'd.”

と云ひ、

“An honest man's the noblest work of God.”

と云ひ、

“To err is human, to forgive, divine.”

と云ふ様なたぐひで、皆名句と稱しても可いものばかりである。だから此愛の句ばかりが際立つた出来榮えと云ふ譯でも何でも無い。それだけの手際は何日でも有して居るのである。然し彼此對照して見ると、爰の句の方が餘程面白い。其内容が冷淡でないからだらう。で、この弔歌は彼が平生の技巧を以て、彼の平生に似合はぬ題目を歌つたものであるから、何人もこれに多くの注意を拂ふに至つたのである。現に、

“No friend's complaint, no kind domestic tear

Pleas'd thy pale ghost, or grac'd thy mournful bier.

By foreign hands thy dying eyes were clos'd,

By foreign hands thy decent limbs compos'd,

By foreign hands thy humble grave adorn'd,

By strangers honour'd, and by strangers mourn'd!” —ll. 49-54.

と云ふ一節の如きは、大いに批評家の注意を惹いて、度々引用される事になつてゐる。然し、實際こんな句法や修辭法はポープが他の場合に何遍となく繰返して用ゐ來つたものである。全く内容が内容文に有名になつたものと斷言するより外はない。

以上の諸篇は情熱を以て貫いた物であつて、而も斯様な浪漫的な熱情は一般十八世紀の思潮で無いことはこれ迄度々述べた通りである。して見るとポープといふ詩人は是程の浪漫的作品をも工夫し得られる男であると云ふことが一方に於て證明されると同時に、是程の作品が彼の詩中に在つて頗る乏しい所からして、彼は時勢の壓迫を蒙つて、此方面へ才を伸ばさずに、却つて天下の潮流に従つて、其處に自家の詩境を開拓したのでは無いかと云ふ結論を生ずる。此種の作品こそ、實は彼の人格の反射であつて、智的要素の勝つた他の長詩篇杯は却つて時代の反射と見做すべきものであるまいかと云ふ議論も起る。茲迄來て前に挙げた彼の性行に關する種々の話を照し合せて見ると、成程と合點せられる様な節もある様に思はれる。彼は權謀術數を事とする妙な女

性的の人である。従つて事物に對して偉大な崇高な深厚な感じを有つ事は出来ないかも知れない。又深い思索から生ずる一種の感慨も味はふ事は出来まい。然し彼が女性的なるだけ夫丈微細な事に目が附くと共に、淺くとも鋭い感じを凡の人事の上に有し得る男である。彼の人物から云へば、眞正の意味に於ける哲學的でも思索的でも智的でも何でも無いのである。寧ろ女のように感じ易く、怒り易く、泣き易く、常住坐臥こゝろの平靜を得ない、神經質の男であつたに相違ない。而してかゝる性行を有する人に限つて、或意味に於て詩的である。言葉を換へて云へば、『エロイザの消息』を書き、『弔歌』を作る傾向のあるものである。『批評論』や『人間論』を作るのは寧ろ見當違ひである。縦しや見當違ひで無いにしても自然の成行に任せたらば、『批評論』の代りに『エロイザの消息』を何篇も書き、『人間論』の代りに『弔歌』を幾篇も書くべきのが當前である。然るに此に出でずして彼に出たのは、全く時代の感化が人格を冒して、後者の萎縮せるものと断定しても大差は無からう。若しポープにして十八世紀に生れないで十九世紀の初期に生れたものとするれば、矢張普通の詩人として普通の詩人に似た様な題目を擇んだらうと思ふ。果してさうだとすれば次の様な意味の結論に到着する。如何に詩的な素因のある人でも、若し時代が乾燥で散文的であれば、それ切り發達の萌芽を断たれるものである。世の中に英雄が出ないとか大文學者が出ないとか云ふのは、左様いふ秀でた人間が丸で無いのではない、成るに足るべき種子を有つて

居る人は幾許でもあるが、時勢の壓迫で之を發展させる餘地が無いのであらう。ポープが果して私の判定した如き性格の男であつたか、どうだか私は受け合はない。然し諸君の御参考にはなると思つて少しく卑見を述べて見た。

(三)こゝに述べやうとするのはポープの感覺的要素である。感覺的要素の中で代表者とも云ふべき彼の自然に對する感じを調べて見たら、彼が感覺的要素を如何に處理したか、概そ分るであらう。元來自然に對する感じは十八世紀の浪漫主義と共に起つた感じであつて、世紀末のクーパーなどから次の時代へかけて追々盛に成つたのだからして、この反動の起る前に全盛を極めたポープの詩には何の位自然の分子が何んな具合に這入つて居るか一通り調べて見るのは面白い仕事である。それでポープの詩中で自然の要素の勝つたものはと云ふと前に擧げた如く『牧童歌』(Pastorals)と『キンゾーの森』(Windsor Forest)との二つである。數から云つても僅に二つである。固よりこれが彼の全集中から引抜かれても、ポープのポープたる所以は少しも損はれはしないが、只彼がこの要素を如何に取扱つたかを見るには之れでも足りるであらう。先づ『牧童歌』の春の部(First Pastoral)が何んな風に始まつて居るかを見れば、自のづから全體の調子も分つて來やうと云ふものである。

“First in these fields I try the sylvan strains,

Nor blush to sport on Windsor's blissful plains :
 Fair Thames, flow gently from thy sacred spring,
 While on thy banks Sicilian Muses sing ;
 Let vernal airs through trembling osiers play,
 And Albion's cliffs resound the rural lay."

これを見ると、先づ一行目に *sylvan strains* と云ふ字がある、一行目に *blissful plains* と云ふのがある、次には *sacred spring* 次には *Sicilian Muses* と云ふのがある。是等は皆古典詩から脱化した語であつて、*ポープ* が作つた清新な字では無い。ウオーヅウオースなどが *ポープ* 一流の詩に飽足らなかつたのは、一つは彼等が此種の陳套な文句、即ち従来慣用踏襲し來つた結果殆ど生氣の失せた古語を用ゐて、其他の新辭を故らに避けやうとしたからである。恰度日本で古今集などにある雅語のみを用ひて文章を作ると一般で、*ポープ* が人爲的と云はれる原因の大部分は是れが爲めである。

私は今少しく此事に就いて考へて見る必要があると思ふ。何故といふと私はこの點に關して斯ういふ意見を有してゐる。即ち——この用語は批評家の云ふ程無暗に人爲的なものとも云はれない。人爲的かも知れぬが其人爲的な所にはそれ相當の意味がある。人も知る如く此時代は非常に

古典文學の影響を蒙つた時代であつて、恰度我徳川時代が漢學の影響を受けてこれに隨喜した様に、羅典の古文學者などを大に崇拜したものであるからして、古典の中に使はれた文字や章句は特種の有難味があつたに相違ない。今日たゞ西洋人を有難がること、ろから自分の趣味も忘れて、衣服や住居までも西洋人流にして喜ぶのと同じく、只眞似をするのが嬉しかつたのである。其證據には *ポープ* 一輩の詩を見ると註が澤山付いてゐる。而して其註の大部分は *グーヅル* に斯うあるとか、*ホレース* に斯う出て居るとか云ふ様な、出處若しくは類似の章句を引用した説明ばかりである。今から考へると、殊に日本人から考へると馬鹿々々しい位なものが多い。馬鹿々々しいに相違ないが、一步進んで彼等の心理状態に立入つて考察すると、唯眞似をして、冠をつけた猿の様喜んで居ると云ふより以外にまだ深い理由がある。彼等は古典文學者を豪らいつて居るのみならず、實際彼等を愛讀したのである。吾人の日常でも左様であるが、己れの深く愛する人若しくは物があると、吾人の爲る日常の動作又は言語の中で何處かに其人なり物なりを仄めかしたくなる。即ち我が好む所へ聯想を持つて行きたくなる。聯想をつけることは其人や其物を想ひ出す便りであるからして、聯想を浮かべるに足る言語動作は吾人に對して少なからざる愉快を興へることに成る。丁度藝者が最負の役者の紋をつけて喜ぶやうなものである。*ポープ* 一派の詩は正に此藝者に匹敵すべきものであらう。衣服につける紋そのものが氣に入つたと云はむよりは、

其紋を通して一種の聯想が浮ぶのが愉快なのである。従つて紋そのものは背理でも醜でも陳でも平凡でも構はない、其御蔭で自己が私淑する古典文學者並びに其古典文學者の生存して居た時代を想像して、言語の方便で一種の人為的幻影を起さうと云ふのが眼目である。余は特に人為的と云ふ。其意味は山なら山、川なら川を詠じて必ずしも其山や其川の幻影が出なくとも、其は彼等の顧慮せざる所である。只その文句を通じて古典文學に顯はれた山や川の想像が浮んで面白くなれば可いのである。ウォーヅウォース一派はそんな媒介物を通じて快感を得るのが面倒だと云ふので、直接に山に行き川に行き野に行つて自然の景物其物を愛する所から出立したのである。ポープの詩はそれとは趣が違ふ。さう云ふ意味で讀めば丸で無意味かも知れないが、古今調を愛する人が古今集の言語でなければ氣に入らぬ如く、萬葉好きが萬葉の言語でないと承知せぬ如く、古典文學に現はれた言語でないとポープには面白くなかつたのである。聯想の豊かな文字でなければ遣ひたくなかつたのである。

この文學上の聯想は一概に擯斥することの出来ないもので、現に日本在來の文章は全くこれに出來上つて居たと云つても可い位である。近來に至つて寫生文などが流行り出してから人々思ひ思ひに勝手な所を見附けて、直接是なら自分は面白いと見極はめて筆を取る様になつた。結構な事と云へば云つて差支ないが、事實はつい近頃の事である。在來の文章は學問をして、學問から

出た聯想で面白いと云ふ所だけを並べる。恰もポープ一流の遣方と同様であつたのである。既に文學上の聯想から出たとすれば、吾々其聯想を欠ける者には單に辭句の上に現はれた意味だけしか分らない。いかに山や川や自然の景物に興味を持つて居たと云つても、到底彼等が聯想からして得る程の愉快は得られない事になる。例へば或章句の如きは、單に古典的な固有名詞だけを並べたかと疑はれる場所さへある。『キンゾーの森』の一節。

“ Not proud Olympus yields a nobler sight,

Tho' Gods assembled grace his tow'ring height,

Than what more humble mountains offer here,

Where, in their blessings, all those Gods appear.

See Pan with flocks, with fruits Pomona crown'd,

Here blushing Flora paints th' enamel'd ground,

Here Ceres' gifts in waving prospect stand,

And nodding tempt the joyful reaper's hand; ”—ll. 33-40.

是等は一應希臘の神話を心得た者には解らないと云ふ程でもないが、キンゾーの森の中へこんな者どもが出て來やうとは思はれない。縦しやキンゾーの森に必要としても、吾々は讀んで其意

味が解るまでと、それ以上に何と云ふことも無い。あれば大袈裟だと思ふ許りである。厭にがつてるなと思ふ許りである。墨田川の一錢蒸汽へ乗つて、真面目に赤壁だ〜と騒いでる様なものである。

“Come, lovely nymph, and bless the silent hours,
When swains from shearing seek their nightly bow'rs;
When weary reapers quit the sultry field,
And crown'd with corn their thanks to Ceres yield.
This harmless grove no lurking viper hides,
But in my breast the serpent Love abides.” — II. 63-8.

『牧童歌』の夏の部の一節である。文字はこれで可いとして、是が羊飼の言葉で有から少し驚かれる。羊飼なら羊飼らしく、せめてウオーズウオーズの詩中の人物の様な言語でも使ふかと豫期せられるのであるが、是ぢや丸で衣冠束帯の羊飼でいかめしくつて容易に近づけない。然しポープだつて、斯う書いて實際の羊飼を髣髴せしめやう抔と云ふ野心はないに極てゐる。古典文學の中にある一種の理想的な因襲的の羊飼を書き表はして、まあ、なつかしさに昔を偲んだのであるとでも申譯をしたら可からう。従てこれを讀む者も然ういふ聯想から快感を取らうと心懸がな

ければ興味は索然として盡きて仕舞ふ。恰度日本の能に出る草刈とか翁とか云ふものを見る時と同じ心持ちにならなければ不可ない。能に出て来る爺や婆は身分の低い割に頗る上品な言葉を使ふ、俗人には丸で解りやしない。能を見る人もこれに依て實際の草刈とか翁とかを想像するものは決してない。中には想像するなんぞと愚な事を主張する能通もゐるが、空嘘である。實際は唯一種の形式に嵌まつた、約束的な、能の舞臺でのみ豫期する草刈と翁とを見て楽しむ丈である。私は夫で結構だと思つてゐる。然し元來が左様いふものなんだから、如何しても直接に老翁や牧童に接する感じは起らない、従つて作爲的といふ感じは免れない。ポープの詩を讀むときは、此點を承知の上で、作爲的だとか人爲的だとか云ふがよろしい。勿論一方には間々自然其物に興味を帯びて敘景を試みた所もある。例へば、

“Even the wild heath displays her purple dyes,
And 'midst the desert fruitful fields arise,
That crown'd with tufted trees and springing corn,
Like verdant isles the sable waste adorn.” — *Windsor Forest*, II. 25-8.

などは眼前の景色其儘である。但し注意すべき點は、寫す所が常に平野若しくは極の茂つた草原、又は人の手の到らぬ隈もない田野に限られて、所謂浪漫的な景色は一つもない。(景色で浪漫的

と云ふのは一の通語で、あらゆるしい山とか、谷とか、海とか、もしくはゴシック風の廢墟杯を指すのである。(最も題目が『キンゾーの森』だから仕方もないが、ポープの詩集を置いて然う云ふ要素を含んだものは殆んど一句も無いのである。唯『批評論』の中に學問の高きをアルプス山に比べた一節がある。アルプスといふ名前を能く使つたものだと思ふ。

次に眼前の景色ではないが、禽獸蟲魚の形容に實際を其儘詩句に連ねた所もある。下に引用するのは魚の記述である。

“In genial spring, beneath the quivering shade,

Where cooling vapours breathe along the mead,

The patient fisher takes his silent stand,

Intent, his angle trembling in his hand:

With looks unmov'd, he hopes the scaly breed,

And eyes the dancing cork, and bending reed.

Our plenteous streams a various race supply,

The brightey'd perch with fins of Tyrian dye,

The silver eel, in shining volumes roll'd,

The yellow carp, in scales bedropp'd with gold,

Swift trouts, diversified with crimson stains,

And pikes, the tyrants of the wat'ry plains.”—*Ibid.*, II. 135-46.

是等は寧ろ野趣があると云はねばなるまい。單に聯想だけで持つた句とは思へない。最も *scaly* *breed* (鱗屬) など云ふ字がある。これは魚のことであるからして、西洋の批評家から云はせると、氣取つて居ると云ふかも知れないが、吾々日本人にはそれ程厭味な感じは起らない。其外 *Tyrian dye* とか *watery plains* 杯と云ふ字もある事はあるがまあ構はない。あとは魚の目録である。其目録が中々旨く出来てゐる。形容には寫生的の生氣があるやうに思ふ。讀んで何んな魚だと云ふことが目に浮ぶ様に書いてある。この印象の明瞭な所、旨く言ひ果せる所がポープの詩の特徴で、彼は如何なる題目に臨んでも必ず此流義で押して行く。其極は超自然的要素までも同様の筆法で描出する。それは後段に述べやうと思ふから今は多く言はない。

楮て以上を綜合して考へて見ると、ポープの自然に對する感じが薄弱であつたとは認むることが出来ない。それが古典文學の爲めに少なからぬ制肘を受けたとは云はれる。これも前の情的要素の場合と同様の結論に達した譯であるが、ポープの性格から云へば自然は好きな人である。少くとも之を好愛する傾向を有した人である。唯十八世紀の都會的空氣のために化せられたると同

時に、古典文學といふ眼鏡をかけて自然を視ることを力めた結果、斯くの如く作爲的な精神を得たものだらうと思ふ。其證據には、ポープは詩の上でこそ自然を楽しむものとは決してどの批評家からも許されて居ないが、事實上に於て自然に親しむだことは洽ねく人の知る所である。一寸其御話をする。元來庭園には大陸人の所謂英吉利庭園(English Garden)なるものがある。これは自然其儘を庭園の中へ圍ひ込む仕掛けである。これに對して佛蘭西庭園なるものがポープの時代まで英國に行はれて居たが、是は萬事對稱^{シンメトリ}を尊んで、庭樹を鳥の形や動物の恰好に刈り込む流儀の極めて人工的な造庭術から出來たものであつた。英吉利庭園法は之を破壊しにかゝつた一種の反動である。トムソン(Thomson)時代から起つたとしてある。トムソンは自然庭園の趣味を鼓吹した元祖と稱せられる人である。そこでポープは人の知る如くトキケンナム(Twickenharn)に大きな邸宅を構へ、大きな庭を造つて楽しむ人である。其庭は往來の向側と此方側との兩方に跨がつてゐたので、ポープはトンネルを作つて通路を付けたと云ふ話である。勿論其庭園はどの位まで眞の風流を解し得た造り方であつたか今から知る由もないが、彼自身が詩に於て佛國形の庭園を攻撃して居る所を以て見ると、彼の詩よりも自然に近いものであつたらうと思はれる。『バーリントンの伯爵へ送れる尺牘』と題する詩中に、タイモン別荘の莊麗を説いて富豪の惡趣味を罵れる一節がある。

“ His gardens next your admiration call,
On ev'ry side you look, behold the wall!
No pleasing intricacies intervene,
No artful wildness to perplex the scene;
Grove nods at grove, each alley has a brother,
And half the platform just reflects the other.
The suffering eye inverted Nature sees,
Trees cut to statues, statues thick as trees;
With here a fountain, never to be play'd;
And there a summer-house, that knows no shade;
Here Amphitrite sails thro' myrtle bow'rs;
There gladiators fight, or die in flow'rs;
Unwater'd see the drooping sea-horse mourn,
And swallows roost in Niuis' dusty urn.” —ll. 113-26.

これを讀むと、ポープが明らかに佛蘭西式の手を入れ過ぎて、何でもかでも、對を作つたり、

何でもかでも樹を刈り込んだり、丸で自然を逆さまにした様な庭園には一向感服してゐなかつた事が分る。再び繰り返すと、彼は本來自然を愛し得る人である。もしあの様な風氣の下に生長して、あの様な古典主義の爲に趣味を束縛されることがなかつたならば、彼は充分其方面に自由の嗜好を發達して、優にクーパーの先驅者となり得たかも知れない。なり得なかつたのは多分時代教育の壓迫の爲だらう。

(四)私はポープの取扱つた材料を一種の類別に従つて順次に述べて來た。残る所は超自然のそれ丈になつた。前段に於てポープの敘述する自然の景色其他は其描寫が客觀的で印象が頗る明瞭だと説いた。スキフトを論ずるときに、彼の想像は架空を現實にする、否架空を數量的に明かにすると云つた。アヂソンの場合には彼の想像が理に落ちて、福引の謎の様になる、謎が主で、想像の内容は却つて假物であると云つた。デフォー——デフォーはまだ論じて居ないが、あとで明瞭になる通り、いくら道が悪くつても泥の中を歩く人である。此數人の特色を此方面から一括すると、明である(暗に對しては)。平である(奇に對しては)。暢である(幽に對しては)。俗である(玄に對しては)。快である(秘に對しては)。朗である(峭に對しては)。是丈を頭の中へ入れて置いて、ポープが超自然の要素をどんなに取り扱かつたかを調べる。然し其前にまだ一寸御話をし

て置きたい事がある。

超自然とは字の示す如く自然を超越したものである。従つて自然(大きな意味でいふ)を借りなければ描寫出來ないものである。然し描寫の手段から云へば借りるに違ひないが、世界觀から云へば、自然其ものが超自然の表現と斷ずる事も出來る。すると名は超自然でも實は自然に過ぎない。だから自然の活動を描寫すれば直ちに超自然の描寫になる。かうして仕舞へば別に超自然といふ類別を設ける必要はない、全くの蛇足である。次には其範圍を狭めて考へる事も出來る。尋常の活動は自然として見做す。けれども尋常ならざるもの、普通の因果法で解けぬもの、普通の經驗に上らぬもの、是等を一括してこの名を付ける。すると吾人凡人も時によると超自然の活動をやらぬとも限らない。草、木、山、川、禽、獸も其通り、——必ず遣るとは申さないが、もし遣つたなら其時に限つて超自然の名を付ける事が出來ることになる。

次には、自然界には超自然の要素を含んでゐないと見る立場もある。(無論哲學的に云ふのではない。)即ち超自然界は自然界と獨立して存在してゐる。之をあらはすに自然を借りるのは、借りなければ表はせないから借りる丈で、同物だから、もしくは甲が乙を含んでゐるから、片方で片方を説明するのではないと云ふ事に歸着する。

此二つの見方で、文學も大變趣を異にした種類の超自然要素を具へる事になる。暫らく之を內的、外的と名ける。內的のうちで草木山川はいざ知らず、吾々人間に關した超自然は、要するに

心理上の問題に歸着する。眞偽の判定を下しがたい、研究の餘地のある、不可思議になる。換言すれば超自然が自然に變化するかも知計りがたい現象になる。従つて尤も假感を打破しがたきものである。もし眞の意義に於ての神秘主義を求めたらば是より外にあるまいと思ふ。草木山川に就ても同様の論理は應用出来るけれども其文學的效果は固より比較にならないから注意する必要もない。外的に至つては、神を建立しても好い、幽靈を建立してもよい、役病神でも、福の神でも、雷様でも辨天様でも好い。何でも建立して不可思議にするが好いが、遂に神秘にはならない。いくら旨く建立して、いくら旨く描寫しても、假感は讀誦の際に起る丈である。あとはすぐ崩れて仕舞ふ。超自然が元來の性質から云つて、壯嚴、畏怖、其他類似の感を起すべき筈であるのに、却つて外的特性の爲めに滑稽の念を生ぜしむるは、吾人の屢見る所である。是は一時の假感すら相當に引き起す事が出来なかつた證據になる。眞偽は既に判然として、必竟有り得べからざるものとの斷案を腦裏に描いて、たゞ祖父傳來の情性によつて、恐れ、怖れ、物凄がるに過ぎないから、尤も能く成効した所で、すぐあとからは反動が起るに過ぎない。

此滑稽に墮在する第一の源因として、私は描寫の精細、印象の明瞭といふ特性を擧げたい。何故といふに、もともと建立して、外部に存在するもの、即ち自然とは縁のないものと極めてかゝつたのだからである。所が之を描寫するに、描寫しやうがないので已を得ず自然を借りるのである。已を得ず借りるのだから、自然其儘を精細に敘述する必要はない、超自然をあらはし得る程度に於て自然を借りればよい。もし其程度を越えて、自然其儘を有る通りに書き立てたならば、出来上つたものは豫期の如き超自然ではない。矢張り自然である。だから可笑しくなる。

ホーマーの『イリヤツド』の中にデュース神を描寫した所がある。斯う書いてある。「斯く言ひながら彼は、眞鍮の蹄を打つた馬を戰車に結び付けた。駿馬である。金の鬣を漂はしてゐる。彼は金の鎧を着た。金の鞭を執つた。車に乗つた。飛ばさんと馬に鞭つた。馬は勇んで大地と星多き空の間を馳せた。斯くして彼は泉多きアイダに行つた。アイダは百獸のかくる山である。彼はガーガロン迄も行つた。其所には彼の住居がある。香ばしき神壇がある。諸神諸人の父はここに其駕をとどめた。馬を車より放した。濃き霧を彼等にかけた。さうして山の巔に坐つた。わが稜威に満足して、トロイの町とアケーアの船を望んだ。」

面白く出来てゐる。滑稽と思ふのは悪い。けれども神らしくはない。神は神で明らかな神である。自然を借りなければ萬事行動の出来ぬ神である。人間が靈に近づいて神になつたと云はんよりは、神が退化して人間になつたと評する方が適當である。人間が神と兄弟分であるかの如き感がある。

ミルトンの『失樂園』に出る敘述も亦大同小異である。たゞ是程に人間らしくない所に、幾分

か人を離れた壯嚴の念を起し得るかも知れない。ミルトンの作つた性格は常に人間を飛び離れ様
飛び離れ様としてゐるかのやうに思はれる。だから其傾向はホーマーとは反對である。別に例を
引いて説明するにも及ぶまいから省く。(この二作を讀んで滑稽の感を起さないのは敘述が旨い
からだ、旨くさへあれば、いくら自然を借りて、超自然をあらはしても構はないと論ずる人は、
全然當を得てゐない。『イリヤツド』でも『失樂園』でも馬鹿らしいといふ方面から見れば全く
滑稽である。たゞそれを滑稽に感ぜしめないのは、單に敘述の手際ばかりではない。彼等は終始
一貫して、別世界の事ばかり書いてゐるから、現實の念を挑撥する虞なくして、仕舞まで人を釣
り込み終る事が出来るのである。アキリスもデューイスも遡たる上代の事である。神と半神の差で
ある。セータンもガブリエルも等しく地面の上には顔出しをした事がないものどもである。だか
ら彼等は比較的成り居る。もしかゝる外的超自然を現實界に輸入して彼等は反撥せしめたら一
頁を終へずして滑稽に墮するは勿論である。)

外的でないと言へば夫迄であるが、幽霊は少し趣が違ふ様である。是は仕方がない、本體が人
間なのだから、明瞭でも、人間らしくつても何うする譯にも行かない。是すら通例はぼんやりし
てゐる。幽霊のうちでハムレットの親爺は比較的明瞭である。其代り聲丈になつたり、又は他の
人に見えなかつたりしてゐる。バンコーの幽霊は宴會の席に御馳走を食ひに出る。尤も平人に近
い幽霊である。然し是もマクベス以外には見えない仕掛にして、どこかに不明瞭な點を残してゐ
る。

「女は灯火の下に俯向いた。さうして靜かにぐるりを見廻した。それから顫へのついた様に、
深い息をしたがら、胸の下から腰帶を解いた。絹の上衣も襦袢も、足の下に落ちた。さうして出
した。見よ！胸と、脇腹——夢むべき姿である。語るべき姿ではない。クリスタベルを護れ！可
憐なるクリスタベルを護れ。」

女の胸には何があつて、クリスタベルは何を見たのか説明は丸でない。もし明瞭に説明を加へ
たならば、明瞭になると同時に滑稽になるからである。

では此議論を逆にする。外的超自然を建立して、且つ之を滑稽ならしむる爲には、明瞭に敘述
したら可いだらうとなる。私はさうであると答へたい。尤も純粹に矛盾の感を起させる爲にわざ
と超自然を使つた作物は一寸思ひ出せないが、其敘述のうちに、自から可笑味を帯びて、多少矛
盾の感あるが爲に益面白く思はれるのはある様である。此矛盾の感は超自然の性質を備へながら
餘りに明らかに描かれたるより起るのみではない。超自然でありながら超自然の豫期に反して、
莊嚴畏怖と反對なる吾人の情的側面を動かすからである。人間以上の力を有ちながら、人間以下
に小さい、可愛らしい、或は美しくしいと云ふ矛盾を一身に萃めるから起るのである。人間以下と

は人間に於て見出し能はざる精巧細緻の程度に於てといふ意味だからして、此特色を發揮する爲めには勢ひ精巧細緻の筆を舞はさなければならなくなる。従つて煎じ詰めると前の矛盾即ち明らかに描かれるといふ事と一致する。もしくは、相互で相互を説明してゐる譯になる。

精巧細緻は形に於て、性に於て、舉動に於て、ひとしく應用し得る此種の超自然の資格である。其點から見ると、人形師が寸大の土隅原を普通の人間よりも器用に作り上げたり、彫刻師が印籠の根付に五百羅漢をぎつしり彫り付けたり乃至は書家が米粒に十數字の細字を書き上げたりするのと同じ動機が大部手傳つてゐる。(同じ手際とは決して云はない。) 出來上つたもの、價値は論ずるのではない、たゞ其動機が遊戯的活動であるのは慥かである。餘裕ある藝術的才力の一種の消費法である事は明らかである。こゝに此想像を縦まにするの餘地あつて、此縦まゝなる想像を敢てするうちに、覺えず其快感に驅られて、之を實現して、詩とし文として楽しむのである。だから出來上つたものは滑稽の趣をどこかに具へると共に美的である。ポープの描いたる超自然は明瞭なるの點に於て、仄かに滑稽なるの點に於て、人間の自然に見出し得べからざる精巧細緻なるの點に於て、正に此種の超自然である。

この方面に筆を着けたものは、ポープ以前に沙翁がある。『夏の夜の夢』(A Midsummer Night's Dream)の中にあらはれる諸精フエリクスの如き、又『あらし』(The Tempest)の特産物エリエル(Ariel)の

如きは、共に好適例である。『夏の夜の夢』の精は、夏の泉、小丘、草原、小川、濱邊至る所に手を引き輪を作つて踊り暮らす。

"I know a bank where the wild thyme blows,

Where oxlips and the nodding violet grows,

Quite over-canopied with luscious woodbine,

With sweet musk-roses and with eglantine:

There sleeps Titania sometime of the night,

Lull'd in these flowers with dances and delight."—Act II. sc. i. ll. 249-54.

とある位だから、花卉の生れ變りとも云ふべき美しい愛らしいものに違ない。エリエルに至つては御承知の如く少し趣を異にしてゐる。是は絶海の孤島に住んでゐるプロスペロの召使である。プロスペロは魔術使だけれども人間である。エリエルは精だけれども人間の従者である。此一事が既に彼に對する壯嚴畏怖の念の大部分を掃ひ盡してゐる。彼の所作舉動を見ると猶更さう云ふ感じは起らない。たゞ輕快である。立ち所に主人の用を辨する重寶な所丈が超自然である。あとは氣の利いた抱車夫に似てゐる。けれども抱車夫の癖に面白い歌を唄ふ。

"Full fathom five thy father lies;

Of his bones are coral made ;
 Those are pearls that were his eyes :
 Nothing of him that doth fade
 But doth suffer a sea-change
 Into something rich and strange.

Sea-nymphs hourly ring his knell." — *Tempest*, Act I. sc. ii. 11. 396-402.

神韻縹緲たるものである。少しも陰氣でない。仕舞に奉公の期限が切れて、自由の身になつた時に、こんな事を云つた。

"Where the bee sucks, there suck I :
 In a cowslip's bell I lie ;
 There I couch when owls do cry.

On the bat's back I do fly

After summer n·trily.

Merrily, merrily shall I live now

Under the blossom that hangs on the bough." — *Ibid.*, Act V. sc. i. 11. 88-94.

成程メリーである。快豁である。詩的である。奇麗である。高く塵界を超越してゐる。

私はポープの超自然は矢張此種のものだと道破した。此種とは前言を繰り返す様になるが、萬事明晰で、明晰であるが爲めに、まさかと思はれる所から、多少矛盾滑稽の感を起して、其感じの上に、一種の美しい衣を一面に被せたものと云ふ意味である。私はことさらに一種の美しさと言ひたい。どんな美しさで、沙翁の諸精フエヤウ又はエリエルと、どう云ふ風に違ふかは是から段々説明する積である。

ポープの超自然は、『ダンシアツド』のうちに混沌の神となつてあらはれてゐるが、是ほどの點から云つても超自然として取扱ふ必用のない假設的のもだから略して仕舞ふ。先つきから暗に説明して來たのは『髮盜人』のうちに出てくる土水火風の四精を指したのである。『髮盜人』の第一篇にはエリエル(此所にもエリエルが出る)が女主人公ベリンダ(Belinda)といふ女主人公の夢枕に立つて警戒を加へる所がある。其冒頭の文句が非常に大袈裟なもので、空を飛ぶ輝ける幾千の吾等の目指す君、人のうちの尤も美しくしき君！杯と出掛けてゐる。其下に御用心々々々ともあればだが、そんな、やさしい言葉は使はない、甚だ莊重典雅に警戒してゐる。しかもそれが火難、盜難、人間の大病ならまだしもたかゞ髮の毛を少し剪られるからと云ふのだからモツク、ヒロイツクといふぢやう、何だか滑稽である。で、口調はミルトンの悪魔にでも相應してゐる様

に見えるが、どうも、極つてゐる。型へ入つて入る。自然の趣がない。自然に出来た莊重でなくて、切り組んだ莊重である。其中で星の鏡にすかして、未來の出來事をあざやかに見たといふ件がある。面白い空想である。然し是は傳説的のもので、ポープのではない。——此流儀で『髮盗人』の内容を批評的に説明して行くと、大變長くて退屈になるから、是でやめて、其超自然の特性を示すに足る節を一二例證する。第一はベリンダの髪が危険だと云ふので會議を開く模様である。

“He summons straight his denizens of air;
The lucid squadrons round the sails repair:
Soft o'er the shrouds aerial whispers breathe,
That seem'd but zephyrs to the train beneath.
Some to the sun their insect-wings unfold,
Wait on the breeze, or sink in clouds of gold;
Transparent forms, too fine for mortal sight,
Their fluid bodies half dissolv'd in light,
Loose to the wind their airy garments flew,

Thin glittering textures of the filmy dew,
Dipp'd in the richest tincture of the skies,
Where light disports in ever-mingling dyes;
While ev'ry beam new transient colours flings,
Colours that change whenever they wave their wings.
Amid the circle, on the gilded mast,
Superior by the head, was Ariel plac'd;
His purple pinions opening to the sun,
He rais'd his azure wand, and thus begun.”—Can. ii. ll. 55-72.

是は譯せさうだから譯して見る。——

(彼はすぐと空を飛ぶもの呼び集めた。輝やける一群は帆のぐるりに寄つた。帆の上で微かに私語いてゐる。船の中にある人には春風の様思はれた。輝けるものは日に向つて其翼を擴げた。そよ風に漂ふた。黄金の雲に埋もれた。透き徹るものは、——人の眼に映らぬほどに細かき、——霞の如き衣裳を風に流した。露曇る光りの絹を、濃き空の染粉に浸けた。空には定まらぬ色が溶けつ亂れつ日を射返してゐる。一筋の光り射すたびに、新らしい色が變つて出

る。出る度に彼等は彼等の翼を搏ち鳴らす。鍍金と輝く帆柱の上に立つ群集の中に、他よりは頭丈も高きエリエルがゐる。紫の羽を日に開き、空色の笏を高く舉げて、衆に告げた。

譯が下手で御氣の毒であるが、原文を讀んで見ると分る。非常に精細な手際である。よく斯う明らかに描出したものである。感じから云へば美しい羽虫か何かが幾千となく帆柱のぐるりに飛んでゐる様な心持である。ポープは全く其詩趣を満足せしむる爲に此小さい精を作り上げたに違ない。しかし其詩趣は壯大、崇高、畏怖に伴ふ詩趣ではなかつた。可憐、麗明、綺彩の諸質を帯びて、普通の自然界に現實となつて見る可からざる超自然に伴ふ詩趣であつた。美的なる超自然と云ふ點に關しては沙翁のそれと同一である。けれども彼是對照すると截然たる區別がある。説明の必要な迄に違つてゐる。沙翁のエリエルは無人島に住んでゐる。荒漠たる背景を控えて活動してゐる。清新なる空氣のうちに活潑々地なる運動を縦まゝにしてゐる。ポープのはさうでない。客間、應接室のなかの精である。都會の精である。墨田川の屋根舟の上に徘徊する精である。奇麗は奇麗に違ないが、貴夫人の指輪とか、腕輪とか、乃至香箱とかを離れざる奇麗さである。開化した精である。野趣は一點もない。双方共にデリケートであるとも云へるが、一方は人工で育て上げたデリカシーで、一方は野生のデリカシーである。野に咲いた花と暖室に咲いた花との相違の様なものである。

斯う云ふのはポープの悪口ではない。都會は都會、野外は野外夫々面白味がある、夫々美しい意味がある。必竟は讀者のすきくである。すきくは別として、是丈の區別丈は記憶すべきである。と云ふのは此區別が暗にエリザベス時代とポープ時代の特色の區別にもなるからである。沙翁時代は物質的擴張の世である。冒險流行の世である。未知の土地を跋涉する時代である。多數の探檢家が日毎に英國へ歸つて來て、新しい島の發見や、手長島やら、足長島の御話を得意に吹き廻つた時代である。既に『あらし』にあらはれた孤島杯も沙翁がある冒險談を種に使つたのだとさへ言ひ傳へられてゐる。沙翁のエリエルは此空氣に觸れてゐる。所がポープに來ると既に時代が違ふ。人は都會に住んでゐる。都會は開化してゐる。一般の世間は野蠻である。學問文章は古典に限る。批評はポアローが完成した。整理が大切である。形式が重大である。戦争は婦人の扇使ひである。時事は咖啡店である。ポープの精は此間に生れた。だから斯んな節がある。

“ Whatever spirit, careless of his charge,

His post neglects, or leaves the fair at large,

Shall feel sharp vengeance soon o'ertake his sins,

Be stopp'd in vials, or transfix'd with pins;

Or plung'd in lakes of bitter washes lie,

Or wedg'd whole ages in a bodkin's eye :

Gums and pomatums shall his flight restrain,

While clogg'd he beats his silken wings in vain ;

Or alumn styptics with contracting pow'r

Shrink his thin essence like a rivet'd flow'r :

Or, as Ixion fix'd, the wretch shall feel

The giddy motion of the whirling mill,

In fumes of burning chocolate shall glow,

And tremble at the sea that froths below !” — Can. ii. ll. 123-36.

御覽の通り命令の言葉である。エリエルが部下の精に、義務を忘ればかう云ふ所罰があるぞと申し渡した所だから其積りで讀まなくては不可ない。偕此所罰法が色々竝べてあるが、いづれも妙なもの許りである。塚に詰めて上から栓をして仕舞ふ。ピンで釘付にする。香水の海の中へ投げ込む。ポドキンの眼の中へ幽閉して生涯出さない。護謨や油を塗り付けて羽搏きの出来ない様にする。血留め薬をつけて、からだ身體が縮む様にする。或はチヨコレートの熱い湯氣の中へ入れて、眼がぐらつく程攪き廻はす。——大抵こんなものである。其道具を見ると野外にあるものは一つ

もなく、悉く婦人用のものである。花の中に眠つたり董の下に寐る沙翁の精とは全然性格が違ふ。どうしても都會的である。悪くいへば御白粉臭い。が、飽迄も明瞭で、飽迄も精細で、飽迄も神秘的でなくつて、單に作家の美的情操を満足せしむる爲めに創造せられたるかの如き感あるは双方共に同じ事である。

私はポープを論ずる始めにポープの名を作した作は詩とはいへ、實は論文に近いものであると云つた。後世に傳つてゐる佳句は大抵知的要素の表現だと云つた。それから彼の自然に對する態度、人事上の情緒に對する態度を評して、本來は此方面に發展すべき素因のあつた人だけれども時勢の壓迫で、自由に伸びなかつたのだらうと評した。今彼の超自然に對しても、しか云ひたい。彼の創造した超自然は是丈でも既に成功である。沙翁に比すると野趣のないのは事實であるけれども、都會的に云へば充分な成功である。けれども普通の意味に於ける超自然は世紀末の浪漫派の勃興と共に萌したもので、ポープは此方面に丸で貢獻する所はなかつたのである。然し此豊富にして精緻なる想像の構造を變じて、(もし變じ得べくんば)之を神秘の敘述に用ひたならば矢張り同程度の成功を奏し得た男であらうと信ずる。

序でだから一言する。デフォアの書いた『ギール夫人の幽霊』(The Apparition of Mrs. Veal)と題する短篇がある。固より幽霊の敘述だから、ポープの精とは只超自然と云ふ大いなる名の下

に一括されべきもので、其性質は無論異なるべき筈である。が、面白い比較が出来るからわざわざ御話に及ぶ。此短篇は表題の示す如く幽霊の物語である。しかも眞晝間十二時に出た。出た所は、友達のハーグレーヴといふ女の家で、長い旅をするから暇乞に來たと云つて、二時間餘りも話して歸つた。歸つたあとで段々詮議をして見るとギール夫人は訪問の當日恰も十二時に死去した。是丈の梗概を聞くと一寸浪漫的で頗る物凄い様である。所が讀むと聞くとは大した相違で、實際デフォーの短篇に對して見ると、あつけない程平凡である。たゞ普通の女が、友達の家を尋ねて、普通の話をしたと毫も異なる所がない。まことに明々地白々地で、これ程の材料に犬死をさせたと思ふ位である。此明々地白々地の所がポープと縁を引いて能く似てゐる。只幸にしてポープは之を美化し得たに反して、デフォーは之を事實化して仕舞つた。さうして成功にも失敗にも此明々地白々地が十八世紀一般の特色である。

是でポープの批評の大體は濟んだ。約めて云ふと、斯うなる。ポープは詩人である、否詩人でないと西洋の批評家中には大分議論がある。それを吾々日本人はどう解釋したら宜からう。先づ彼の作物を分類して特性を検して見様といふ事になつた。分類には便宜の爲め、先年「文學論」で述べた四種の區別を用ひた。其中で知的要素が一番多いといふ事が分つた。且つ是は彼の大名をなした所以であつたといふ事も分つた。然し吾々日本人には、そこに多くの興味がない。そこ

である評家のいふ如くポープは眞の詩人でないと云ふ方に賛成する。然し彼の立場に身を置いて考へて見ると、彼は彼獨特の領分に於て充分なる成功を収めてゐる。のみならず他の要素の傾向から察して見ると、彼は眞正の詩人として充分成功し得る人であつたらしく思はれる。たゞ彼は時勢の制肘を受けた。しかして此時代傾向の彼の作物の上に尤もよく反射した好例は、ある意味から云つて、彼の傑作とも云はるべき『ダンシアツド』(The Dunciad)にある。ポープの批評の結末に當つて、此一篇を評して置かねばならぬ。

『ダンシアツド』は全篇四巻より成る諷詩である。此諷詩が何故時代の反射かと云ふと個人的な特色を帯びてゐるからである。外の言葉で表はすと一種の人身攻撃を詩で歌つたものに歸着するからである。すると當時は人身攻撃の世の中かと質問されるかも知れない。そこに多少の説明が要る。

人間の興味の廣い世の中、學問でも、政治でも、社會でも、各其方面に向つて相應の理想と新領土があつて、研究と實行の兩體が優に進行して行く間は、其反射として表はれる文學上の作品も亦個人を離れてゐる。個人に執着する程に吾々がこせつく必要がないからである。尤も個人でも解釋の仕様で色々になる。個人を離れて小説杯は書けるものではない。然し、この個人は何の某を描いたものとなると、意味が少し濃くなつてくる。其次には、この何の某より以外に應用の

出来ない描寫であると、又意味が濃くなる。最後にこの何の某より以外に丸で應用が利かなくつて、しかも其描寫の内容が、毫も存在の價値を有つてゐなかつたら、尤も極端なる個人的な描寫である。今私の云ふ個人を離れる離れないの論は此極端な意味で云ふのである。例へば某年某月某日私が財産差押へを受けた。某年某月某日財産差押へを受けた私を文學者が小説なり詩なりうちに書いて、どこか讀者の感興を惹くならば、私は夫を個人的の極端だと云ふ積りはない。然し眞偽、美醜、善惡、壯劣いづれの點から見ても、普遍的にも永久的にも人に訴へ得る餘地がなかつたならば——某年某月某日何の某は財産差押へを食つた。ざまあ見ろやい。と云ふ文ならば、此敘述に對する興味は單に差押へを食つた本人と、其知己と、其讐敵との上のみ起る文である。圏外に立つたもの、もしくは其本人の忘れられた後世(後世でなくとも、二三年後でも、五六年後でも、場合次第であるが)には寸毫の利害も、痛痒も、感激も、嘆賞も、快も、不快も、全然何等の情緒を生じない。従つてあらゆる敘述のうちで尤も非文學的なものである。従つて、普通の文學者の敢てせざる所である。道德的にやらない許ではない、文學的にやる必要を認めないのである。苟しくも開拓すべき領土と、より有効に使用すべき材料がある以上は、かゝる個人的敘述を陋とするのである。

所が狭い社會が落ち付いて、固定して、沈滞して向上的に人心を誘ふ刺激がなくなつて、しかも其小團體の甲乙が、衣食競争上、もしくは名譽競争上、或は感情衝突上、非常に鋭敏に軌轢し出すと、今云つた、極端の個人的敘述は、堂々たる文學の假裝を凝らして打つて出る。ポープの生きてゐた時代は正に是であつた。コートホープの『英詩史』卷の五、一七五頁から一七六頁へかけて、かれが『ダンシアツド』を出版した顛末が斯う書いてある。

"Swift was the inspirer of *The Dunciad*. In 1726 the Dean of St. Patrick's had come over from Dublin, and had been for some time Pope's guest at Twickenham. He brought with him a number of his compositions, which he desired to associate in a Miscellany with some of Pope's, and the two occupied themselves at Twickenham in forming the selection. Among Pope's papers was a satire called *Dulness*, written against those who had attacked him in a number of 'libels' which he had collected and bound. He had formerly put this aside on Swift's own recommendation, and he now made a show of burning it, but the Dean snatched it from the fire, and urged him to complete it. Pope consented, and polished the satire into the first draft of *The Dunciad*. This, however, he did not at once publish, conceiving that the public would require a poem of such virulent personality to be justified by provocation more recent

than the obsolete libels he had so carefully preserved. To attain his end he published in 1728 the *Bathos*, a fragment of the Scriblerus scheme, concerted as far back as 1713, with Swift and Arbuthnot, inserting in the general ironic treatise a chapter full of satiric allusions to his old enemies under the disguise of different animals, each of them being indicated by initials. The device was perfectly successful. The Dunces rushed out to retaliate, and the journals swarmed with fresh libels against the poet, who was thus enabled to appear before the world on 28th May 1728 as the defender of his own injured fame.

“Even under such conditions, however, Pope proceeded with a caution amounting to timidity. *The Dunciad* was first published without either names or explanatory notes, and it was only after he had satisfied himself that the curiosity of the reading public was stronger than their reprobation that he ventured, in 1729, to issue the large edition containing the names of the victims, the Prolegomena, the notes of Scriblerus, etc. He further guarded himself against prosecution for libel by assigning the property in the poem to three peers of distinction, whom he thought the Dunces would be unlikely to attack. When it appeared safe to do so, the satire was transferred by these noblemen to the publisher, Gilliver.”

(『ダンシアッド』を書かせたものは實を云ふとスキフトである。千七百二十六年の事であつたが、スキフトがダブリンから出て来て、ポープの家へ逗留して居た事がある。其時スキフトは自作を少々携へて来て、之をポープのと合して雑集を出版する意向があつた。そこで兩人はトキケンナムの屋敷で撰抄をやつた。ポープの作のなかから『遅鈍』と題する一篇の諷詩が出て來た。是は自分に對して人身攻撃(其攻撃は綴ぢて一冊にしてある)をやつた奴を遣り返したものである。彼はスキフトの勧めによつて、前から之を仕舞つて置いたのだが、今出て來たのを見て忽ち焼き棄て様とした。否其實は焼棄る眞似をして見たのである。スキフトは直ちに之を引きたくつた。さうして是非完成する様にと勧めた。ポープも承諾して、此諷刺に彫琢を加へたものが『ダンシアッド』の第一草稿になつたのである。所が自分がわざ／＼一冊にまとめて綴ぢ込んで置いたと云ふ、自分に對する讒謗悪口と云ふものは餘程古いもので、もう世間が忘れてゐる頃だから、今此『ダンシアッド』を出して手痛い人身攻撃的の仕返しをやると、少し世間の同情を失ふ虞れがある。だから、もう一返新たに攻撃されて置く必要がある。そこで彼は千七百二十八年に『ベーツース』と名ける一篇を公けにした。是はスクリブリラス會員の計

畫で、スキフトやアーバスノットと相談して、千七百十三年頃から始めたもので固より斷片的の作物であつた。で、全部諷刺的に書きこなした中に、彼の舊敵に當てた様な嘲弄的の一章を書き加へた。その一章ではポープの敵がことごとく獸になつてゐる。さうして一般に分る爲めに、敵の冠り文字をとつて、其頭字で獸の名前が始まる様になつてゐる。策略は旨い具合に中つた。「馬鹿供」は猛然として立つた。さうして我も我もと返報に及んだ。雜誌には幾十となく新らたなる罵詈がポープの上に注がれた。斯くして彼は、傷けられたる彼の名譽の保護者として、千七百二十八年五月二十八日に公衆の前にあらはるゝ事が出来たのである。

條件斯の如く好都合なるにも拘はらず、彼は殆んど臆病とも評し得べき注意をとつた。「ダンシアツド」は始め名も註も入れずに出版した。出版した上で、讀書界の好奇心が、其批難の聲よりも強いといふ事を確かめた後、千七百二十九年に至つて、犠牲者の姓名、序、及びスクリプリラスの註を付したる大版を出版した。それでもまだ誹譏罪の告訴を恐れて、此詩の所有權を有名な三人の貴族の名にして置いた。「馬鹿供」はまさか此人々を攻撃する勇氣はなからうと思つたからである。其後こんな危険も起りさうもなくなつた頃を見計つて、諷刺の所有權は上述の貴族から出版者ギリヴーの手に渡つた。

後の人から見れば、其内容に何等の價値なき『ダンシアツド』を出版するのには是丈の策略と是

丈の手續を盡してゐる所を以て見ると、ポープの時代は余程こせついたものであると共に、甚だ氣樂なものである。社會の沈滞と儕輩の嫉妬が双方持ち合はなければ、いくらポープだつてこんな詩は作るまい。又是程の手續も費すまい。

さて此個人的諷刺とはどんなものかと申すと、今の文藝雜誌に出る六號活字の尤も質の善くないものを文學的に詩形に引き直した迄である。多少内幕を知らないものには全く無意味である。だから『ダンシアツド』には註が澤山ある。けれどもこの多忙な世の中に一々註釋を讀んで『ダンシアツド』を味つてゐる様な氣長ものは一人もゐない。と云つて讀まなければ丸で分らない。そこが此諷刺の程度の低い所である。前に云つた極端の個人的な敘述である。諷刺を受けた當人の事情を知るもの以外には何の用をもなさないのである。

私はさきにスキフトを評して立派なる諷刺家と云つた。之を證據立てるには『ガリヴー』と『ダンシアツド』を比較するに若くはない。後者の興味は徳川時代の落首と同じく其場限りのものである。『ガリヴー』に至つては二百年後の今日に至つても毫も其光彩を失つてゐないのである。彼れスキフトの敘述は當時の英國に應用が利くのみならず、いづれの世、いづれの國へ持つて行つても通用する。しかも彼は冷然として其價値を問はざる如くに筆を着けてゐる。ポープに至つては地團太を踏んでゐる。しかも其諷刺の材料にどれ程の事があるかと云へば、貴様の着て

ゐる羽織の紋は、今どき流行らない小さな紋ぢやないか馬鹿野郎と呼ばはるに過ぎない。通人が他を品評して無暗に野暮だとか、氣が利かないとか、自分自身は極めて狭苦しい天地の間に蹠踏してゐながら、其狭苦しい事には一向氣が付かないで矢鱈に人を愚弄してゐる様なものである。第三者から見れば何方だつて大同小異である。同じ空氣を呼吸してゐるものが退屈紛れに同士打をしてゐるとしか思はれない。

尤も『ダンシアツド』だつて、一卷には一卷の趣向がちゃんと出來てゐる。敘述だつて、徹頭徹尾つまらないと云ふのではない。悪口でも面白い悪口もある。皮肉だつて旨い皮肉もある。悪口なり、皮肉なりに上々の出來と見える所は澤山ある。例を擧げるのが面倒だから御話にして置くが、——本屋が競争(實際の)をして詩人を手に入れやうとする所に、カールと云ふ奴が、汚ないものに滑つて轉ぶ所がある。其汚ないものは、毎朝窓から隣の店の前へ前晩の食ひ残しを放り出す癖の悪いコリナといふ女の拵えた仕業である。——何の事かと思つて註を見ると、カールは本屋の主人の名で、コリナはトマス夫人の事、此女がポープの手紙を無斷でカールに賣り渡した意趣返しださうだ。さうかと思ふと今度は作家供が生存競争をやる有様がかいてある。フリート街は出版屋の多い所だから之にちなんで、フリート泥溝どぼに作家が澤山飛び込む様子や泳ぐ具合で劇烈な競争を喻へてゐる。始めの奴は吾年六十に足らず何の恐るゝ事あらんと眞黒な水の中へ飛

び込むと、沈む爲めに益高く上がる連中が之を見て感心してゐる。次が飛び込むと黒い泥が少し動いた許りで、すぐ波紋は收つた。見物はやあもう出て來ない。氣の毒な事をしたといふ。第三は沈んだと思つたらすぐ浮き上がった。見ると少しも泥で汚れてゐない。ティムスの白鳥と同じ事である。冷たい息の續く海中動物のコンカネンは忠實に底に潜んでゐる。ブラツクモアはどうしても浮いて來ない、實に辛防が好い。彼は聲も出せない、身動きもならない、水は無意識に湖の如く彼の上に眠つてゐる。云々。註を見ると誰が誰に當るかちやんと書いてある。本名の出てもゐるのも無論ある。

其他警句は固より數へ切れない程ある。英語でたゞ二三を示して置く。

“Wits, who, like owls, see only in the dark,

A lumber-house of books in ev'ry head,

For ever reading, never to be read!”—Bk. iii. ll. 192-4.

“Flow, Welsted, flow I like thine inspirer, beer,

Tho' stale, not ripe; tho' thin, yet never clear.”—Bk. iii. ll. 169-70.

“Like the vile straw that's blown about the streets,

The needy poet sticks to all he meets,

Coach'd, carted, trod upon, now loose, now fast,

And carried off in some dog's tail at last.”—Bk. iii. ll. 289-92.

此時代の事を能く調べて見ると驚ろく事が多い。本屋が斷りなしに自分の文字を出版したり、或は他人を雇つて好加減な事を書かして、それを自分の名でいつの間にか出版してゐたり、或は批評家が公々然と無禮無恥の悪口を吐き合つたり、甚だ如何はしい世の中である。『ダンシアンド』によく引合に出されるデニス(Dennis)といふ男はポープを評して“Alexander Pope has sent abroad into the world as many bulls as his namesake Pope Alexander. Let us take the initial and final letters of his name, viz., A. P—e and they give you the idea of an ape. Pope comes from the Latin word *papa*, which signifies a little wart; or from *poppysma*, because he was continually popping out squibs of wit or rather *poppysmata* or *poppysms*.”と云つた。丸で批評にも何にもなつてゐない。小兒の悪^{あく}たいである。かう云ふ手合を向へ廻したからポープも多少の必要があつて随分思ひ切つた諷刺をやつたのであらう。人間の禮義徳義は自己を圍繞してゐる多數の禮義道德を標準にしなくつては立ち行かないもので、自分一

人品格をよくしてゐても、左右前後から低い程度の徳義心で自分を冒して來れば、こちらも先方と同程度に身を下して應戦しなければならない。『ダンシアンド』を讀むとポープは非常に口の悪い、亂暴極つた嘲弄を逞くする男の様に思はれるけれども、其裏面にはそれ相當の理由があつて、ポープが悪口を吐く前に、彼等から既に同程度以下の悪口を加へられてゐたのである。たまたまポープの方が上手過ぎたので、ポープの分は後世に残り、デニス一輩のは即席に消滅して仕舞つたから、ポープ一人が嘲弄の專賣家の様に思はれる様になつた。夫を思ふと幸か不幸か分らない。

第六編 ダニエル、デフォー (Daniel Defoe.

1661—1731) と小説の組立

ポープの『ダンシアッド』を評する時に、斯かる個人的諷刺を産出する世の中は智的に狭くなければならぬ、道徳的に低くなければならぬ。詩の上から云つて勿論下等で無ければならぬ、又瑣末の俗事に齷齪して居らねばならぬ、瑣末な俗事に齷齪するほど一方では天下太平で無ければならぬ、尙ほ又是等の事に拘泥して得たる如き黨派心に充ちて居らねばならぬと云ふ様なことを述べて置いた。今此諸條項の中から小事に屈托する餘地、即ち呑氣なところを引抜けば何んなものが出来るかと考へて見る。智的に狭いものだからして大理想の含まれた作品は出る氣支が無い。道徳的に低いものだからしてヒロイズムを含んだ作品は容易に出て来ない。詩的に下等であるからして美的要素に富んだ作品も減多に出なからう。而も精力が充滿して活動の表現が欲しい様な場合には、そこに現はるゝ小説が如何なる形式を取るかと云へばデフォーの書いた様なものに成るに相違ない。

十八世紀の一般の風潮は此講義の冒頭に於て詳しく述べたからして茲に之れを繰返す必要もない。大同小異かも知れぬが、マッソンは其著『英國小説家』(*British Novelists and Their Styles*)の八一頁以下に次の如き説を述べた。

“At the close of my last lecture, I called attention to the fact that, from the Restoration of 1660 (perhaps, to clear myself from such exceptions as I then indicated, I should have been more safe in saying, from the Revolution of 1688), British society, and, with it, British intellectual activity, is seen passing into an era of strikingly new conditions. According to the common feeling, I said, Britain then passed into a period in which, to all appearance, it had ‘done with the sublimities.’ Do we not recognize this every day in common historical talk? Is it not one of our commonplaces that ‘the Eighteenth Century’—and ‘the Eighteenth Century’ must, in this calculation, be reckoned from about the year 1688, the year of our English Revolution, to about 1789, the year of the French Revolution—was, both in Britain, and over the rest of the civilized world, a century bereft of certain high qualities of heroism, poetry, faith,

or whatever else we may choose to call it, which we do discern in the mind of previous periods, and distinguished chiefly by a critical and mocking spirit in literature, a superficial and wide-ranging levity in speculation, and a perseverance reaching to greatness only in certain tracks of art and of physical science? Do we not observe that it is in this century that there arises and is established, as the paramount influence in British thought and British action, that distinction of Whiggism and Toryism by which we still find ourselves polarized into two factions, and which, however necessary it may have been, and whatever may have been its services in the past, is certainly so far from being the most profound distinction possible to the human reason, or even visible in human history, that there is not nowadays any noble or really powerful soul in these islands but, in his inner heart, spurns it, despises it, and throws it off? Do we not observe, further, that our historical writers divide themselves, as by the operation of a constitutional difference, into two sects or schools—the one seeking its subjects in the older ages of British History, back in the Puritan, or in the Tudor, or even in the feudal and Norman times, as if there were little of the highest order of interest

in the period which has elapsed since the Revolution; the other, with Lord Macaulay at their head, actually commencing their researches and their studies from the time when the modern distinction of Whiggism and Toryism makes its appearance, as if all before that were but chaos and barbarism, and only then our nation ceased to keep reckoning savagely by the stars, and began to voyage regularly by the loadstone?"

(前講演の終りに於て、余は一六六〇年の王政復古以來(斯う云ふと其時も注意して置いた様な多くの例外が出るから、それを避ける爲めに一六八八年の革命以來と云つた方が安全かも知れないが。)英吉利の社會及び英吉利人の智的活動が一新時期に這入つた様に見える。と注意して置いた。余は又普通の考へに従つて、英吉利人は此時から「あらゆる莊嚴なるものを捨てた」時代へ這入つたと云つた。是は通例の歴史に關した談話の際には終始認められて居る事の様に思ふ。この勘定から云へば、所謂「十八世紀」は英吉利革命の年即ち一六八八年頃から始つて佛蘭西革命の年即ち一七八九年頃迄に至るので、獨り英國のみならず自餘の文明國に於ても、ヒロイズムとか詩とか信仰とか、其外名は何と云ふにしても吾々が前代の人心中に認め得た一種高尚な氣質が跡を絶つて、文學に在つては非難嘲弄の精神となり、思索に在つては一般の輕浮淺薄と變じ、堅忍にしてよく大いなる發展を遂げたのは唯或種の藝術と物理科學の一

面に過ぎない時代であつたと云ふことは何人も熟知する所である。英國の思想及び英國の行爲上永久の影響を與へた民、王二黨——吾人は今猶二派に分れてゐる——の成立したのも此世紀の事である。しかも此二黨は其過去に於ける功蹟如何に拘はらず、人間理性のよくし得る最有力なる區別にもあらず、又實際の歴史上見る事を得べき最も有力なる區別にもあらず、偉大卓犖の士にして今日之を輕蔑せざるものは一人もなき有様である。更に進んで觀察すると、吾邦の歴史家は恰かも彼等特殊の傾向に天稟的に支配せらるゝが如く、必ず二派に分れてゐる。

——一は英國史の更に古い時代に遡つて其問題を清教徒の間に捕へたり、チュードロー期に求めたり、或は封建時代ノーマン時代に探つたりして、恰も革命以來經過せる時代は殆ど彼等が最高の注意を拂ふに足らざるかの如く見做して居る。之に反して一はマコーレーを其派の先頭として、近世の民黨王黨の區別が生じた頃から研究を始めて、其以前を總て混沌、野蠻と見做す、吾等が星で計算するなど云ふ蒙昧な方法を捨て、磁石で正則に航海するに至つたのも此頃からであると考へて居る。

マツソンは更に語を繼いで、この世紀に詩よりも散文の方が發達したのは、斯かる傾向に赴ける時代の要求に應じたものではあるまいかと論じて居る。兎に角この引證節は大體に於て私が曩に述べた十八世紀の概況と歸趨を同じうするから、兩者を照し合せて見ると其意義も自のづから

明瞭なる譯であるが、マツソンが十八世紀を評して莊嚴の無い世だと云つたのは面白い。たゞに政治宗教のみではない、文學上の述作にも崇高の感を起すものは殆んどない。前に論じたアヂソンとスチールは御承知の通りである。スキフトはもう少し大きくて凄い所はあるが莊嚴とは決して云へない。ポーブも今述べた通りである。下つてフェールデング、スモレット、リチャードソン、スターン其他の諸家に至つて悉く同じである。其うちでも最も崇高莊嚴の反對極にあるものがデフォーである。デフォーの小説は氣韻小説でもなければ、空想小説でもない、撥情小説でもなければ滑稽小説でもない。たゞ勞働小説である。どの頁を開けても汗の臭がする。しかも紋切り形に道徳的である。デフォーの小説はある意味に於て無理想現實主義の十八世紀を最下等の側面より代表するものである。彼は身分の善い生れではなかつた。親は倫敦のクリツブルグート(Cripplegate)と云ふ所の屠者である。彼は生れながらの記者で、二十一歳にならぬ以前(一六八三年)既に一卷の書を著した。尤も是れは政治的のもので、今では誰も讀む者はない。元來彼は非常な達筆家で、一生の中に書いた書卷の數は實に三百部近くに上つて居る。従つて其十分の七位迄は皆反古同然で名前さへも忘れられてゐる位だから、彼が第一の著書が他同様の運命に陥つたと云つて別に怪しむには足らない。唯一生の間に三百部近く書くと云ふのは非常な達筆家兼愛筆家でなくては迎も出来ない仕業である。だから彼が二十一歳に成るか成らぬ青年時代から既に

著述に取り掛つたのは、彼の性癖として大に記憶すべき事實である。

彼は斯くの如く生れながらの記者であると同時に又奮闘家であつた。二十五歳の時にモンマス公(Duke of Monmouth)の爲めに劍を執つて軍に従つた。戦争が済むや否や、彼は直に宗教上の論争に加はつた。これはジェームス二世の御代である。革命の際には自から義勇兵の一人として、王と王妃とに従つて白宮(Whitehall)當時の倫敦の宮殿)から市尹の邸(Mansion House)へ移つた事もある。

斯くの如く軍人だか宗教家だか政治家だか分らぬ上、同時にメリヤス屋を商賣にして居た。のみならず、一六九二年には借金に責められて逃亡した。さうかと思ふとチルベリー、フォート(Tilbury Fort)と云ふ所で瓦屋を営むで居た。彼はキリヤム王(King William)の時代を企圖時代と呼んだが、實を云ふと彼自身が大なる企業家であつた、經營家であつた。彼は様々な事に關していろいろな意見を有して居た。貨幣に就いて論文を書いた。區立銀行を計畫した。破産者の財産の調査委託を建議した。又貧民救済の爲めに養老金事務所の設立を案出した。加之一六九六七年には『企業論』を出版した位である。其書中に於てルイ十四世を眞似て a society for encouraging polite learning, for refining the English language, and for preventing barbarisms of manners (都雅な學問を獎勵し、英吉利語を優美にし、粗野な作法を防止するた

めの協會)を建設せよと暗にキリヤム王を勧誘した。即ち學士會院(Academy)をつくれと云ふのである。一六九五年には終に役人に成つた。其役柄は硝子税取扱掛りに屬する會計官(accountant to the commissioners for managing the duties on glass)と云ふ税吏である。

斯くの如くいろいろな方面に意見のある人であるからして、縦令詩を作つても實用的の事しか書けないものと見えて、一七〇〇年には『眞正の英人』(The True-born Englishman)と題する諷刺詩を作つた。何故此詩を作つたといふと當時タツチン(Tutchin)なる者がゐて、『外國人』(The Foreigners)の題でキリヤムと和蘭國のことを滅茶苦茶に悪口した末、畢竟彼は外國人なりと絶叫したことがある。デフォアの詩は取も直さずそれに對する答辯であつた。これが因縁と成つて彼はキリヤムの信任を博する様になつた。いろいろ恩賞を受けた事もある。官邊の用事で外國などへ内密に派遣された事もあつた。それより以後彼は種種の著作を公にした。部數から云へば浩瀚であるが、内容はいづれも同一である。一寸其題目を擧げても、『議會の承諾を経たる常備軍は自由政府と矛盾するものにあらざる論』(An Argument, showing that a Standing Army, with Consent of Parliament, is not inconsistent with a Free Government)だの、『抗議』(Remonstrance)(是は彼が女装して、議院へ入場せむとするハレー議長に自から渡したもので、専横なる衆議院の態度に對する抗議である)だの、『審査確定せる英國民の衆合團體の本源の權利』(The Original Power

of the Collective Body of the People of England Examined and Asserted) だの、『佛國との開戦に反対する理由』(Reasons against a War with France) だので、彼が如何なる記者で如何なる傾向の人であつたかは、此恐るべき長々しい表題を見ても容易に知ることが出来る。一七〇二年にキリヤムが死んで、デフォーは保護者を失なつて仕舞つた。それにも拘はらず彼は女王アン即位の後も、依然として内治及び宗教の論争に携はつてゐた。しかも非常に活動した。當時書いたもの、中で後世迄傳はつて居るのは、『非國教徒に對する最捷路』(The Shortest Way with the Dissenters) と云ふ論文である。是れは高教會(High Church)の黨與を嘲弄したものであるが、餘り反語が巧妙な爲めに却て反對黨の人からも歓迎されたと言傳へられてゐる。

過去二十年間に知らず／＼地雷火を詰め込む方に忙がしかつたデフォーは、こゝに至つて、これが爲めに彼の家族とを空中に吹き飛ばされて仕舞つた。彼は嘗てモンマス公のために戦つた。ジェームスに反対した。革命を辯護した。キリヤムに頌詩を奉つた。人民の集合團體の権利のために闘かつた。フランダースの戦争に反対して、軍政と財務との不快を買つた。衆議院に於ける王黨の首領サー、シイモアとサー、クリストファー、マスグレーヴとをひやかした。最近には全國の高教會派の僧侶を嘲弄した。こゝに至つて、終に人と黨派との抵抗すべからざる程に猛烈なる憎惡を避くるために、隱家を求めて逃亡しなけりやならなく成つた。一七〇二年政府は賞

金を懸けて彼の所在地を搜索した。其當時の官報に載つて居る人相書には、"a middle-sized spare man, about forty years old, of a brown complexion, and dark brown hair, though he wears a wig, having a hook nose, a sharp chin, grey eyes, and a large mole near his mouth"(中身長の瘠せた四十歳位の男、顔色は褐色を帯び、頭髮は同じく暗褐色にして假髪を頂く、鉤鼻で顎は尖がり、眼は灰色、口端に大きな黒子あり。)とある。その後彼は終に誹譏の科で頭手架の刑罰を受けた上、罰金、禁錮の厄に遭つた。此際彼は三千五百磅を失つて遂に破産したのである。然し獄中に於ても彼の活動は毫も減退することなく、ニユウゲート(Newgate)の獄舎に在つて詩を作つて自から慰むる以外に尙ほ他の計畫を始めた。先づ其詩の一節を紹介すれば、

"The first intent of laws

Was to correct the effect, and check the cause;

And all the ends of punishment

Were only future mischiefs to prevent:

But justice is invented, when

Those engines of the law,

Instead of pinching vicious men,

Keep honest ones in awe."

(法の始めのころざしは、果を正し因を阻むにありき。罰のあらゆる目的は悪を未然に防ぐのみ。然れども罪あるものを懲らさずして、徒らに直き人を恐れしむる法律機關ならば、正義は顛倒す。)と云ふ様な句がある。白隠和尚の粉挽歌の類である。よく斯う云ふ詩が作れたものと思ふ。又彼が『タトラー』(The Tattler)、『スペクテーター』(The Spectator)、『ガーヂアン』(The Guardian)等の先驅者たる『評論』(The Review)と云ふ定刊雑誌を發行したのは此際である。(一七〇四年二月一九日から始まる。)此『評論』は本國並びに外國の新事件、英國及び歐洲の政事、特殊並びに一般上の貿易を材料としたものであるが、當時の状況として、如何に有益なる報導も興味が無ければ讀手が無い。そこでデフォォーは三面俱樂部(Scandal Club)と云ふものを製造して、此俱樂部が宗教、道德、戦争、商賣、言語、詩歌、婚姻、賭博、醉興等を論ずる體にして客を釣つた。今も云へる如く、是れが『スペクテーター』などの出る因を成したので、ジョンソンがアヂソンを以て風俗改良の先驅者の様に云つたのは間違ひである。デフォォーが牢獄に在る間に、時の衆議院議長たるサー、ロバート、ハーレー(Sir Robert Harley)が突然手紙を以て彼の爲めに何でも援けに成つてやらうと云つて來た。これはハーレーが彼の才を認めて、自家の手足として使ふに便宜なのを看破したからである。のみならず彼は女皇に謁見の際いろ／＼デフォォーのこ

とを取傲した結果、女皇はゴドルフィン卿を遣はして少なからぬ金員を其妻に與へ又デフォォーには罰金を拂ふに足るだけの金額を下賜した。デフォォーが女皇を徳とし、ハーレーを恩人と思ひ出したのは此時からである。彼は一七〇四年の八月に出獄した。其時は法規が紊亂して、黨派心が非常に劇烈であつた。之を證明する話がある。デフォォーが去る用事の爲めに旅行をしたら、反對派の者が彼を兵隊にして兵營へ送らうとした。デフォォーがこれを拒むと、今度は土地の役人で最も鋭意なる者は彼を無籍ものとして捕へやうとした。今の世に新聞の發行者がどこを旅行したからと云つて、又如何に其人が邪魔に成るからと云つて、之を妨害する様な事は無い筈であるが、當時は随分此位な亂暴を働いたものである。彼はこゝに於て『神聖なる法によりて』(Jure Divino)と題する長詩を作つて個人の權利を主張した。詩を作つてこんな議論をすると云ふのも、今から見れば馬鹿々々しい話であるが、當時はそれで可かつたものと見える。

幾許ならずして彼はゴドルフィン卿の紹介で女皇に謁見の榮を得た。且其内命を含んで蘇格蘭へ向けて出立した。其後は黨に首を突込んで例の如く散々騒いだ上句、一七一三年に至つて遂に『評論』を廢刊した。ゲー(Gay)がこれを評して、"The poor Review is quite exhausted, and grown so very contemptible, that though he has provoked all his brothers of the quill,

none will enter into a controversy with him. The fellow, who had excellent natural parts, but wanted a small foundation of learning, is a lively instance of those wits who, as an ingenious author says, will endure but one skimming." (憐れなる『評論』は氣勞れ根盡きて實に惘然な最後を遂げたのである、幾ら他の同業者に喰つてかゝつても、誰も眞面目に論争の相手と成る者が無い位惘然なものであつた。優ぐれた天賦の才能は有しながら學問の根柢を缺いた彼奴は、旨いことを云つたある作家の言葉を借りると、辛うじて一擦過に堪へる才子の好標本である。)と云つた。これで見ても、彼が當時の文人から如何に目せられて居たかゞ分る。『評論』を廢刊した後も、彼は矢張り政治的論文を書いて騒いで居た。ところが又忌諱に觸れて捕はれた。八千圓出して保釋を願つたとある。女皇アンが死んでからも、依然として同じ調子で進んで行つたが、遂に一七一九年に至つて、有名な『ロビンソン、クルソー』(The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe)といふ小説を公けにした。殆んど六十歳に近い頃である。これが出版に成るや否や大好評を博した。出版せぬ前は原稿を賣附ける爲めに諸方の本屋に交渉しても皆斷はられた位であつたが、最後にテイラー(Taylor)といふ男が買ひ込んで、これが爲めに一萬圓以上も儲けたと云ふ話である。何故斯う一時に賣れ出したかは容易に説明出來ないが、此書の特徴に就いては後に少しく述べて見る積りである。ところが『ロビンソン

論評學文

ン、クルソー』が出て評判に成るや否や、彼は直ぐ敵から攻撃を受けた。攻撃と云ふのは『クルソー』に倣つた標題で、デフォーの私生涯を書いた冷評的の作物があらはれた事である。其書の名は『南北不列顛王國に五十年以上單獨に生活したるメリヤス屋、倫敦のD—D—君の傳と其奇的烈なる冒険』(The Life and Strange Adventures of Mr. D—D—, of London, Hosier, who has Lived above Fifty Years by himself in the Kingdoms of North and South Britain)と云ふので、中にはクルソーも出るがデフォーも出る、フライデー(Friday)も出て来る、三人が懸合ひでデフォーの不幸を嘲り彼の經歷をひやかしてゐる。冷嘲はこれに留まらない。同じ年に『有名なるロビンソン、クルソーの著者D—D—に與ゑるの書』(An Epistle to D—D—, the Reputed Author of Robinson Crusoe)と云ふのが出た。其中には“Mr. Foe, I have perused your pleasant story of Robinson Crusoe; and if the faults of it had extended no further than the frequent solecisms and incorrectness of style, improbabilities, and sometimes impossibilities, I had not given you the trouble of this epistle.”(フオー君よ、余は『ロビンソン、クルソー』なる愉快な物語を一讀した。而して若し其缺點が随分少くない文法上の誤謬だの、文體の不齊だの、乃至は有り相もない事柄、時として有り得べからざる事柄だのといふ者以上に出なかつたならば、實は態々本書を足下に讀むで頂くにも及

ばなかつたのである」と。此男は『ロビンソン、クルーソー』の下巻が出た時にも大に攻撃した相である。斯様に有名に成ると同時に四方から攻撃の批評を受けたが、今では『ロビンソン、クルーソー』だけ残つて、其等の批評は悉く忘れられて仕舞つた。彼は一般の公衆を味方に有つて居る。幾ら悪口を云ふても賣れるから仕方が無い。又いくら悪く云はれても、賣れ、ば書くと云ふのがデフォアの主義で有つたらしい。一七一九年の四月に上巻を出して、同じ年の八月には其下巻を出した。下巻を出版して猶飽足らないか、遂に一七二〇年には『ロビンソン、クルーソーの生涯に於ける嚴肅なる考慮及び彼が仙境の幻景』(Serious Reflections during the Life of Robinson Crusoe, with his Vision of the Angelic World)と云ふ書を出した。何處までもロビンソン、クルーソーで押通して行く積りと見える。

此冒険談に就ては、勿論悪く云ふ側の云ひ分ではあるが、アレキサンダー、セルカークと云ふ、難船して四五年無人島に暮した男の日記を偷んだものと云ふ説が大分行はれて居る。然し實は左様で無いと云ふことが殆んど證明されて居る。けれども、そんな考證は大切とは思はないから、別段これを深く述べる必要はあるまい。兎に角、『ロビンソン、クルーソー』で成功した彼はこれに味を占めて、續々小説を書く様になつた。一七二〇年中に『キアピテン、シングルトンの一生と海上泥棒』(The Life and Piracies of Captain Singleton)を出した。是れはシングルト

ンと云ふ小兒が誘拐されて浮浪漢に賣られて、其後マダガスカー(Madagascar)から亞非利加を横斷するといふ大變なお話である。それから時日は不明だが同年頃に『騎兵の記録』(Memoirs of a Cavalier)と云ふ、名前のあらはす様な従軍日記を出した。これにはガステーヴス、アドルフス(Gustavus Adolphus)に従つて獨逸で戦争をする話やら、チャールス一世(Charles I)に従つて英國で戦争をする話を書いてある。何でも實際の文書に依て起稿したと云ふ評判である。同じく一七二〇年に『ダンカン、キヤムベル一代記』(The History of Duncan Campbell)を出した。是れは啞で而も學問が出來て豫占すると云ふ不思議な男の閱歷を書いたもので、其中には第二視覚の例などが澤山に出て居る。次に一七二一年に『モール、フランダーズの運不運』(The Fortunes and Misfortunes of Moll Flinders)を書いた。これはモールと云ふ私窩子で泥棒で重婚者で五遍も亭主を代へたといふ大變な女の歴史である。同じく一七二一年に『カーネル、ジャックの傳』(The Life of Colonel Jack)を出した。これは私生兒で掏摸の仲間入りをして泥棒を働く男の歴史である。一七二二年には『一六六五年の疫病日誌』(A Journal of the Plague in 1665)、これは疫病の有様を遠慮もなく書き立てたものである。それから一七二四年には『幸福なロクサナ夫人』(The Fortunate Mistress, Lady Roxana)を出版した。これは高等淫賣の歴史である。先づ小説としては此位なものであるが、其他の論文様の物に至つては、一七二七年迄何

か蚊か書いて居る。而して遂に一七三一年に死んで仕舞つた。

彼の作物の名前を順次に點検して、彼の閱歴と連結して見ると、又一方に十八世紀の特色をざつと胸の中に思ひ浮べて、雙方を好加減に攪き交せて考へると、デフォアの小説の性質は既にこのづから解つた様な心持になる。デフォアの作は實際、以上の講義から諸君が豫想になる——もし豫想が出来るなら——外には一步も出てゐないのである。

私が嘗て知人から書翰を受取つた事がある。見ると非常に美事な筆蹟で、如何にも床しい心持がした。けれども不幸にして、草體蜿蜒とでも評して好いのか、一向用向が解せなかつた。已を得ず人の所へ馳せ付けて、讀んで貰つて漸く返事を出して済ました。デフォアの小説を讀むと對照として此手紙の事を考へずにはゐられない。彼はいくら美事でも解らぬ手紙はかゝぬ男である。下手でも、拙でも旅館の勘定書の様に明細にかく、必ず拂の取れる様に書く男である。活版より木版が雅で、木版より肉筆が妙だ抔と餘計な趣向を凝らさない男である。出來得べくんば、悉く一號活字で麗々とのべつに書きたがる男である。もし文章の一極端に詩と名づけるものがあつて、反對の極端に散文と云ふものが控へてゐるならば、もし詩が道樂で散文が用事とすれば、もし詩が面白い座談で散文がさつさと片付けべき懸合事とすれば、デフォアは決して詩に觸れない男である。觸れ得べき性質を有してゐなかつたのみならず、觸れる事を屑しとしなかつた男である。

否頭から詩を輕蔑した男である。デフォアの作物を多少でも研究する前に、其大體の調子を御紹介する爲に、一寸した例を擧げる。

茲に二つの句がある。始めは沙翁ので、後のはデフォアのである。之を比較するのはたゞ調子を見る爲で、あらゆるデフォアを此比較で律する積ではない。

a. Uneasy lies the head that wears a crown.

7. Kings have frequently lamented the miserable consequences of being born to great things, and wished they had been placed in the middle of the two extremes, between the mean and the great.

雙方とも内容は似たものである。けれども一方は詩で一方は散文になつてゐる。一方は凝つた言ひ廻しかたで、一方は尋常な話し具合である。一方は人を留まらせる、一方は人を走らせる。一方は考へさせる、一方は一字毎にはき／＼片付いて行く。好嫌は人により又場合によるのは無論であるが、何故かう云ふ相違が出るのだらうかとなると、此結果を解剖して見なければならぬ。

沙翁の方は帝王が一年中(十年でも二十年でも宜しい、彼が位にある間は何日でも)の状態を一瞬につゞめて表はしてゐる。uneasy 日本語に譯すと不安となるが、此字がよく利いた字で、例

へば足の折れた椅子に腰を卸して不安であるとか、ツボン釣が擦り落ちさうで不安であるとか、凡て長時間の経過を待たないで、すぐ眼に映る状態の不安を示してゐる。次に来る crown 横はるといふ字も視覚に訴へる字である。第三の head 即ち頭は勿論の事である。crown も其通り。すると冠を頂く頭は安からずと云ふ句が如何にも明瞭に眼に浮んで来る様に鮮やかに出来てゐる。で其状態は帝王の不安を無期限にあらはしては居るが、苟しくも其状態のつゞく限りは此句でもつて、何時も眼に浮ばせる事が出来るのだから、全部を代表する斷面的の句の様なもので、之を外の見地から説明すると、十年乃至二十年の状態を一瞬の間に煎じ詰めた句だとも云へる。それから時間をつゞめる許ではない。帝王といふ大きなものを冠の一字で代表さしてゐる。この字が適切であるが爲めに、丁度度の合はない双眼鏡の度が合つた様に、帝王が明かに見え出して来る。

デフォーはこんな技巧をやつてゐない。長いものは長いなり、短いものは短かいなりに書き放してゐる。いくらぼんやりした遠景でも肉眼で見えてゐる。度を合せない許ではない、始から双眼鏡を用ひやうとしないのである。まことにまともなものであるが、悪く云へば知慧がない叙法と云ても可い。厭味や氣障は決して出ないが、器用とは云はれない。否心配して讀者の便宜を計つて呉れない書き振とも云へる。もしくは伸縮法を解せぬ、弾力性のない文章と評しても構はないだらう。汽車汽船は勿論人力車さへ工夫する手段を知らないで、どこ迄も親譲りの二本足での

そ／＼歩いて行く文章である。そこが散文である。散文とは車へも乗らず、馬へも乗らず、何等の才覚がなくつて、唯地道に御拾ひで御出になる文章を云ふのである。是は決して悪口ではない。歩行は人間常體の運動である。輕業よりも餘程人間らしくつて心持がいゝ。けれども年が年中足を描木にして火事見舞に行くんでも、葬式の供に立つんでも、同じ了見でつく／＼遣つてゐるのは本人の勝手とは云ひながら餘り器量のない話である。デフォーの作物を批評する冒頭に於て先づ是文を承知して置いて貰ふ。

楮斯の如く散文的で萬事着々進行すべき筈の書き方であるのに、デフォーの小説を讀んで見ると、どれもこれも皆長い感じがする。長いといふのは頁數が澤山あつて、讀むに暇がかゝるといふ意味ではない。四五百頁在ても短かい物がある。二三十頁でも長いものがある。ではデフォーの作物はどう云ふ點で讀んで長い心持がするか。

凡ての作物に就いて云ふ話であるが、比較的長い物を書いて短かく讀ませる工夫はいろ／＼あるだらう。其中で、筋の組立が引き緊まつて全篇に無駄が無いといふことが大分此問題に關係してゐる様に思はれる。人間には頭がある、足がある、胴がある。それでびん／＼活動する。手を切つても不自由である。足を切れば歩けなくなる。頭を破れば死んでしまふ。人間が人間として生存する爲めには、是非ともこれ文の諸機械が備はつて居なければならぬ。多過ぎるからと云つ

て手を一本切つたり足を一本取つたりしては一人前として通用しなく成る。小説も其通りで、幾ら長くとも各部がそれ／＼必要な役目を有つて居る以上は、讀んでもつともだと思ふ。長いには相違ないが、長いからと云つて何處を切り離さうにも切取る處がない。無理に切離せば不具に成る、片輪の小説に成る。一人前の小説である爲めには、長くとも是非これ丈は書かねばならぬと思ふ。そこで左様いふ小説はどんな性質を帯びて居るだらうかと考へて見ると、つまりは組立論をやらなければ始末が付かなくなる。その組立が煉瓦を積んだ様に緊密で、たとひ一枚たりとも勝手に引抜くと、總體がすぐ瓦解すると云つた具合に出來て居れば、幾許長くとも讀者は成程と合點しなければならぬ、尤もだと思つて讀まざるを得ない。長いものをつい短かく讀まされて仕舞ふ。それでは左様いふ組立はどんな組立か説明して見ると成る。私はそれをかう説明する。或一つの筋の縦に貫ぬいて居るもの(ある場合には横に行き渡つてゐるものになるかも知れない。筋の意味、貫ぬく、行き渡るの意味は、後段に性格や事件を説明するとき、自から分る様になる。)が即ちそれである。何となれば其筋があらゆる編章をセメントで堅めて動かぬ様にするからである。他の言葉で云へば興味の統一(Unity of Interest)を興へるからである。然し唯一つの興味が一貫するだけでは統一を興へると云ふ許りで、それ以上に刺激性の興味といふものが無い。統一はあるかも知れぬが死んだ統一である、器械的義理一遍の統一である。何故と説明するがも

のではない、統一に自由が無いからである。兵隊の舉止動作に統一がある如く統一には相違ないが、外から威壓的に餘儀なくされる統一である。型に這入つた統一である。作家があらかじめ筋を作つて、作中の人物を其筋に合ふ様に働かせるから統一が出來たといふ迄で、作中の人物の方では、此統一を無理にも維持する爲めに作者から強ひられてゐる。讀んで窮屈である。生氣がない。だから此弊を免かれる爲には、是非共篇中の人物の方が自由意志に従つて、自分で纏まつた筋を構成する様に働らいて行かなければならぬ。さうすると其小説の統一は作者の作つた統一でなくつて、篇中人物の作つた統一になる。だから有機的になる。形式を脱して生氣を帯びてくる。統一が心理上の必要になつて來る。

有機的の統一は器械的の統一と同じく部分と部分の關係から成立する。たゞ有機的であり得る爲には、部分と部分が作者の命令によつて關係してゐてはならぬ。自己の本性によつて連結しなければならぬ。(作家が大事件の推移を寫すに偶然を嫌ふは此嫌を避くるが爲である。)部分と部分が自己の本性によつて連結する以上は、兩者の關係は心理上の因果によつて縦に推移しもしくは横に展開しなければならぬ。心理上の因果によつて推移しもしくは展開する統一は、統一の爲めの統一ならずして、發展の爲めの統一とも見る事が出来る。發展はどこかで留まらねばならぬ。永劫の發展は宇宙の大法であるにも拘はらず、段階を畫して發展の一時期を終るも自然の原則で

ある。發展の末後に落着の一段を添ふるは自然の歸着であつて、統一の一部分である。もし末段に解決の燈火を點せぬ時は、前後を一貫して、凡ての發展の裏面全體に之と均しきあるものを備へて、統一の感を保護せねばならぬ。是は自然の原則であると同時に人間の要求である。人間の自然を觀察するときは、必ず此點に達して已むのが常態である。觀察して此點に至らざるものは未だ自然を語る資格のないものである。その人の説はいまだかつて人類に採用された試しがない。觀察者自身も自から不満足を感じて、大抵は之を發表せずして已むものである。ある意味から云つて纏つたものでなければ、いか程の自然でも、書かぬと同じ結果に陥るのである。寫眞の様な器械的のものでも、ある所、ある時、ある物として統一の感を起し得る自然を撰んで置いて、しかる後にカメラを應用してゐる。だから小説は自然にあるかも知れない、然し自然のある部分を、ある位にひき千切つて、唯有の儘だから小説だと號しても、人には讀まれない。同時に一見自然に落ちてゐさうな事でも、以上の諸件に適つてゐる以上は小説として通用する。もし深く研究すれば自然としても通用するかも知れない。私は最前デフォーの作はいづれも長い感じがすると云つた。其長い感じを解剖して見ると、全く此條件を具備してゐないからといふ事に歸着する。デフォーは日常の事實以外に何事をも書かぬ人である。『ロビンソン、クルーソー』の如き漂流譚ですら車夫が車を引く様な具合に書いてある。だから自然と云へば尤も自然に近い作者である。それが長くて讀みづらいのは、自然不自然の點から起つたのでない事は明らかである。全く構造の點から來たものと私は信じてゐる。

世の中は纏つたものではない、冗漫極つたものだといふ人がある。それは同意しても好い。然し自己が世の中を觀察する態度がきまると、世の中も存外締め括りのあるものである。此締め括りのある觀察を筆にしたのが小説である。世の中が冗漫だと云つて、自分が冗漫な事には頓着せず、無頓着に冗漫なものを書いて是が世の中だといふ。世の中かも知れないけれども、世の中をどこから見たのか分らない。現に世の中を見せられても、明らかな印象がちつとも起らなければ、見せて貰はないと一般である。

世の中は冗漫かも知れないが、これを觀察する人が、一定の態度で、此冗漫の人生を部分に區切つて、一種の纏まりを付けてゐると、其人は其纏りを付けた爲めに、それ〴〵便宜を受けてゐる。纏りをつけると云ふ事はある結末に達したといふ事で、結末をつける事、即ちある目的を立て、其方面に進むといふ事はあらゆる活動の源である。結末を製造せぬ人生は苦痛である。人間は此惰性に驅られて、常に實利實害の及ばない邊迄も結末を附着して纏めたがる。但し結末とは時間もしくは場所に於て最後に來るべき收束の一節を指すのは無論であるが、際どく階段を形づくつて全部の落所を示し得る現象ばかりを意味する様になると、寧ろ形式に陥り易い。結末に達

すとは、ある順序をもつて配置されたる現象が、ある遞次に至つて已んだ時、吾人がそれ以上を望む必要に逼られない状態を指すので、是等の現象が全部として、全部らしく感ぜられ、物足らぬ思なき満足を得た時に云ふ言葉である。あらゆる現象に對する此態度は、二様の心理作用を含んでゐる。一は注意の集注である。散漫を忌んで一圖に其方面に向ふ。一は結末に達した時、この凝つた注意が解けほぐれて安心をする、休息の状態に復する。

吾人が實利以上に走つて、あらゆるものに結末を附着せんとするのは生存競争の惰性から出た酔興(廣義に云へば永遠の必要)に過ぎぬが、一たび結末を建立した以上は注意の姿勢を取らねばならぬ。注意の姿勢が長く續くと疲勞する。縦し疲勞せぬにしても其姿勢は普通の状態ではない。従つて注意の姿勢に立つ以上は、必ず其姿勢の儘で立往生する事を忌む。この不安の念は結末が達せられた時、始めて休息の状態に復して收まるのである。直接に間接に猛烈に微弱に、苟しくも生存競争にたづさはる以上は、人生の如何なる方向に對しても此態度が大なる公式である。

従つて小説も此公式に外れぬ様に仕上げるのが尤も人情に適つた組織である。必ずしも自然を枉げよと云ふのではない。直き自然の其儘を、此公式に合ふ様に切り取り得る様な態度で、自然に向はなければならぬと云ふのである。自然そのものは冗漫だから、締め括りのある様に解釋をつけること云ふのである。改造せよと云ふのではない。所謂想像の事件、想像の人物は、作家の頭

腦で締め括りのある様に自然を解釋した結果と見ても差支ない。彼は臆斷專見を以て、自然を改造し、もしくは捏造したと稱するのは、この冗漫なる世相を如何に解釋すべきかの問題にまだ會つて頭を痛めた事のない人の言草である。かれ作家を捕へて、彼等漫に自然以外を想像したりと非難する前に、穩當に自然を觀察し、一定の態度を以て之に締め括りをつけた曉には、どんな形を具して、あらはれ得るかと考へて見れば分る。所謂想像の産物のあるものはその一種に過ぎないであらう。

私はデフォーの作物が長く感ぜられると云ふ賞翫的態度から出立して、小説全體に涉つて、一應組織法を研究して見た。デフォーの作の組織は以上の條件を具へてゐないから、しかく長く感ぜられるのであると斷定した。猶彼の作物に當つて實際に論じて見たい。

デフォーの作物が如何に上述の議論に適はないかを説く爲めに、少しく器械的の徒戯の様であるが、彼の小説がどう始まつて、どう終るかを比較して見やうと思ふ。と云ふものは彼の小説の首尾だけを比べて見ると、悉く同一の鑄型に這入つて居ると云ふことが解つたからである。私はそれから上に述べた議論に關聯して彼の作物を評するに足る或緒口を引出さうと云ふのである。器械的な手續を濟ますと、器械的以上に得る所がないとも限らない。先づ有名なる『ロビンソン、クルーソー』の冒頭を見ると、"I was born in the year 1632, in the city of York, of

a good family, though not of that country, my father being a foreigner of Bremen, who settled first at Hull.”(余は一六三二年にヨーク市の一良家に生れたが、父はブレメン生れの外國人で、一番先きにハルに移住したものであるから、本來此國の家柄と云ふ譯ではなかつた。)とある。又結末には、“To conclude, having stayed near four months in Hamburg, I came from thence over land to the Hague, where I embarked in the packet, and arrived in London the 10th of January, 1705, having been gone from England ten years and nine months. And here, resolving to harass myself no more, I am preparing for a longer journey than all these, having lived 72 years a life of infinite variety, and learned sufficiently to know the value of retirement, and the blessing of ending our days in peace.”(端折つて云へば、ハムバークに四箇月近く留まつた後、余は陸上をハアグの港まで来て、其處から定期船に乗つて、一七〇五年二月の十日に倫敦へ到着した。英國に在らざること恰度十年と九箇月である。そこで數ふれば七十二年の間思ひ切つて變化に富んだ生活もして來たし、徐ろ／＼隱居の味も分つて來る。平和に晩年を送る仕合も懐かしく成つたので、最上此上は二度と苦しい旅へは出まいと極めて、これ迄よりもずつと長い死出の旅へ赴く用意をして居る。)と結んでゐる。

次に私窩子の話を書いた『モール、フランゲース』を見ると、其始めは、“My mother was convicted of felony for a petty theft…… my mother pleaded her belly, and being found quick with child, she was respited for about seven months.”(私の母は一才した窃盜のため、めに重罪に問はれた……私の母はお肚の事を云ひ立て、拒むだが、小供を孕んで居るといふことが分つて、七箇月間刑の執行を猶豫された。)と自分の生れぬ先きから書き出して、終りには“I am come back to England, being almost seventy years of age, my husband sixty-eight, having performed much more than the limited terms of my transportation.”(私は流刑の年限よりもずつと餘計濟まして、私が七十歳に手の届く位、良人が六十八歳で、英國へ歸つて來た。)と留めてある。

次に『キアピテン、シングルトン』は如何かと云ふと、“If I may believe the woman whom I was taught to call mother, I was a little boy, of about two years old, very well dressed, had a nursery-maid to attend me, who took me out on a fine summer's evening into the fields towards Islington, as she pretended, to give the child some air……”(阿母ちんと呼べ／＼と吩咐けられたあの女の云ふ事を眞實だとすると、私は好い着物を着て嫁姆に抱かれた二歳位の小供であつた。この嫁姆は小供に新鮮な空氣を吸はせる爲と托けて、或夏の晴れた

晩景にイスリントンの方の野原へ私を連れ出した。)とシングルトンの二歳の時から筆を起して、其大尾には“…… And yet we came with such a cargo to London as few Armenian merchants had done for some years ……”(この數年間見渡したところでアルメニアの商人でも逆も及ばない様な素張らしい船荷を積むで、吾々は倫敦へ遣つて來た。)とあるから、年齢は書いてなくても兎に角倫敦へ歸つて來て居る。

それから『カーネル・シヤツン』を見ると“*My nurse told me my mother was a gentle-woman, that my father was a man of quality, and she (my nurse) had a good piece of money given her to take me off his hands, ……*”(乳母の語る所に依れば、我母は良家の女で、父も歴々の貴人であつた、而して乳母は父の手許を離れて私を育てるために多分の金子を貰つたといふ事である。)と矢張り生ひ立ちから述べて、最後は“…… and from Cadiz I soon got my passage on board an English merchant ship for London, from whence I sent an account of my adventures to my wife, and where, in about five months more, she came over to me, leaving with full satisfaction the management of all our affairs in Virginia in the same faithful hands as before.”(カヂツから或英吉利の商船に乗込んで私は倫敦へ到着した、其處からして妻の許へ旅行中の冒險を申し送たが、其後四箇月経て、妻も亦ヴァージニア

に於ける用務一切を前と同じ忠實な人の手に安心して任せて置いて、倫敦なる私の許へ遣つて來た。)とあるから、矢張り倫敦へ歸つて市が榮えて居る。

なほ『ロクサナ夫人』の冒頭は“*I was born, as my friends told me, at the city of Poitiers, in the province or county of Poitou, in France, from whence I was brought to England by my parents, who fled for their religion about the year 1683, when the protestants were banished from France by the cruelty of their persecutors.*”(私はお友達のお云ふ通りだとすると、佛蘭西のポアツ州に於けるポアチエーと云ふ町で生れました。あの一六八三年頃新教徒が残酷な迫害を受けて佛蘭西から逐はれた時に、私の兩親も私を連れて英吉利へ逃げて來たと云ふことです。)とあつて、其大切りは夫人の侍女なるイサベル・ジョンソンの口を藉りて、“*And having, as she believed, made her peace with God, she died with mere grief, on the 2nd of July, 1742, in the sixty-fifth year of her age, and was decently buried by me in the churchyard belonging to the Lutherans, in the city of Amsterdam.*”(夫人自ら信する如く神様にも御託をして、一七四二年七月の二日に六十五歳を以て安らかに往生を遂げ、それから阿姆斯特ダムのルーテル派に屬する寺院の墓地に、私が手づから事落ちもなく葬りました。)と書いてある。

繁冗い様であるが今一つ『ダンカン、キヤムベル』を試めて見ると、“Of the goodness and antiquity of the name and family of this gentleman, nobody can ever make any question. He is a Campbell, lineally descended from the house of Argyll, and bears a distant relation to the present duke of that name in Scotland, and who is now constituted a duke of England, by the style and title of Duke of Greenwich.”(この紳士の家名の古く立派なことに就いては、何人も異議を挿む餘地がない。彼はアーガイル家の嫡流たるキヤムベル家の一人で、蘇國に於ける同名の公爵で、今はグリーンニツチ公爵の名の下に英國の公爵に叙せられた家と遠い親戚の間柄である。)と系圖から説出して居る。

偕て以上を綜合して考へて見ると、一目瞭然たるのはデフォアの小説が主人公を寫すのに必ず幼時から説き起すと云ふことである。甚しいのは主人公の両親又は系圖から始めたのさへある。而して其結末は必ず主人公が老人に成つて倫敦に落ち着くか、或は死んで仕舞ふことに成つて居る。(但し『ダンカン、キヤムベル』だけは除外例である。)これを一言にして云ふと、主人公の生涯の始めから終り迄寫すのが主意である如くに思はれる。成程斯うすれば始めがあり又終りがある。其點に於て纏まつて居ると云ふことが出来る。然し人の一生涯と云ふものは生れたからして何事か起つて、死んだから其何事か纏まると云ふものには無い。人が生れる。生れると云

ふことが夫自身に於て一事件かも知れぬ。一事件であるとするれば、人が死んだ時に其事件が失くなるまで、其波瀾が消えたのと其事件が纏まるのとは非常な相違がある。私は前段に於て纏まつた筋が必要であると云つた。然し其纏まると云ふ意味は興味が纏まると云ふことである。更に解剖して云ふと、離合し發展する事件が夫自身を竭して同時に統一せられると云ふ意味である。性格の活動と反動とが纏れ合ひ縋み合つて、或終極に到着すると云ふ意味である。人の生死は一の事實で、此事實が時によると今の條件に伴ふ場合もあるけれども、決して夫等と同一不二のものでは無い。生を始めとすれば死は終りであると思ふ。成程それは終りである。然し生と云ふものに對しての終りである。生の有して居る波瀾の終りではない。波瀾の終りかも知れぬ。然し波瀾の收まつたものには無い。波瀾の收まつたものかも知れぬ。然し勝手に收まつたものである。專制的に天が收めたものである。藝術的に收まつたものには無い。收まる事の出来ないにも拘はらず、天が其人を殺して仕舞へば否應なしに收まるのである。然し事件に落ち著きの無いのは死んだ所で依然として異なる。吾人はそれで物足りると思はない。どこ迄も不満である。即ち吾人の要求を満足させぬ所から云ふて藝術的でない。前の言葉で云ふと、自然に對して取り縮りのある觀察をしてゐない。ゐる様に見えるのは只形式である。私の考では單に生死の二事件を眼中に置いて小説を書くのは、正月の元日から師走の三十一日迄日記を附けて、其中の出來事の纏

まり如何に拘はらずたゞ大晦日が來たから止めると云ふのと一般で、外形ばかり纏めて内容に頓著せぬものと云ふて宜しいと思ふ。従つて本末を誤まつた結構である。吾人は斯かる外形の纏まりを要求するよりも主題たる内容の纏まりを要求する方が強いのである。デフォーの作は此點に於て明かに誤まつて居ると共に、これが彼の作物を長く感ぜしむる原因の一つである。

デフォーの小説に始めあり終りあるは此處に述べた通りである。而して其首尾は外形に於てこそ首尾たり得べきも、内容に於て必ずしも首尾たり得べからざることも説明した。始めと終りに就ては斯くの如くであるが、始めから終りに達する道筋は如何であらう。暫らくこれに就いて論じて見やうと思ふ。余はこの前のところで、長い物を短かく讀ませる方法として興味が一貫せねばならぬと云つたが、其興味の如何なるものであるかは未だ説明しなかつた。そこで先づ之れからして少しく詮義して見たい。興味とは英語の所謂 interest で主觀的な感じである。これを一層明かにする爲めには分類して見る必要がある。而して興味なる文字の性質から云ふて主觀的な感じであるからして、矢張主觀的な分類でなければならぬ。同時に此主觀的な感じの原因になるもの即ち其對象に依て分類することも出来る。此方から云へば客觀的な分類である。客觀的な分類とは小説にあらはれた材料に依て興味の解剖を遣ると云ふ意味である。小説にあらはれた材料に依て分類をすれば千差萬別になるではあらうが、これを總括すれば、(1)小説中の性格(character)

より起る興味、(2)小説中の事件(incident)より起る興味、(3)小説中の景物(scene)より起る興味となる。所が是は一見甚だ明瞭な區別の様に思はれるが、少し考へて見ると、大分混雜して來る。

小説となれば必ず人物が出て來る。此人物は單純でも複雑でもある性格を具へてゐる。それから此人物は地球上のどこかに居る。即ち場所を離れる事が出来ない。此二つは誰の眼から見ても明らかな區別がある。困るのは第三の事件である。今私が諸君に向つて、性格と事件とは同じですかと聞いたなら、諸君は必ず否と答へられるに違ない。それなら事件と場所とは同じですかと聞いたら猶々否と答へられるだらう。しかし所謂事件なるものは、何から出來てゐるかと考へて見ると此二つから出來てゐるのだから仕方がない。それを詳しく御話すると、事件の一極端には、單に場所の活動から出來るものがある。例へば雪が降る、雨が降るの類である。又一方の極端を見るとき、單に性格の活動から出來るものがある。例へば人を斬る、人を助けるの類である。其中間には、場所に屬する人間(主人公に關係なき)が働いて起る事件がある。火事を出す。御祭をやる等である。或は主人公以外の人間が、主人公の意志如何に拘はらず起し得る事件がある。免職にする、細君が死ぬ等である。だから其極端を云ふと場所(の活動)即ち事件、性格(の活動)即ち事件で、別に事件といふ部門を設ける必要がなくなつて仕舞ふのである。で通例の事件は、此兩極の間を様々の姿に變じて往復してゐるのである。さうして此事件が性格(の活動)を離れて場所

(の活動)に近づけば近づく程、主人公から見て偶然の度が強くなる。と云ふのは主人公の内的表現と獨立して事件が起るからである。之に反して、事件が場所(の活動)を遠ざかつて、漸次性格(の活動)に密接な關係を有して起る様になればなる程必然の度が強くなる。事件が主人公の意志如何に因つて支配される分量が多くなるからである。(凡て事件の起る原因の方から云ふので、其結果を云ふのではないから混同してはいけない。)

で、前に私は作物は筋が通るか行き渡つて纏つた感じを與へなければならぬと云つた。此筋とは説明する迄もなく事件の事である。その事件が極端は場所の活動と性格の活動であるとする、場所の活動が纏つたものと、性格の活動が纏つたものとが、兩極端に出来る譯である。前者は例へば火事を火事の敘述として纏めた様なものになるが、小説は元來人物を主とすると云ふ定義を許す以上は、是は寧ろ切り棄て、も差支ない。残る極端にある性格の活動として纏つたものが遙かに重大である。(私は最初から人間と場所を並立させて論じてはゐない。人間を主として、其人間がゐる爲めには場所が附屬的に必要であると云つた迄であるから、よしや謂ふ所の事件が場所の活動から起つても、其結果として人間に影響を及ぼさない以上は、纏まる纏まらないに論なく急いで研究する必要はないのである。)

倍性格の活動として纏まり得る事件が純乎たる形式に於て自然小説にも存在し得べきものであ

らうか。残念ながら無いと答へるより外に仕方はない。凡そ天地間の現象は皆相當の理由があつて起らないものは一つもあるまい。相當の理由があつて起る以上は皆必然である。けれども私なら私、あなた方ならあなた方から云へば、自分と相談しないで勝手に起るものはいくらでもある。それ所ではない吾人の人生の三分二は實に此偶然から成立してゐる。自然は眞空を惡むかは知れぬが、自然は偶然に對しては實に寛大なものである。して見ると作物を作つても、一篇悉く性格の活動文から出来た事件を排列する事は、たとひ理に於て、望ましき事であつても、實際に於ては有り得べからざる藝である。だから偶然の事件と必然の事件とは如何なる小説に於ても相交はらなければならぬ。況んや起るときには偶然の事件でも其の結果は必然の事件を孕むやうな場合になる事が多いのだから、猶更之れを無用視する譯には行かない。

だから性格の活動から出る事件で纏つたものと云へば、比較的と云ふ條件を付けなければならぬ。しばらく此條件をつけて、さて此種の事件はどんな様式をとるか考へて見る。

(一)茲に必然なる性格の表現として甲と云ふ事件が出来る。此甲が同じく必然なる性格の表現なる乙に變ずる爲めには、性格自身のおのづからなる變化によるか、或は(此場合が十中八九である)偶然なる事件を輸入して性格の上に影響せしむるか二途に過ぎぬ。かくして甲が乙に變じ、乙が又同様の過程で丙に變じ、漸々變じ變じて庚に至るとすると、此事件の連鎖中から偶然

なるものをしばらく取り除いて、性格の表現なる甲乙丙丁……庚文を取つて考へて見ると、悉く心理的の因果律で束縛されてゐる。甲から丁に飛んでも、甲の次ぎに、甲を加へても不可けない。たゞ甲乙丙丁……庚のシリーズとして統一がある。(庚に來る因果が一段落告げたとすれば。) 最前私が、筋が縦に一貫してゐる統一と云つたのは、此シリーズの事である。何故縦かと云へば事件が推移する統一であるからである。之を性格の方から云ひ現はすと、性格の變化發展から生ずる統一である。

(二)前に述べた性格の表現として甲といふ事件が出来る。さうして、此甲が主人公の性格の一部一角にとゞまる事がある。すると次に出る乙丙丁……庚も亦此一部一角の推移と變化になる。(無論他部と關係もあり影響も生ずるに相違ないが。) 此一部一角が微細なれば微細なる程、次に出る連鎖は細くなる。しばらく見方を變へて此甲を大きなものにする。全性格の表現とも見得べき事件——たとへば學校生活中に起る事件とか、結婚後に起る事件とか、——是等は澤山あるに違ない、事件のかたまりに違ないが、しばらく其生活を代表するに足る様な事件を撰んで、さうして前の様な推移を描くと、理窟は同じ様だけれども、感じは大變ゆるやかな、大まかなものが出来る。どこと云つて鋭どくはない。ふは／＼してゐる。けれども矢張り統一が出来る。此統一は全性格の鈍い推移から來る統一である。急轉直下の勢で切迫して動かないから、遠くから眺め

ないと統一がない様に見える。是は(一)と同性質であるが、區別し得る程に感じが違ふから(二)とする。

(三)は推移を許さない。性格は依然として一所に停住する。此性格が偶然の事件と逢つて、必然の表現なる事件甲を生ずる。次に同性格が又偶然の事件と逢つて必然の事件乙を生ずる。甲と乙とは性格の表現である。けれども甲が乙に變化したのでもなければ、乙が甲から生じたのでもない。かくして甲乙丙丁……庚に至つて、相互の間には比較的因果の束縛が少ない。けれども甲乙丙丁……庚に至つて、全性格が始めて露出された様な心持になる。外部内部共に統一の感がある。是は推移から出る統一でなくつて、停住した性格の側面を一週して全體になる様に描寫し終つた統一である。但し全性格の意義は時と場合に生ずるのみである。寫し得て物足りれば、どこかに統一があれば、其作物にとつては、それが全部である。

(偶然の事件は必然の事件を引き起す道具に用ひる許りではない。調和の爲め、對照の爲め、或はそれ自身に於て興味あるため、本流の妨害にならぬ限りに於て使ふのは勿論である。)

以上はたゞ一個の性格を眼中に置いての議論である。小説は必ず一個の性格を描寫するとは限らない。二人三人乃至は十數人に至つて、繁簡主賓の差はあるにしても、一篇のうちに登場し得るものであるから、一個の性格から出る事件に統一がある如く、二人三人もしくは乃至十數人の

性格から出る事件にも、それ／＼の意味度合に於て、統一がなければならぬ。今之を詳論するの餘地なき故に略して、諸君の判断に訴へて置く。

以上三種の統一のうち、第一の統一には興味の加速度がある。第二の統一には興味の漸移と漸移より生ずる変化がある。第三の統一には興味の變化がある。此點より見て、第二は兩者の中間に横はる性質を帯びてゐる。第三の統一は、性格が動くと言はんよりも、作者が性格の周圍を動いて、性格の全部(或は一面の全部)を描き了せたりと意識する時に統一の感を生ずるのだから、必要條件として一局毎に變化を要する。變化なき局部は重複であつて、いつ迄重ねても、局部を脱して全部には至り得ぬからである。しかも此變化は第一の如く局部と局部の間に密接なる因果法を含んで前後する事の必要のない變化であるからして、作家、ことに古い作家は、動ともすると、偶然の事件を濫用して、變化の道具に用ひる。一見變化の目的はそれで達せられる。多少の興味はある。けれども、單に外部の變化である。性格の表現に至つては、依然として卷頭より卷尾に至つて、一行爲、一行動を繰返してゐる。極端の例を云へば岩見重太郎、宮本武藏の傳の様なものである。是程烈しくはないけれども、同型内に入るべきものは『ジル、ブラス』(Gil Blas)である。スモレット(Smollett)の作物である。其他一言にして云へば所謂ピカレスク小説(Picaresque novel)は皆此類である。近來のものを挙げればボロー(Borrow)の『ラングロ』(Lan-
guage)の様なものである。凡て是等の小説の極端になると、作家が全智全能の威力を以て偶然の事件を勝手次第に挿入して場面の變化をとる。場面の變化する割合に性格の活動は單調である。亞弗利加へ渡つても、大陸へ行つても、又は英吉利へ歸つても、似たり寄つたりの事をしてゐる。性格の方面を前後左右から見ても、其活動の變化からして始めて全部を了し得たといふ統一の感が起らない。たゞ單調な主人公が單調に働いて一貫してゐる丈が統一になる。だから嚴密に云ふと第三の中へは入れられなくなる。

以上の三種は無論諸君の便宜の爲めに私が區別したのである。實際の小説が純然此三類型に分れてゐる譯ではない。互に入り亂れてゐる。しかも斯う出来上つてゐる以上は、どうしても興味の統一がある。讀んだあとで、其統一のある興味は一つの凝つた感じに集注が出来る。それから此凝つた感じを一つの言葉に翻譯すると一句の命題になる。其命題には必ず人生の哲理を含んでゐる。翻譯の出来ない場合でも、出来さうな又出来ねばならぬ様な氣がする。之が作物の纏つた證據である。自然を締め括りのある様に觀察した證據である。偕是丈の御話をして置いてデフォに歸る。

私の知る限りでは、デフォの作物には以上様な統一が認められない様に思ふ。手間を省く爲めに尤も統一のあり氣な『ロビンソン、クルーソー』を取つて見る。あれは御承知の如く漂流

記である。無人島へ上がつて、如何に單獨な生活を持續しやうかと云ふのが主人公の目的である。彼が此目的を立て、此方向に進んで行く間は、其一成一敗の間に、遠い目的を對標にする便宜から、一種の統一は得らるゝ譯である。實際彼は此統一の感を完全にする爲めに一步々々と進んでゐる。彼は第一にわが住居とすべき宅地を定めた。難破船から帆桁だの錨纜などを取寄せて小舎を作つた。それから山羊を殺して、これを煮る爲に竈を作つた。次に船へ行つて聖書やら犬猫やらを連れてくる。ペンと印氣と紙を持つてくる。鋤、鍬、斧杯を取つて来る。椅子と机を造る。日課を極める。籃と手車を造る。山羊を馴らして家畜を飼ふ。垣根を造る。畠を作つて烟草、甘蔗をとる。案山子を立てる。それから有名な鸚鵡が出て来る。皿を焼く。石臼を作る。篩をこしらへる。野獸の皮を剥いて帽子や衣服を調へる。――まづ斯う云ふ風に着々進行する。これから先は野蠻人やフライデーがあらはれて、多少趣が違ふけれども、クルーソーの計畫は滞なく發展して行く。だから外の言葉で云ふと、一篇の筋は發展して行く。然しどう云ふものか他の場合の如く興味が乗らない。目的が尤も自然で、これに到着する段階が又頗る自然であつて、しかも興味に乏しいのは、此興味の性質が何處か他の場合と違ふに相違ない。

(一)クルーソーの事件は自家保存の大本能から出るのだから必然なる性格の活動である。けれども此必然なる性格の活動を引き起す、偶然の事件は死したる自然である。自然は夫自身の法則

を以てクルーソーに反應するかも知れないが、元來が受動的のものであるから、苟も自然の法則を犯さざる限りは些とも活劇が生じない。生ずれば之に對するものゝ前から持ち越した複雑な場合に限る。クルーソーは單に自然と相撲を取つてゐる。さうして着々進行する。然し石地藏と相撲を取つて番數も段々進みましたと云ふ様なものである。どこで好加減にやめても左して統一を傷けない。だから加速度の興味が無い。

(二)クルーソーが漂着以後仕遂げた事業は家を作るに始まつて畠を耕やすに至つて澤山ある。けれども之を類別すると簡單から複雑に、直接から間接に移るといふ普遍的な階段になる許りである。だから衣食住に必要な手段を器械的に取つてゐる丈で、内より動く性格の事件が階段を形づくつて漸移の興味と漸移に伴ふ變化の興味を興へない。

(三)は前二者と矢張相關聯して相互を説明する様になるが、彼の性格が漂着以後無人島を去る迄同一であつたと假定して、彼の全性格が此島中生活にあらはれてゐるかといふに、左う行つて居らん。今云つた通り彼は色々な事をやる。けれども其變化は單に外形上の變化である。實を云ふと彼の性格の一片なる忍耐、巧者、が皿となり、竈となり、乃至は畠、小舎となつてあらはれる丈である。だから上部は變化がある様だけれども裏は全くの重複である。

クルーソーはまだ可いのである。其他のひどい奴になると、只誰が斯うした、それから斯うし

た、とした事許り徒らに竝べてゐる。モール、フランダースといふ墮落女を書いたものがある。何れの墮落女も同じ様に此女も仕舞には泥棒になる。今私が説明に使はうとするのは、女が泥棒を遣るところである。――まづ第一番にはレズンホール街の藥屋の店で包みを盗む。"What the bundle was made up for, or on what occasion laid where I found it, I know not, but when I came to open it, I found there was a suit of childbed-linen in it, very good, and almost new, the lace very fine; there was a silver porringer of a pint, a small silver mug, and six spoons, with some other linen, a good smock, and three silk handkerchiefs, and in the mug a paper, 18s. 6d. in money." (此包のなかには何が這入つてゐるか、又どうして、そこにあつたものか、私には一向分らなかつた。然し開けて見ると其中には小供の寢床用リネン一揃、是は品もよし、又殆んど新らしい。極上等のレース、其外三合入りの銀の皿、銀の盃、匙六つ、それにリネン、女の肌着、絹ハンケチ三枚、盃のなかにある紙、錢が十八志六片あつた。) 大變綿密な書き方である。序でだから云ふが、此盗品を一つ残らず書き付ける所、ことに錢を十八志としないで、わざと六片を加へた所などは、全くデフォー流なのである。これはレスリー、スチーヴンが *Hours in a Library* 中に既に注意した事で、彼はこれと同様の例を『カーネル、ジャック』の中から擧げてゐる。私がすつと前にスチーヴンを讀んだ時

には、彼の例文が著るしいのかと思つてゐたが、決して左様ではない。無數に散點する中から拾ひ出した一つに過ぎないのである。この寫實的價値或は粧實的價値に就ては或は後に述べるかも知れないが、デフォーは此所迄書かないと氣が濟まない男なのである。

偕て泥棒の二番目には頸飾をとる。これは小供の頸に掛けて居たのを奪つて、其小供が泣き出したので殺して仕舞はうかと思つたとある。第三番には二個の指輪を盗む。第四番には酒店で銀の大盃を竊取する。第五番には金時計を盗む。段々名人に成つて誰も匹敵する者が無い様に成つた。第六番には火事場稼ぎを働らいて金時計と金鎖と婚禮の指輪と財布とを取つて来る。第七番には小間物屋へ行つてレースを偷む。第八番には税關役員の所で五十磅のレースを盗む。第九番には男装して倉庫の窓から忍び込んで四反の絹をとる。……何處迄行つても取つて許りゐる。盗む品物と場所は少し違ふかも知れないが、方法は大抵似たものである。極端に云へば同じ膳に向つて同じ箸で三度の飯を繰り返してゐると同様である。但し何遍繰り返しても人生の事實だから、事實通り度數迄も嘘でない様にかくんだと云へば夫迄である。然し此智識を得て喜ぶもの警察の役人ばかりだらう。

尤も十八世紀の讀者は今に比べると非常に呑氣なものであつた。其證據には、あの長たらしいリチャードソン (Richardson) の『クラリッサ、ハーロー』(Clarissa Harlowe) とか、『パメラ』(Pa-

me)とか云ふものを何の苦もなく通讀して済してゐた。今の世に『パメラ』や『クラリサ、ハロー』を手にする様な沈着き拂つた人は滅多になからう。ミューロック(Mulock)が『クラリサ』を讀んだ事を左も珍らしさうに吹聴して論文を書いてゐるのでも分る。或人が佛蘭西のテイン(Taine)を評した語に、彼は佛人でありながら、英國人よりも英文學に通じてゐる。英人の中には名前許りしか知られてゐないスペンサーの *Faerie Queene* を讀んだとある。 *Faerie Queene* は色々な點からして今代の人に讀まれないかも知れないが、其原因の一つとしては長いといふ事が與つて力あるだらう。私の考ではサツカレーの『ペンデニス』(Pendennis)や『ニューカムス』(The Newcomes)ですらも長過ぎはしまいかと思ふ。だから昔の人は我々よりも辛抱がよかつたのである。夫にしてもデフォーがモール、フランダースの泥棒を敘する様に、何處迄も押して行つたならば、如何に閑日月のある讀者でも降参せずにはゐられない。そこで流石のデフォーも少し工面を用ひてゐる。

此工夫は最前第三の統一を御話するとき、準變化もしくは質造變化として御紹介をしたもの、即ち例のピカレスク小説に出て來る場面の變化である。偶然の變化のうちの、所の變化である。主人公を引張つて方々勝手次第に歩き廻る變化である。デフォーは此工面を素晴しくやつた。篇々皆然りと云つて可い位である。

『倫敦疫病日誌』は題目が題目であるから倫敦以外に出る事は出來ないものとして、『世界新週航』(New Voyage round the World) 杯は其名前が既に其内容を示してゐるから仕方がないが、他の普通の小説に至つても矢鱈無性に舞臺を變ずる。未練なく變ずる點にかけては、恐らく古今獨歩と云つて可からう。『クルソー漂流記』第二篇の如きに至ると、スマトラへ行つたり暹羅へ行つたり、支那へ行つたりする。支那では南京へ行つたり、キンチャンへ寄つたりする。日本迄引合に出る。(序に云ふ。我國に關してはこんな事がある。或日本の商人が船でクルソーを日本へ届けて遣らうと云つた時の話であるが、"Well, still I was for taking him at that proposal, and going myself; but my partner, wiser than myself, persuaded me from it, representing the dangers, as well of the seas, as of the Japanese, who are a false, cruel, and treacherous people.") (それでも私は此商人の申出を信用して行く所であつたが、相手は中利口なので、海上の危険やら、日本人の不正直で、殘酷で、信賴しがたい恐れがある事を説き聞かして、私を思ひとまらした) 杯と書いてある。日本人は余程評判が悪い。

又『キアピテン、シングルトン』を例に取つて見ると、始めはジプシーに誘拐されて、ニューファウンドランド(Newfoundland)へ行く。それから又船に乗つてぐる／＼廻つて終に亞弗利加へ着く。黒奴と戦争をする。それから亞弗利加の内地を旅行する。豹を殺したり、野蠻人と戦つ

たり、沙漠へ出たり、沙金を掘つたりして英國へ歸る。歸るかと思ふと又カヂヅへ航海する。海賊になる。喜望峯の近傍をうろついて歩く。夫から錫蘭へ行つてベンガルへ移る。終に臺灣に向ふ。さうして日本船三艘を奪掠する。それから方々を流浪して大變な金持に成つて英國へ歸る。丸で夢と同然である。

参考ではない、御慰みの爲にもう少し挙げる。『カーネル、ジャツク。』是は主人公の名で、倫敦で大分永く働いた末、思はしい事もなく、其所を去つて、ケムブリツヂヤ、グラングラムヤ、ニューアークをうろつき廻つて、遂にエヂンバラへ行く。夫から終に誘拐されてグーヂニヤ迄出掛る。其所で栽培者に賣られて、果樹の番人と成る。それから金が出来たので自から栽培事業に手を出して、途中で本國の英吉利へ歸らうとすると佛蘭西の巡邏船に出會つて終にポルドーへ上陸する。それから戀をする。兵隊になる。伊太利で戦争して獨乙の士官に降参する。次に英國に歸る。カンターベリーに住居を定める。然うかと思ふと又グーヂニヤへ歸る。さうしてニュー、イングランドに行く。一番最後に又倫敦にあらはれる。是も變化に富んだ所が全く夢である。

組織から云へばデフォアの作物はざつとこんなものである。いくら變化があつても、とても讀み切れないのが當然である。其上に事件の書き方が甚だ無神経である。此點はスチフトとよく似てゐる。こゝに暴風雨の記述がある。

"All this while the storm increased, and the sea, which I had never been upon before, went very high, though nothing like what I have seen many times since; no, nor what I saw a few days after; but it was enough to affect me then, who was but a young sailor, and had never known anything of the matter. I expected every wave would have swallowed us up, and that every time the ship fell down, as I thought, in the trough or hollow of the sea, we should never rise more; and in this agony of mind I made many vows and resolutions, that if it would please God here to spare my life this voyage, if ever I got once my foot on dry land again, I would go directly home to my father, and never set it into a ship again while I lived."

(此間暴風雨は益強くなつた。其後いくたびも遭遇したものに比べては、否其二三日あとで遭遇したものに比べては、何でもないが、何しろこれ迄海の上へ乗出した事のない私には波が大變高かつた。だから是しきの波でも、水夫になりたてゞ斯う云ふ事には一切無經驗の私には應へた。私は浪が寄せる度に今度は吞まれて仕舞ふだらうと思ふ。船が浪の底に落ちる度にもう上がれまいと考へる。此心配の間にも、もし此度の航海に神の恵みで萬一命が助かつたら、再び乾いた土の上を踏むことが出来たら、すぐ様父の許へ歸つて、命のある限りは決して足を

船の中へ入れまいと、幾度も決心し、幾度も誓言した。

これは暴風雨の記述であるが、暴風雨の記述とは受け取りにくい憫れなものである。物凄くも何ともない。たゞ暴風雨が起つたさうだとデフォーから承はる許りで、其光景は讀者が勝手に頭の中で供給しなければならぬ。尤も事實文は理解されるから夫で差支ないぢやないかと云はれるかも知れない。成程飾りも厭味もなくつて、航海日誌の様で結構である。然し此事件がもし主人公の上に影響して必然なる性格の活動(即ち次の事件)を引き起すとすると、しかも其新事件が暴風雨の物凄さから出るとすると、是丈ぢや役に立たなくなる。暴風雨の物凄さが讀者に見える様な手續をとつて置かなければ、主人公の性格の活動は必然でなくなる。恰も偶然と同一價値になる。クルソーは此經驗から神に誓つて、云々とあるから此決心誓言(一種の事件)を出すに適當な程に暴風雨を物凄く寫し出して置く事が、作者としてデフォーの義務になる。是を義務と思はなければ、自分で自分の小説を打ち壊してゐる様なものである。尤も是は短かい事件の連続である。さしてデフォーを咎めるのは酷である。然しデフォーは徹頭徹尾此流儀で書いてゐる。

"The weather in the end considerably worsened; the wind sang in the shrouds, the sea swelled higher, and the ship began to labour and cry out among the billows."
(仕舞に空模様が非常に悪くなつた。風が帆に鳴つた。海は高く膨れ上がった。船は大浪

の中にあがき始めた。さうして大きな聲を立てた。)

譯は駄目だが是文でもデフォーよりは幾倍か活躍してゐる。是はステーションの句である。下に掲ぐる敘述に至つてはデフォーの様な土を捏ね廻して作つた靈火のない文章とは雲泥の差がある。カトリオナが親船から短艇へ乗移らうとする所である。

"From the boat the business appeared yet more precarious than from the ship, she stood so high over us, swung down so swift, and menaced us so perpetually with her plunging and passaging upon the anchor cable. I began to think I had made a fool's bargain, that it was merely impossible Catriona should be got on board to me, and that I stood to be set ashore at Helvoet all by myself and with on hope of any reward but the pleasure of embracing James More, if I should want to. But this was to reckon without the lass's courage. She had seen me leap with very little appearance (however much reality) of hesitation; to be sure, she was not to be beat by her discarded friend. Up she stood on the bulwarks and held by a stay, the wind blowing in her petticoats, which made the enterprise more dangerous, and gave us rather more of a view of her stockings than would be thought genteel in cities. There was no

minute lost, and scarce time given for any to interfere if they had wished the same. I stood up on the other side and spread my arms; the ship swung down on us, the patron humoured his boat nearer in than was perhaps wholly safe, and Catriona leaped into the air. I was so happy as to catch her, and the fishers readily supporting us, escaped a fall. She held to me a moment very tight, breathing quick and deep; thence (she still clinging to me with both hands) we were passed aft to our places by the steersman; and Captain Sang and all the crew and passengers cheering and crying farewell, the boat was put about for shore."

(短艇へ下りて見ると、親船で考へたよりも、事が餘程六づかしい。船は見上げる程頭の上にある。あるかと思ふと急に揺り落ちて来る。錨纜で留められながら、横に傾いたり、どつと沈んだり、危ない事夥しい。自分は詰らぬ事をしたと考へ出した。カトリオナはとても下りられやしない。自分一人でヘルズエトの岸へ上げられる許りである。報酬と云つたらゼームス、モアに逢へる位のものである。然しこれは女の勇氣を勘定に入れない考であつた。女は自分が何の躊躇もなく(内實は兎に角)飛び下りる様子を見てゐたのである。無論たつた一人で飛び下りた男に負ける了見はなかつた。女は船側に立ち上がつて、桅綱に捕まつた。風が裳裾に吹き込

んだので、下りるのが益危い。都では憚かる程に靴下が見えた。一分の猶豫もなかつた。止め様としても止める事が出来ぬ位である。自分は此方の側に立つて両手を擴げた。折から船は揺り落ちて来る。船頭は劍呑な所迄我とわが短艇をおびき寄せる。カトリオナは其時空に飛んだ。自分は幸に下から女を受けた。傍にゐた漁夫が支へて呉れたので漸く踏み答へた。女は荒い息遣をして、しつかり自分に嚙り付いた。そこから(両手で嚙り付いた女諸共)艫の方へ移された。親船の方では、船長も水夫も乗合も一齊に左様なら御機嫌ようと云ふ。短艇は岸の方に向き直つた。)

此敘述は活きてゐる。鋭い神経が働いてゐる。デフォーとは丸で違ふ。尤もデフォーはこんな精彩のある所を書かないのだと云へば議論にはならない。然し凡そ小説中にはあらはれる事件、ことに偶然の事件を敘述するときに、之を解釋する方法が二つある。一は其敘述を作家自身の敘述と見做す。其時には此敘述によつて作家の態度があらはれる。作家が如何に多方面に、如何に精細に、如何に驚擾みに自然を観察してゐるかが知れる。だから作家の性格が廣くて深ければ、敘述も變化があつて痛切である。或るときは讀者に美の享樂を興へ、或るときは喜怒哀樂の刺激を興へる。たゞ固定した一態度を以て物を見る人の話をきくよりも遙かに面白い。もし又其敘述を以て篇中主人公の觀察した自然とすれば、觀察者が作家から主人公に移つた丈で、あとの議論

は同じである。デフォーの主人公は電鐵の軌道の如く一定不變の單調な態度を以て世相に對してゐると云はなければならぬ。デフォーは吾人をして如何なる事が起つたかを知らしめる手際を持つてゐる。然し是れ以外の態度はどうしても取る事の出来ない男である。吾人をして如何なる事が起つたかを見せしめたり、又これを感じしめたりする様には決して出来ない。實着かも知れない。然し無神經である。下に擧げるのは『騎兵の記録』中から引用した戦争の敘述である。センセーションを刺激する點に於ては、今のスチーヴンソンの海の光景よりも甚しくなければならぬ筈である。然るに此通りである。

"The first party I light on was not above 16 men, who had made a small barricado across the road, and stood resolutely upon their guard. I commanded the dragoons to alight, and open the barricado, which while they resolutely performed, the 16 men gave them two volleys of their muskets, and through the enclosures made their retreat to a turnpike about a quarter of a mile farther. We passed their first traverse, and coming up to the turnpike, I found it defended by 200 musketeers. I prepared to attack them, sending word to the king how strong the enemy was, and desired some foot to be sent me. My dragoons fell on, and though the enemy made a very hot fire, had beat them from this post before 200 foot which the king had sent me had come up."

(余が最初出會つた敵兵は十六人より多くはなかつたが、往來に小さい柵塞を設けて、怠りなく警戒を加へてゐる。余は龍騎兵に命じて、馬から下りて柵塞を開かせた。彼等が勇敢に其命令を遂行して居る間、十六の敵兵は二回小銃の一齊射撃を彼等に浴せたが、終に柵内を通過して四分の一哩許り彼方の大木戸の邊へ退却した。余等は第一の柵を乗取つて次第に大木戸まで攻め寄せたが、此處には二百の銃卒が堅めて居る。余は彼等を攻撃する準備をすると共に、一方王に使を派して、敵が優勢であるから歩兵の増援隊を遣はされたと願つた。我龍騎兵は突撃した、敵も猛烈なる銃火を以て抵抗したが、王の送つた二百の増援隊が到着する前に、この地點から彼等を追ひ拂つた。)

どこ迄行つても此調子である。此調子は簡潔明瞭である。用向はよく辨ずる。誰も迷ひつこない文章である。然し一方から云へばスチーヴンソンも亦簡潔明瞭である。用向はデフォーに劣らざる位善く辨じてゐる。二人の優劣は用向を辨ずる辨じないの點ではない。銅貨と金貨との差である。もし御解りにならなければ、詳しく説明して御覽に入れる。

前に擧げたスチーヴンソンの敘述の中に「カトリオナは空に飛んだ」(Catriona leapt into the

此と云ふ句がある。これは若い女が本船から短艇へ飛び乗る時の形容であるが、其中には文字にあらはれた以上の或物を含んでゐる。「空に飛ぶ」と云へば女の足が本船を離れたことを示してゐる。同時にまだ短艇へ着いてゐないと云ふ事を示してゐる。さうして、本船も短艇も波に揺られて上下に漂ふてゐるのだから、もし飛び損へば海へ落ちなければならぬ。海へ落ちるか、無事に短艇へ落ちるか、そこに危険があつて、其所に受取る人の心配も、讀む人の心配もある。此心配を切實にする爲にはカトリオナが本船と短艇との間に居なければならぬ。然し單に其状態を示す丈では緩慢で調子が取れないから、飛ぶと云ふ鋭い行動を附加して「空に飛んだ」と云つたのである。だから安全に下りた結果をあらはした句でもなければ、又遣り損なつて海に落ちた結果をあらはした句でもない。どんな風に飛んだかと云ふ、形容の文字である。事件の結果から云へば蛇足の句である。

こゝに注意するかしないでスチーヴンソンとデフォアの観察の態度が分れるのである。どんな風に飛び下りたかはデフォアの注意に價せざる観察である。彼は事實を好むけれども、事實の途中は構はない。飛び果せたか、飛び損なつたか結果さへ知れば満足する男である。自分が神経が鈍いから、自分が心配にならないから、如何に安全に飛ばうと、如何に危うく飛ばうと、それは氣に掛らない。彼が氣に掛らないから、篇中の主人公も氣に掛けてゐない。下から受取つた時、

嬉しがつても、よろこんでも、必然なる性格の活動と見做すべき程度が減じて来る。けれどもそれがデフォアの人格だから仕方がない。

同じくスチーヴンソンの文中に女が息をはずませながら噛り付いたとある。(She held to me a moment very tight, breathing quick and deep.) 實用的に云へば噛り付いたときへ書けば足りる。だから用向の報告には「息をはずませながら」と云ふ様な言語は使はないでも濟む。女の心はどうあらうとも、自分に縫り付いたといふ事實さへ判然すれば法廷の審問は了るべきである。尤も特別の場合にはさうでないかも知れないが、何しろデフォアなら屹度氣が付かない。氣が付いても書く價値がないとして書かない事受合である。けれども吾々普通の人間から見れば此の息をはずませて噛り付くといふ所に人間が存在してゐる様に思はれる。これでこそ人間が器械らしく見えない。文章に油が乗つて、感情があらはれてくる。デフォアには此感情がないのである。

彼の作物の乾燥無味なのは是が爲めである。彼ばかりではない、十八世紀の作家の書いたものが冷淡に見えるのは多く是が爲めである。デフォアは人間を時計の機關の如く心得て、此機關の運轉を全く無神経なる、且つ獸的に無感覺なる筆を以て無遠慮に寫して行く。索然として蠟を噛む様な氣持のするのは勿論である。彼の目的は乾干びた事實である。其他には何の用事もない。普

普通の作家が四邊の光景を眼前に浮べる爲めに苦心したり、或は感情を添へて人物を活動せしむる爲に勞力を費したりするうちに、彼は何の苦もなく長篇を片付けて仕舞ふ。従つて普通の人が、普通の頭で、普通の會話をやる時と同じ具合に戰爭談もやれば難船談もやる。デフォールと普通の人の差は筆で書くのと口でしゃべるとの違である。其上に彼は用事を處辨する氣で小説をかいてゐる。

“The mountain wooded to the peak, the lawns
And winding glades high up like ways to Heaven,
The slender coco's drooping crown of plumes,
The lightning flash of insect and of bird,
The lustre of the long convolvuluses
That coil'd around the stately stems, and ran
Ev'n to the limit of the land, the glows
And glories of the broad belt of the world,
All these he saw; but what he fain had seen
He could not see, the kindly human face,

Nor ever hear a kindly voice, but heard
The myriad shriek of wheeling ocean-fowl,
The league-long roller thundering on the reef,
The moving whisper of huge trees that branch'd
And blossom'd in the zenith, or the sweep
Of some precipitous rivulet to the wave,
As down the shore he ranged, or all day long
Sat often in the seaward-gazing gorge,
A shipwreck'd sailor, waiting for a sail:
No sail from day to day, but every day
The sunrise broken into scarlet shafts
Among the palms and ferns and precipices;
The blaze upon the waters to the east;
The blaze upon his island overhead;
The blaze upon the waters to the west;

Then the great stars that globed themselves in Heaven,
The hollow-bellowing ocean, and again
The scarlet shafts of sunrise—but no sail.”

イノック、アーデンが孤島に打上げられた時の有様を、テニソンは斯う書いてゐる。茲に人間がある。活きた人間がある。感覺のある情緒のある人間がある。是から見るとロビンソン、クルーソーの如きは山羊を食ふ事や、椅子を作る事許り考へてゐる。全くの實用的器械である。此クルーソーを作つたデフォーも矢張り實用的器械である。彼の作物には、どれを見てもクルーソーの様な男許り出て来る。さうして是が英吉利國民一般の性質である。彼等は頑強である。神經遲鈍である。又實際的である。彼等の仕事は皆クルーソー流に成功してゐる。南亞を開拓した手際は正にクルーソーである。香港をあれ丈に蒼くしたのは正にクルーソーである。彼等はクルーソーを以て生れ、クルーソーを以て死する國民である。

以上の缺點はあるかも知れないが、其代りデフォーは寫實家の泰斗だらうと云ふものがある。然し寫實の意味を確めないと容易に然うだと云ふ事は出来ない。(現に今迄の説明で眞の寫實でない事は明らかである。)前にも一寸述べたがレスリー、スチーヴンは彼が寫實的であると云ふ證據に、カーネル、ジャックの儉んだ品物の目錄を引用してゐる。其目錄には何の特色もない。

たゞ精密な丈である。實際警察へ行つて調べてもしなければ、書けさうに無い程残りなく擧げてゐる。例へば箇條書きにして一つ何、一つ何と順々に並べるうちに、一つ又小刀一挺杯とわざと小刀を二ヶ所杯に出してゐる。つまり實際でなければまさか、こんな瑣末な事を繰返すこともあるまいと思はせるから寫實的だと云ふのである。成程さう云へばさうかも知れないが、私の考では少し寸法を間違へた寫實だと思ふ。たとへば、小説は技巧であると、自他共に假定した上で、わざと此技巧を破る様な事を書き連ねて、自分の書いた者は技巧を破つてゐる、即ち寫實的な證據だと威張ると同じ事である。もう一つ例へて云ふと、教員は品行方正だと自他共に信じてゐる所へ、ある教員が放蕩をした事を新聞へ出して、さて外の人が放蕩したと書くなら怪しいが、方正であるべき教師が放蕩をしたといふのだから、まさか作り事では無からう、屹度慥かな證據があるからして、あんな突飛な事を出したんだらうと、斯う思はせる所が、其教師を寫實的に活動させた所以だと主張する様なものである。成程是が爲めに教員某は活動すると許しても、活動するや否や、教員たるの資格はなくなつて仕舞ふ。即ち教員としての活動ぢやない、たゞの人間としての活動になるから、つまり教員を寫實的に描たものではなくなる譯になる。書かないで済む事、書いて邪魔になる事、餘計な事、重複する事を、遠慮なしに書いて、是が寫實だと云ふならば、其寫實とは外に何の意味も有してゐない、たゞ小説になつてゐないと云ふ事になる。小説に

ならない所が寫實だらうと威張るならば、もともと小説を一頁でも書くのが間違つてゐる。小説とは云はないで、日記とも覺帳とも報告書とでも名づけるが可い。實際天下に報告書より寫實なものはないのである。

寫生文家がよく要らぬ事を並べる所がデフォーに似てゐる。けれども要らぬ事を並べたがる動機は大分違つてゐるやうである。寫生文家は無頓着でならべららしい。えゝ構はない、それも書け、これも書けといふ風に遣ららしい。ところがデフォーのはさうでない、萬事實用から割出して、損得を標準にしてゐる様に見える。(固より比喩の語である。)塵一本でも書き落しては勿體ないと云ふ下司張つた根性から出る。先刻話した様に大事な方面はいくらでも眼を眠つて、つまらぬ事を寄せ集める癖があるから、綿密で、周到で、探偵的であるけれども、如何にも下卑てゐる。——デフォーの寫實の意味は、寫實といふ字を使はないで、既に組織の條に論じた事であるが、彼は寫實家として名を博してゐるから、其點に關して、一言私の考文を御参考に供して置く。尤も彼の書いた書き振を除いて取材の方面を論ずると極めて浪漫的なものが多い。浪漫的と云つたつて固より下等な意味である。鰐を殺したり、海賊になつたり、野蠻人と喧嘩をしたり頗る亂暴なものである。さうして、其殺したり、なつたり、したりする人間が少しも浪漫的でない、普通の人間でもない、全くデフォーの様な實用的器械であることも慥かな事實である。

私は正直に白狀するがデフォーの全集を読み通して居ない。以上の講義は私の知る限りに就て、私の考を纏めたものである。だからデフォーに對しては甚だ濟まん氣がする。けれども私が無責任な心持はしない。私が讀んだうちで唯一ヶ所一寸面白いと思つた所がある。それはカーネル、ジャツクが小供の時金を偷んで、色々持ち扱つて木の洞へ隠す所である。是とても讀んで御覽なさいと御勧めする程でもないと思ふが、あまり悪口を云つたから最後に此一節を御紹介してデフォーの批評を終るのである。

解

說

『文學評論』解説

『文學評論』はもと『十八世紀英文學』といふ名前で、明治三十八年九月から明治四十年三月まで、一ヶ年半に亘つて、一週三時間づつ、大學で講義されたものである。もつとも漱石は、この第一編の「序言」を、既に前學年の末、明治三十八年の六月のうちに、講じてゐる。その事はこの「序言」の中に、「然し此六月に學年が了へると此九月から急に新らしい講義をしなければならん。」だの、「夫れも五年十年と云ふ日子があれば比較的自己に満足を與へ得る様な方法で取扱つて見る事も出来るかも知れんが、兎に角夏休が済んで直ぐ始めると云ふ早急な場合に碌な事が書ける者ではない。」だのといふ言葉があるのである。思ふに明治三十八年六月の學年末に、自分の『文學論』の講義が思つたよりも早く済み、然も次の講義に移るのにはまだ準備が十分整つてゐないし、殊に學年末から新しい講義を始めるのも、新入生にとつて都合の悪い事だらうといふので、繋ぎとして、漱石はこの「序言」で、残りの時間を埋めたものに違ひない。従つて嚴

説解

密に言へば『文學評論』は、明治三十八年の六月から始められてゐるのである。漱石がその前から、ひまひまに、新しい講義の準備をしてゐたに違ひない事は、漱石が明治三十八年三月十一日に明治大學で、『倫敦のアミューズメント』といふ講演（全集別冊）をしてゐる事から、推測する事が出来る。是は、『文學評論』の第二編「十八世紀の状況一般」の中の第七「娛樂」の中の、熊いぢめ・牛いぢめ・鬪技・鶏合の光景を、まざまざと眼に見るやうに、浮彫りにして見せた講演である。

漱石の序によると、漱石は「此式で十八世紀の末浪漫的反動の起る所迄行く積り」だつたのだといふ。スキフトを論じる條下で漱石は、スキフトとスターンとは何所か似た所を持つて居る、それを比較して論じる事は「作物の系統上多少の参考になる」事ではあるが、然しそれは「寧ろスターンを評する時機が来る迄待つて置」く方が可いと思ふから、此所では觸れない事にするとも、言つてゐる。十八世紀の末までは兎も角、少くともスターンの批評に關する腹案は、既に當時漱石の頭の中で、相當具體的に出來上がつてゐたのではなかつたかと思はれる。然し、明治四十年三月、朝日新聞入社とともに、漱石は大學をやめる事になつたので、そのスターンに關する漱石の意見さへ、我我は聽く事が出來なくなつてしまつたのである。もつとも漱石は、明治三十年三月の『江湖文學』で、スターンの『トリストラム、シャンデー』を論じ、スターンに對する

自分の意見の一端を述べてゐる。また明治二十六年の三月から六月へかけての『哲學雜誌』で發表された漱石の『英國詩人の天地山川に對する觀念』は、クーパーやウォーグワースをも取り扱つてゐるが、そのクーパーやウォーグワースこそ、それまでの典型主義に對して、「十八世紀の末浪漫的反動」の火蓋を切つたと言はれてゐる人人である。同時に漱石が、明治三十二年四月の『ホトトギス』に寄せた『英國の文人と新聞雜誌』は、簡單ではあるが、新聞・雜誌との關係の方面から、十八世紀から十九世紀へかけての、英國の文人を取り扱つたものであつた。その意味で漱石は十八世紀の英文學に就いて、大體觸れべきものには觸れてゐると見る事も出來なくはないのであるが、それにしても漱石が「此式で」十八世紀の末「浪漫的反動の起る所迄」の英國文學者の代表的な人人を品評する事が出來なかつたといふ事は、單に英國文學の研究者のみならず、一般文學の研究者にとつて、遺憾極まる事であると言つて可かつた。

漱石は「序言」の中で、自分の十八世紀英文學を取り扱ふ態度が、決して理想的な態度でない事を、はつきり斷つた。自分のやうな日本人で、然も十八世紀英文學を専門に研究したと言ふほどの勉強も積んでゐない者が、五年・十年、せめて二三年の準備をするのならまだしも、夏休みを間に一つ置くだけで、すぐ講義を始めようといふのだから、この講義が不完全極まるものである事は、初めから分り切つてゐる。是は自分にとつて甚だ不愉快な事である。然しそれも事情已

むを得ないと、漱石は言つてゐる。勿論漱石は、假令そればかりを専門にはやらなかつたまでも、是までの内に、随分みつちり十八世紀の英文學を研究してゐるのである。明日から講義をしると言はれても、恐らく人並の講義をするには困らない下地は出來てゐるし、準備でも相當の準備は出來てゐた筈である。然し漱石の理想は大きかつた。その理想の大いさに比べれば、自分の現在しようとしてゐる事は、自分の一度讀んだものを讀み直ほすのが精一杯くらゐの、その日暮しの仕事に過ぎない。是は漱石にとつて、自分を「大に不愉快」にする以外の、何ものでもあり得ない。——漱石が十八世紀英文學の理想的な取り扱ひ方として考へてゐたものの形が、果してどういふものであつたかは、竟に今日からは知る由もない。然し漱石が『文學論』第五編「集合的F」に於いて、殊にその第五章「原則の應用」の三、第六章「原則の應用」の四などに於いて概論してゐる所のものから想像すると、漱石は或は、出來れば、もつとこの仕事に集中して、作家の時代や作家の生活を更に精到に研究し、時代や生活が作家の作品に作用し、作家の作品が時代や生活に作用し、作品を特殊な色合に染め出すとともに、時代や生活を特殊な色合に染め出して行く所、一口に言へば時代と生活と作品との交互作用が、世界と作家と作品とをどう動かして行くかといふ事を、精到に具體的に把握する事によつて、人間精神の變化と發展との跡を探り、その精神史に於ける文學者の役割がどういふ所にあるかを、明らかにして見たかつたのではなかつたか

とも思はれる。然し漱石には、それが出來なかつた。漱石には、そんな事をしてゐる、餘裕がなかつた。餘裕があつても、それを漱石は、その方へ向ける事を欲しなかつた。『文學論』の場合と違つて、漱石が是から『文學評論』を講じ出さうとする時は、既に『猫』を第一・第二・第三・第四・第五と書き続け、別に『倫敦塔』を書き、『カーライル博物館』を書き、『幻影の盾』を書き、『琴のそら音』を書き、漱石の創作活動が澎湃として漲り出した、丁度その潮先に當つてゐたからである。

漱石は第一編の「序言」だけで前學年を閉ぢ、夏休のうちに次學年の爲の新しい講義を用意して置かうとした。然し漱石の氣持はなかなかその方へ動いて行かなかつた。明治三十八年八月十日中川芳太郎に宛てて漱石は、「皆川は歸省、傳四は大磯へ避暑寅彦も歸省。僕のうちへくる定連は大分減つたので少々日の長い様な氣がする。ところが來年の講義が氣にかゝつて義太夫の文句ぢやないが食ものんどへ通るまいと思ふ程でもないが實際大學がいやになつて仕舞つた。」と書いてゐる。それでも漱石はこの夏休は、一所懸命集中して講義の準備をしたと見えて、七月二十六日に『一夜』を脱稿して『中央公論』にやつた外は、なんにも書かなかつた。その上漱石は、八月三日以來、それまで毎日のやうにかいてゐた手紙を、八月十一日以後九月十一日までに、たつた二本しかかいてゐない。もつとも是は、漱石の所へそれだけ手紙が來なかつたせゐるもあつた

のかも知れないし、漱石がその間にかいた手紙で、散逸してしまつたものもあるのかも知れない。従つて是を一概に、漱石が講義に集中してゐた證據とする譯にも行かないには違ひないが、同年の九月十二日野村傳四に宛てて、「傳四先生。僕は今週休んで來週から開講と致す積りだから此旨を一寸聽講の諸君子に報知してくれ玉へ。むだ足をさせるのも氣の毒と思ふ。」と漱石が書いてゐるのは、講義のノートにまだ一往の段落がつかないから、それまで休講する氣になつた事を意味するものである事は、明白である。

元來漱石は、主として夏休に凡そ一年分の講義の腹案を作つてしまひ、教場ではそれをたよりに講義し、不斷の時間は、多く自分自身の爲の、讀書と思索とに費す習慣を持つてゐたやうである。然し漱石が創作に従事し出してから、漱石は、自分の講義の腹案を作るのみならず、それをすつかりノートに書き下ろし、教場ではただそれを讀む事にして、不斷の時間が連続して、自身自身の爲に自由に使へる用意をした。従つて『文學評論』の讀者は、漱石が大學で講じた講義と殆んど同じもの（勿論漱石は後に『文學評論』の文章を訂正もしたが）を讀んでゐると言つて可いのであるが、然しそれだけに漱石の勞力は多く、またそれだけに漱石が是に費さなければならなかつた時間も多かつた。恐らく漱石は、この年の八月から九月の初めへかけては、あらゆる精力と時間とを擧げて、この仕事に専念したものに相違ない。漱石は九月に入つてから『猫』第六

を書いてゐるが、然し是が脱稿したのは、九月二十六日の事であつた。九月十七日、高濱虚子宛の手紙の中には、「小生も今月末迄には猫のつゞきをかく積りに候」とある。然もその同じ手紙には、「毎日来客無意味に打過候。考へると己はこんな事をして死ぬ筈ではないと思ひ出し候。元來學校三軒懸持ちの、多數の來客接待の、自由に修學の、文學的述作の、と色々やるのはちと無理の至かと被考候。小生は生涯のうちに自分で満足の出来る作品が二三篇でも出来ればあとはどうでもよいと云ふ寡慾な男に候處。それをやるには牛肉も食はなければならず玉子も飲まなければならずと云ふ始末からして遂々心にもなき商買原に本性を忘れるといふ顛末に立ち至り候。何とも残念の至に候。（とは滑稽ですかね）とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さへ出来れば夫丈で天に對しても人に對しても義理は立つと存候。自己に對しては無論の事に候。」ともあるのである。

漱石の創作欲は段段旺盛を極めて行つた。『猫』第六に次いで『薙露行』が書かれる。『趣味の遺傳』が書かれる。『猫』第七・第八・第九・第十が書かれる。『坊ちゃん』が書かれる。かうして次ぎから次ぎへと作品が生れるにつれて、漱石は講義の準備の爲に時間をとられるのが、愈々苦痛になつて來たらしい。明治三十九年四月十一日、野間眞綱宛の手紙には、「小生も是から又多忙にとりかゝる。講義をかくのがいやでたまらない。」とあり、同じ日の夜の鈴木三重吉宛の手紙

には、「僕多忙でこまる。昨日から講義をかきかけたら半ページ出来た。講義を書くより千鳥をよむ方が面白い。」とある。それでも漱石は、夏休までの講義のノートは作り上げたと見えて、七月の半過までは、講義を書く事の不愉快に關する手紙は、少くとも『書簡集』には出てゐない。その間に漱石は、卒業論文を読み、口頭試験を施行し、高等學校の答案調べを済し、七月三日に至つて、やつとのうのうした氣持になつてゐる。それから七月十七日に『猫』第十一を脱稿してゐる。然もその翌日、七月十八日小宮豊隆宛の手紙の中には、「來月は講義をかゝなければならぬ。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考へると大學は辭職仕りたい。」とあり、越えて八月二十八日、同じ小宮豊隆宛の手紙には、「實は講義を一ページも書いてゐない。然し而して十月一日發行の中央公論にかく約束がある進退に窮する譯であつて見れば講義は容易には始まりさうにもない。まづ以て十五日以後二十「日」以内と見當をつけて御出京可然候。」とあり、八月三十一日高濱虚子宛の手紙にも、「もう九月になる講義は一頁もかいてない。中央公論は何をかいたものやら時間になさゝうだ。是で小供の病氣が原ねるければ僕は何も出来ない。中央公論には飛んだ不義理が出来るとある。『中央公論』の小説といふのは、言ふまでもなく、『二百十日』の事である。是は九月九日に書き上げられた。然も漱石はその前月、八月九日に『草枕』を書き上げてゐる。かうして講義を書く事の苦痛と作品を書く事の悦樂とが漱石の頭の中で入り亂れて、愈深刻に漱石

を苦しめるのである。——それでも漱石は、押し切つて、講義のノートを書いた。

然しかういふ中で書かれた講義のノートが、それほど長い講義に堪へる分量に達する筈がない。既に學期半過の十一月三十日に、漱石は片上伸に宛てて、「是から大學の講義が切れたから今年分を少々かき夫からホト、ギスの約束を果すうちに今年分文章事業は出来なくなる事と存じます。ホト、ギスの方も漸の事で十二月二十日「迄」待つて貰ひました。夫から學校の試験をして文學論の校正をして大晦日迄働く積りであります。」と書いてゐる。

このやうな心持の下に、このやうに急がしい思ひをして、とぎれとぎれに準備された漱石の講義が、漱石に満足の出来る講義であり得なかつた事は、言ふまでもない事である。漱石が手紙の中で、講義の事に觸れる度に、口癖のやうに、或は講義を書くのは死ぬより厭だと言ひ、或は大學を辭職したいと言つてゐるのは、勿論その束縛の爲に、自分の好きな時に好きな事をする事が出来ない窮屈から發してゐるのには違ひないが、同時にその事は漱石の、自分が自分の義務を十分に遂行してゐない、心の疚しさから來てゐる事も、亦疑ひを容れない。——然し、漱石が自分の仕事の結果に満足してゐるゐないに拘はらず、漱石のこの『文學評論』が、漱石でなければ、外の誰にも眞似をする事の出来ない、ユニークな講義であつたといふ事は、公平に考へて、誰でも認めざるを得ない事實であると思ふ。

「序言」を見ても分かるやうに、漱石は此所で、自分の、日本人としての立場を、夏目漱石としての立場を、厳守した。然もその日本人としての夏目漱石が、傲慢に膨れもせず、卑屈にいじけもせず、男らしい白紙の状態で、直接に作品と接觸し、其所から得られた印象を精到に解剖した上で、それらのものに價值的等級を附けて見せたものが、この『文學評論』である。漱石はロンドンに於て『文學論』を考へ続ける事によつて、日本人には日本人としての獨特な立場があり、その立場に忠實である事は、英國人が英國人としての立場に忠實であり、獨逸人が獨逸人としての立場に忠實であると同じく正當な事であるといふ事、然も人は、あらゆる點に於いて、自己に忠實であるといふ事によつてのみ、その國の文化、ひいては世界の文化の進展に積極的に参加する事を可能にされるものであるといふ事を、はつきり認識する事が出來た。同時に漱石は『文學論』を考へ続ける事によつて、文學に於いて、何が美しく何が醜く、何が尊重すべきで何が指彈すべきであるかを、はつきり認識する事が出來た。それを『文學論』に於けるよりは、更に具體的に示さうとしたのが、『文學評論』である。『文學評論』は、言はば、漱石の『文學論』の臨床講義であつた。『文學論』では抽象して説かれた事が、此所では、生きて動いてゐるものの中から、撮み上げて來て論じられる。

勿論ある見方からすれば、漱石のこの『文學評論』は、十八世紀の英文學史としては、望むべ

き多くのものを持つてゐるとも、言ふ事が出来るだらうと思ふ。例へば十八世紀文學史家として有名な、獨逸のヘルマン・ヘットネルは、その劃期的な名著の第一巻として、十八世紀の英文學を取り扱つてゐるが、ヘットネルのやうに、十八世紀をニュートンの科學土の大發見を以つて始まる、全歐羅巴的な文化史的な一時代と見て、その時代の特徴を織り上げる著しい彩絲の一つとして、英吉利・佛蘭西・獨逸の文學を大きな關聯の下に眺めるといふ方法も、確かに一つの良い方法であつたには違ひない。漱石は第二編の「十八世紀の狀況一般」で、實に要領よく壓搾して、また實にプラスチックに生ると、十八世紀の英國の哲學・政治・藝術・珈琲店・酒肆・俱樂部・倫敦・倫敦の住民・娛樂・文學者の地位・倫敦以外の地方の狀況などを敘述して、上乘の歴史小説かなぞのやうに、人を十八世紀の英國に連れ込み、それと當時の文學とを反襯させつつ評論の歩を進めて行きはしたが、然し漱石は、時代と作品との交互作用をある程度で打ち切つて、深入りせず、主として作品そのものの中に深入りして、そこから波みとられ得る、あらゆるものを汲みとらうとした。従つて此所では時代は描かれてはゐても、それは言はば、寫樂のかいた役者の似顔繪が、雲母の背景の上に浮き上がつて見えるやうに、文學を浮き上がらせる爲だけの、時代の描寫にしかなつてゐない傾向があるのである。

是は漱石が、自分の創作に急がしく、假令さういふ事をやりたいと思つてゐたとしても、それ

を丹念に研究する暇が、漱石になかつたからであつたに違ひないと思はれる。その上漱石は、時代と文學とを交渉させて、その交互作用によつて時の文化が、一つの流れとして動いて行くといふ見方が、精到に科學的な精神で裏打されてゐない限り、ともすると放恣になり獨斷的になり不自然になり無理押しつけになつて、單なる主觀的な宣言になり勝な點を、好まなかつた。のみならず漱石は、作家の生活や、作家の生活環境からのみ、作家の作品の特徴の一切を説明し悉さうとする考へ方にも、あまり好意を持つてゐなかつた。作家の出現が一回的であると同じやうに、作家の作品も一回的のものである。作家の生活、生活環境のみならず、作家自身の中の、心理的にさまざまな微妙な複雑なものが寄り集つて、一人の作家の一つの作品を形成する。一つの作品の秘密は、その作品そのものの中にあつて、その作品の周囲にあるのではない。同様に、一人の作家の秘密は、その作家その人の中にあつて、その周囲にあるのではない。作家の生活・生活環境だけをいくら精細に研究しても、その作家の作品の秘密は、それだけでは決して明らか得られないものではないといふのが、漱石の意見であつたらしい。勿論是が末流・模倣の作家に當て符するものでない事は、言ふまでもない。末流・模倣の作家など、自分の中にも作品の中にも秘密なぞ持つてゐる筈がないのである。然し例へば漱石が、スフィートの作品をスフィートの時代やスフィートの生活と對照させながら、かういふ時代が必しもスフィートのやうな人間を生むとは考へられない

し、かういふスフィートの生活が亦必しもスフィートのやうな作品を生むとは考へられないといふ事を、特に強調してゐる事に照し合せて見ても、漱石が作家と作品とに關して、漱石獨特の考へ方をしてゐたといふ事は、十分想像され得るだらうと思ふ。

もつとも是は或は、漱石のこの時代に對する洞察や、もしくはスフィートの生活に對する認識が、不十分であつた事を意味するものかも知れない。然し漱石は、漱石の意見として、さういふ方面からのみ、一つの作品の秘密を闡明する事の可能を、十分認める事が出来ないものである。それを認める爲には、漱石は自分自身、あまりに藝術家でありすぎた。また、自分自身の簡性をあまりに尊重しすぎた。漱石から言へば、藝術作品は時代によつて、藝術家の生活によつて、ある程度規定されるには違ひないが、然しある程度を超えると、その藝術家は、自分の簡性に從つて、自分の藝術を、自由に展開し、自由に表現する事が出来るといふのである。

従つて漱石にとつて特に此所で問題となつたのは、作家の作品そのものであつた。勿論さうする方が、漱石にとつて、あまり時間をとられないですむ事であつたから、不得已漱石はさうしたのかも知れない。然し作品そのものに直接に觸れて、是ほど價値あるものを把握したものが、日本は無論の事、西洋の文學史家、もしくは文學批評家の中に、どれだけあり得るか考へて見る時、我我は、漱石があれだけの急がしい思ひを重ねてゐる中で、然もあれだけ講義を書くのが厭

だ厭だと言つてゐる中で、是ほど立破な仕事を残してくれた事を、寧ろ感謝すべきではなかつたかと思ふ。殊に、是がとぎれとぎれの時間に、とぎれとぎれ書かれたものであるにも拘はらず、(勿論漱石は後に全體に眼を通し、全體として筆を入れたとは言へ)、全體の構成の上から言つても、表現の密度の上から言つても、少しもムラがなく、初めから終りまで、一氣に書き下ろしてましたやうに、整然と纏つた感じを與へるのは、漱石の頭の使ひ分方が旨く、漱石の頭の集中させ方が巧みである事から來てゐるには相違ないが、まさに驚嘆に値ひすると言つて可い。その意味では、藝術的な作品である。然も此所で取り扱はれたアヂソンでもスチールでも、スキフトでもポーブでも、乃至はデフォーでも、實にはつきりと我我の眼の前に、藝術家としての、その本質的な姿を現はし、漱石の評価する如くに評價されるのが、極めて當然であるかのやうに、漱石の意のままに起居動作する。是は漱石が、自分の此所で取り扱つてゐる作家を、自分の傀儡にしてゐるといふ事を意味しない。傀儡にしてゐるとすれば、これらの作家は、漱石からすべてその灸所を攫まれてゐるが故に、寐かすも起すも、一切漱石の自由になるといふ事に過ぎない。漱石は、自分が無心に相手から受とつたものを、深切に検討し、その結果を我我の前に列べて見せるだけである。それは漱石にとつてツルになるが故に、我我も亦それをツルに、素直に受け容れる。これらの作家も亦、ツルに素直に彼等の本質的な姿を、我我の目の前に露呈する。

例へば、西洋の評家は、大抵誰でも、『ロビンソン・クルーソー』の描寫が寫實的に精到な事を賞揚して、驚嘆すべき技巧だと言つてゐる。然し漱石はデフォーの事を、汽車や電車のある世の中に、何所までも自分の二本脚であるで行かうとする、車夫のやうな作家だと言つてゐる。是は驚くべき宣言である。然しその理由を聽いて見れば、なるほどデフォーは車夫に違ひないのである。殊に漱石のやうに、漢詩文の簡潔で遒勁な表現と俳句の寡黙で幽玄な表現に親しみを持つてゐる作家から言へば、内面的な變化を持たず、加速度的に發展する事のない結構を、無神經にひた押しにのろろ書いて行くデフォーの書き方は、冗漫で蕪雜で退屈で、とても我慢が出來ないに違ひないのである。漱石はそれを、正直に、且つ大膽に、表白する。漱石はまたポーブの『サッフォーよりファオンに寄す』や『アベラドに送れるエロイザの消息』などを例にひいて、ポーブの中にも非常に情熱的な、ロマンティックなものが動いてゐた事に注意する。それにも拘はらず、ポーブが、その方面へは自分の才を伸ばさずに、反つて天下の潮流に棹して、別に自分の詩境を開拓してゐるのは、恐らくポーブが時勢から壓迫されたせゐであるに違ひないと言つてゐる。ポーブが人工的な詩人で、章句に磨きはかかつてゐても、冷たい教訓的な警句計り並べてゐたやうな事は一般に言はれてゐても、ポーブのこの點を指摘したものは、恐らく外にないに違ひない。殊にポーブ及びポーブの一派が古典の中に使はれた名前や文句などを難有さうに使つてゐ

る點で、後の人人から、自分の感情を無視して、ギリシヤ・ローマの作家の眞似だけをして暮す、その意味で人工の極を悉した人間のやうに言はれてゐるのに對して、漱石が是を、藝者が最良の役者の紋をつけて喜んでゐるのに比し、それが人眞似をして冠をつける猿のやうなものではない事を辯じてゐる點なども、人間心理の機微に觸れた適切な解釋で、ポープ並にポープ一派に對する、是ほど可い手向はないに違ひないと思はれる。然も是は單にポープ及びポープ一派に對する救ひの手であるのみならず、佛蘭西から獨逸へかけて、ある期間の間文壇を風靡した、ロココの詩風に對する救ひの手でもあつたのである。

基督教徒の國では、スウィフトの『桶物語』は、上乘の諷刺として通用してゐるやうである。然し漱石は此所でも決して、さういふ評判に雷同しない。漱石は飽くまで自分の立場に踏み止まつて、それが一般人間的なものを取り扱つてゐるのでない所以を、比喩的で主として人の知力にのみ訴へようとする傾向を持つてゐる所以を、事實に並行させようとする爲に無理な不自然な所が方方に出て來る所以を、一一例證し、自分は是をそれほど高く買ふ事は出來ないと、斷言する。然も漱石は、その爲め『桶物語』の「警句の豊富にして勁拔なる點に於て、容易に他人の追隨を許さない奇な作物である」事を見落さない。のみならず、漱石は、特に此所に著しく現はれてゐる、スウィフトの用語の卑猥である事に就いて、アヂソンが用語をなるべく綺麗に濟まさうとして

ゐるのに比較し、それには「何だか女性的な厭味がある。」が、スウィフトの方は野鄙は野鄙でも、「野鄙な事を忌憚なく平氣で傲然として敍べて居る所が男性的である。」とさへも言つてゐるのである。——例をあげてゐれば、きりがない。要約すれば、漱石が此所で言つてゐる事は、すべて漱石にとつてツルーな事であり、然もそれが私のない、明鏡のやうな漱石の心に映つたツルーな事である故に、漱石にユニークな意見となり、従つて亦、獨創に充ちた意見となつてゐるのである。漱石は「序言」の中でも、その他の所でも、自分はこの書の中で何の誇るべき獨創の見を持つてゐないと言つてゐるが、然しこの書は、歐羅巴の文學史家の前に出しても、決してひけをとる事のない、卓見と洞察と獨創とに富んだ文學史であつた。もし日本の文學研究書の中で、外國語に翻譯する價值あるものを求めるとすれば、さしづめこの『文學評論』など、最も適切なものの一つであるときへ思ふ。

然し『文學評論』は、後にいみじくも『文學評論』と改題されたやうに、十八世紀の英文學史であるといふよりも、より多く、十八世紀の英文學史に現はれた目ぼしい作品を對象とする、漱石の「文學評論」であつた。「序言」の中の文學批評の方法論的考察、趣味の普遍性と個別性との説、その普遍性から來る自然の暗合の辯、もしくはアヂソンの條下のキットとヒューモアとの論、アヂソンの世の中に對する不満足とスウィフトの世の中に對する不満足との比較、もしくはス

キフトの條下の滑稽と諷刺との區別、作家の傳記と作品との關係、『ガリヴァー旅行記』の解剖、もしくはポープの條下の自然論と超自然論、文學に於ける簡人的なるものの意義、もしくはデフォーの條下の結構論と描寫論、——漱石は「四家ともに各態度を易へて多少の變化を試みて見た。」と言つてゐるが、それぞれ條下でそれそれ問題にされた項目は、すべて『文學論』的な問題であり、然も漱石の『文學論』では、或は全然觸れられなかつたものか、觸れられてゐても、觸れられなかつたか、もしくは別方面からしか觸れられなかつたものが、此所で幾つもの例證を從へて、巨細に觸れ悉されるのである。その爲めこの『文學評論』は、材料は十八世紀の英文學ではあつても、内容は寧ろ十八世紀の英文學史である事から擺脫して、もつと一般的に、『文學論』的なものの中に踏み込んでゐるのである。漱石がその序の中で、「此講義の中に評論した作者は、皆當代の大家であるけれども、或は其一人／＼に費やした頁の數があまり多過ぎはせぬかとの難もあるだらうと思ふ。然し自分の主意は單に是等の諸家を論するのでなくて、是等の諸家を通じて、余の文學上の卑見を述べる積なのだから其邊は讀者に斷つて置きたい。」と言つてゐるのも、所詮漱石が此所で意圖したものを、はつきり言明してゐるに外ならない。

初め漱石に乞うて、『文學評論』のノートの淨書を引き受けた者は、瀧田樗陰であつた。さうしてその出版を引き受けた者は、金尾文淵堂であつた。然るに明治四十年五月二十九日瀧田樗陰宛

の手紙で、漱石が「御手紙拜見實は昨日金尾が來て十八世紀文學出版の禮を云ふて瀧田君が野上さんと一所にやりたいと云ひますがどうでせうといふから夫もよからうと云ふたら立派なものが出来ますかと聞いたから夫は受合へない。自分のものは自分がやるより外にうまく出来る筈がない。ことに二人や三人でやつては却つていけまいと云ふた。夫から可成は一人でやるがいゝだらうと附加した。すると金尾の云ふには瀧田君はとも一人では出来ませんまいと云ふた。僕答へて瀧田君は文章は達者だが専門原が法律家だからあの講義のうちのある所は面倒かも知れないと答へた。それでは外に人はありませんかときいたから、人はいくらでもあるが、瀧田君が持つて歸つたものだから、まあ瀧田君に相談して見たらよからう、瀧田が進んでやるのが面倒ならば森田にでも頼んだらやつてくれるだらうと云ふた。話は夫れぎり分れた。金尾はもう出版する積りで廣告杯の事迄云ふて歸つた。／僕は君が十八世紀文學を書き直すに就てどの位の興味を有して居るか知らぬ。又それを家計上のたすけにする必要あつての事とも知らぬ。夫故以上の如き返事をして置いた。君と金尾の間の面白くない事も全く知らなかつた。金尾は其事に就て一言も云はなかつた。／右の譯である以上はたとひ金尾から十八世紀を出すにしても君がやらなくては少し君として面白くない事になるだらう。金尾からもし君の所へ相談に來たら夏目さんと相談した上返事をすると云つて歸し玉へ。……」と言つてゐるやうに、瀧田と金尾とは仲違ひをしてゐたので、

問題が面倒になつた。それでも明治四十年七月二十日野間真綱宛の手紙には、「十八世紀文學の講義を金尾で出したいといふから承知した。森田、瀧田兩君が書き直してくれる筈。此年は無暗に書物ばかりこしらへる。」と書いてある。然し同じ年の七月二十六日鈴木三重吉宛の手紙の中には、「十八世紀文學は金尾をやめて春陽堂にした。」とある。是は恐らく瀧田と金尾との仲違ひの結果、雙方の話し合が圓滑に進行しなかつた爲だらうと思ふ。然も瀧田樗陰は、一人でやるのが心細かつたと見えて、既にこの時相棒に森田草平を頼んでゐる。

然し事實は、この淨書の仕事の大部分は、森田草平の手によつて行はれたと言つて可かつた。明治四十一年二月四日漱石が樗陰に宛てて、「拜復文學評論につき御申譯承知致候徹夜にては恐れ入候適當の所にて御まじめ願上候」と書いてゐる所をもつて見ると、樗陰もこの仕事が捗らない事を氣にして、徹夜までしたもののやうであるが、然し樗陰はもともと法科の出ではあるし、當時『中央公論』の編輯に屬して原稿取りに駈け廻り廻つてゐた際ではあるし、殊に今度は『文學論』とは違つて、一切の引用文を翻譯する方針が立てられてゐた爲に、この仕事は、樗陰には荷の勝ち過ぎた仕事となつて、漱石には大した手助けにはならなかつた。森田の翻譯した方は、直すのに割に手がかからなかつたが、どうも瀧田には困つた、と漱石が言つてゐた事を、私は今でも記憶してゐる。

この原稿の淨書がいつごろ出来上がったか、精確な所は分からない。然し漱石は、明治四十一年は、十月五日までは、『三四郎』を書く事に忙殺されてゐた筈である。假令原稿がそれ以前に出来上がつてゐたとしても、漱石は、十月六日以後でなければ、校閲の筆をとる事が出来なかつたに違ひない。然るに明治四十一年十一月二十三日鈴木三重吉宛の手紙には、「御手紙拜見仰の如く文學評論で大弱りの状態しかもくだらぬ努力故つくづくいやに成候此分にては當分成田行も駄目に候。」とあり、明治四十二年一月發行の『趣味』に掲載された談話筆記『文壇の趨勢』の中には、「向後日本の文壇はどう變化するかなどといふ大問題は、なか／＼分りにくい。況や二三日前途『文學評論』の訂正をしてゐて、頭が痺れた様に疲れてゐるから、早速に分別も浮びません。」とあり、『文學評論』の自序には、「去年の暮書肆の催促を受けて、漸く訂正に従事し出してから約一ヶ月の間は専心此講義にばかり掛つてゐた。」とあるのだから、恐らくこの仕事は、十一月の初め比から十二月の初め比へかけて、成し遂げられたものだらうと想像される。漱石が、創作活動に従事する事を以つて自分の天職と信じ、所謂「學理的閑文字」に時間を潰す事を、「くだらぬ努力」とし、「つくづくいやに成」つたと感じてゐた點では、『文學評論』の訂正も亦、『文學論』の場合と同じではあつたが、然し今度漱石が訂正に費した時間は、『文學論』の場合と違つて、遙かに少なかつた。是は一つは漱石の境遇が變つて、「専心此講義にばかり掛つてゐる事が出来た

爲でもあつたが、然し他の大きな理由は、漱石のこの講義のノートが、ただ原稿紙に淨書しさをすれば可いほど、ちゃんとした漱石の文章に書かれてゐた爲である。それでも漱石は、「全部の訂正を終つた上」で「約半分程は書き直した」と言つてゐる。「くだらぬ努力」で「つくづくいやに成」つたと言ひながら、ともかく一往は自分の得心の行くまで、手を入れなくては氣の濟まないのが、漱石である。然しさうしてさへもなほ漱石は、「余の意に満たぬ所は澤山ある。」と言つてゐる。

漱石は、恐らく『文學論』の誤植に懲りたのであらう、『猫』の下篇以後一切の校正を人任せにしてゐた漱石は、自分自身の『文學評論』の校正に當つた。校正は既に年内から出始めた事と想像されるが、然しそれがいつ濟んだものかは、はつきり分らない。ただ明治四十二年三月三日皆川正禧宛の手紙に、漱石が「此一週間程少々心地が閑適で生命が延びつゝある。それに春風が何よりの藥だ。鶯が時々鳴く、あれは好いものだ。西洋人は知らないものだ。文學評論が一週間位すると出来る。上げるから學生に紹介して呉れ玉へ。」と書いてゐる所から想像すると、二月二十日前後には、校正ももうすつかり片づいてゐたものらしい。漱石は片方で『永日小品』を書きつつ、片方で『文學評論』の校正を行つた譯である。

日記によれば、三月十日に春陽堂は『文學評論』の奥附千枚の檢印を、漱石の所にもらひに行つてゐる。その奥附には、「明治四十二年三月十三日印刷明治四十二年三月十六日發行」と印刷してある。然し春陽堂は豫想外に注文が來たので泡を喰つたものか、それとも初版の製本部數を少くしたのか、初版全部を本屋の方へ廻してしまつて、やつと再版本を漱石の所へ届けた。それは四月三日の事である。即日漱石は一部を大塚保治に贈り、それに手紙を添へた。——「拜啓かねて大學在職中にやつた講義のこりものを又出版したから御覽に入れる。もう是で大學に縁のあるものはなくなつた。大學は君の周旋で這入つた處だから夫が緣故で出來た著書は皆君が間接に書かした様なものだから記念の爲め一部机右に御備へ置を願ひたい。中は讀んでも讀まなくてもいいが可相成は讀んでくれる方がいゝ。さうして批評をしてくれゝば猶結構である 艸々」

漱石は『文學論』に次いで『文藝の哲學的基礎』と『創作家の態度』とを講演し、その筆記を訂正して、一つは新聞に一つは雑誌に發表した。然し漱石はこの『文學評論』の訂正以後、全然かういふ『文學論』的なもの、もしくは『文學評論』的なものに、筆を染めなかつた。漱石は後に、明治四十四年の夏、頼まれて方方講演をしてゐたが、然しその中に文藝論はあつても、それは『文藝と道德』といふやうなもので、文藝を寧ろその倫理的方面から論じたものであつた。晩年漱石が、無私の態度で書かれた作品が最も尊重すべき作品であるといふやうな考へを懷くやうになつてから、漱石はその立場から「文學論」を纏めて、何所かで講義して見たいやうな口吻

を洩してゐたが、それは漱石の死によつて、到頭實現されなかつた。修善寺大患以後漱石の作風は、次第に大轉回を遂げてゐる。晩年の漱石の「文學論」が、漱石の修善寺大患以前の『文學論』や『文學評論』とは、可也違つたものになつてゐたに違ひない事は、十分想像され得る所である。然しそれがどういふ内容を持つ筈のものであつたかは、徒らに揣摩憶測を逞しうする以外、今となつては、明らかにする方法もない。

昭和十一年九月十八日

小宮豊隆

昭和十一年十月五日印刷
昭和十一年十月十日發行

漱石全集第十二卷

(大森製本)

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社







